

明治三十一年十二月十三日發行

(非賣品)

# 北辰會雜誌

第七拾號

第四高等學校



北辰會雜誌第拾七號目次

論說

天才論 教授 大島 義 脩  
 辰章校々風の現在及び過去を論じて將來を  
 新來生諸君お望む 高 橋 亨

史傳

ラフ井ツト 潮 來

雜錄

讀史雜談 教授 浦 井 恒 堂  
 一日半の近郊見聞記 教授 市 村 塘  
 白山の家苞 峻 嶽 坊  
 醫王山近傍植物採集記事 島 定 保  
 先師晋齊松田先生れ靈を祭る 垂 東 仙 史

文苑

聽禱衣 花 廼 舍  
 七月集日大堰川ホて舟遊ける時

よめる歌并反歌  
 海上月歌并反歌 福 井 喜 彦

和歌十首  
 今様四首

電光石火

零余子集

能登紀行

人狐説

詩十四首

批評

本誌第十六號概見

山本彦太郎

雜報

望新入學生諸君。新任教授略歴。卒業生人名録。時  
 習察。第二高校盟友の熱誠と答へて我半千の  
 同胞に檄す。此他數件

附録

本州横斷并に西國巡禮紀稿 豐 泉  
 温泉日誌 風柳庵主人

北辰會雜誌第拾七號

論說

天才論

知天之所爲知人之所爲者至矣知天之所爲者天而生也(莊子)

大島 義 脩

人各能あり不能あり、能者之を才と曰ひ、不能者之を不才と曰ふ。才は天の與ふる所、學で得べきに  
 非ず、勉めて達すべきに非ず、而して才に大あり小あり。一技よ秀で一能に長ざるもの皆才と謂ひ  
 つべし。人誰り一技一能の稱すべきものらんや、學に優ならずば則藝よ巧なるり、言に敏からざれ  
 ば則行よ強きか、理よ聰たもれあり、情よ精まもれあり、或は博きを以て勝り、或は深きを以て得  
 とす、乃至穎悟と曰ひ、巧者と曰ひ、器用と曰ふもの孰も才よあらざるべき。然れども是皆才の小あ  
 るもの所謂 Talent 是也。其大あるもれお至ては即古今を絶し、東西に亘り、僅に有て稀に見る所、  
 尋常人の規矩を以て律すべからざるもの Geniis 是也。天れ人よ與ふる所以れもの何人の之と享  
 けざらんや、然れども其大に人に與ふるは則其數限あり。其最大なるもれに至ては、プラトンは思  
 辨に於ける、デモステネスの辯説に於ける、釋迦の宗教に於ける、孔子の道德に於ける、シエキス  
 ビアの詩に於けるが如き、千百年にして僅よ一人あるものなり。  
 吾人よりして天才を觀るは關東の野に在て富嶽の雪を望むか如し。吾人と其秀麗の氣ふ感じ、自ら

胸襟を清うするを覺ゆと雖も、身其一唱を踏むこと能はず、手其一角に觸ること能はず、况してや其一塊を掬して自家籠中の物とあり得んや。然れども吾人は天才の事業を觀、其製作を鑒みて、其凡俗と異なる所を比較考察するとき、天才も亦吾人攻究の資料とあり得べし。政事家軍人は之を歴史傳記を求むべく、美術家ハ之を其遺作に求むべく、詩人學者ハ其著述の存するあり、其他のもの亦各遺跡に就て稽ふべしあり。必ずしも心理學を言はず、必ずしも生理學を言わず、亦人類學人文史の考究に限るにあらず、あらゆる方面より攻究して頗る趣味ある問題と此問題あり。

余今自ら進んで此攻究を成さ、其所見を示さんとするに之をわらさず。此の如き攻究の一資料として、天才自己が天才論を諸君と共に聽かんことを欲するを、余と先づカントの天才に關する説を紹介せんと欲す、イムマニエール カント不世出の才を抱て千七百二十四年キ、ニヒスベルヒに生れ、千七百八十一年其「純粹理性批判」を公にせしより思想界の大勢を一變し、近世哲學の泰斗と仰がれたるもの。此れ如死天才自己が天才に就きて語る所特殊の趣味なくんばあらず。請ふ諸君と共に之を聽かん。

カント曰く、天才とて技術に法則を與ぬる所の才あり。才といふ天與の能と言ひ、生れながらにして有する所なり。技術家は自ら其法則を作らざるべからず。他の模範を拘泥し、一種の形式に束縛せられて、其自由創造を失ふの技に至るもこれにあらず。技術家は自己の立法者なり。此法則を敢て他を摸せず、亦他を倣はしめず、其技術ハ自己の獨得の法則を與ふ、之を創意(Originality)と曰ふ此の如き法則は思想を以て案出せざるもこれにあらず、亦記述して他を示すこと能はず、唯自家ハ心理

を默契悟得し、而して自己も亦其然る所以を知らず。實は是直感的法則にして、概念を以て現示すべからず、従て亦學で得べきものに非ず、勉めて到るべしものにあらず。其之を得るや、一定の妙訣あるに非ず、卒然として天より得ざるが如く、自己より發したるが如く、其由て來る所を知らず。凡庸の技術家が製作する所にも亦法則あり。此法則は一定せるものにて、之を列舉し、必ず守るべきの箇條として、掲ぐることを得べし。天才の製作も此法則に遵はざるにあらず、唯彼は此法則以外に於て、更に幾多の法則を有す、箇條かきとして列舉すべからざる底の法則を有す。之を繪畫に例せば、布着色運筆の上に於て、一定の法則あるべきや疑ふべからず。何人も皆此法則に外に出づべからず。然れども、如何にして丹青の妙境に入るべきかは、一定の法を以て律すべきにあらず。僧雪舟の造詣せる所如何、心を以て心傳ふるを得べし、指し示して導くべき方針はあり。此に至ては天才自家も如何にして之を得たりしやを言明するも能はず、之を入神の技と言ふ。英語にて inspiration と名くるも是是なり。ゲーテ曰く、

In ganz gemeinen Dingen

Hängt viel von Wahl und Willen ab, das Höchste

Was uns begegnet, kommt wer weiss woher.

(日常の平凡なる事物は吾人の選擇及意志に依るに多し然れども吾人の遭遇する最高大なるものは其何處より來るを知らず)

又曰く

Ja, das ist das rechte Glais,

Dass man nicht weis,

Wenn man denkt,

Dass man denkt:

Alles ist wie geschenkt.

(人の考ふるや其考ふるを知らず總て與ふる所の者有て然るや如きは當に執るべきの道なり)

天來入神の妙を言へるものあり。

カント以謂らく、(一)創意及び(二)入神の外、天才は亦(三)師表たるべしものなり。其事業製作の永く後世に師表として垂るべきに非ずば、獨得の創意も、無稽のものたるに止まるべし。然れども師表とは他をして摸倣せしむるに謂に非ず。天才と他と摸倣せず、亦其成す所の他を摸倣すべきものに非ず。摸倣の凡庸の爲す所なり。摸倣を以て天才と競ひ、相馳驅せんと欲するは、驚馬に策て騏驎を凌がんとするものなり、「唱和求才不是才」。摸倣者は既に摸範を及ばざるを自白するも、到底摸倣し得て盡くすこと能はず。天才は摸倣せず、唯先人の師表を鑒みて、一家の道を開き、能く獨立して達するを求む。是に於て、始めて創意入神の技あり。一定の法を以て律をべかざるもの、豈摸倣を容るゝもれならんや、唯百代の師表として高く秀で、凡庸の手に汚されざるものは天才の天與たる所以あり。

聰明なる讀者は、既に前文を讀て推知せらるゝ如く、カントは天才を技術界に限定した。天才は技

術、殊に美術は法則を與ふるの才にして、科學界若くは哲學界に之天才あるべからざるを主張せり。學界の大自然才自己が、學界も天才あり得べきを覺認せざしは、奇異の思ひなき能はず。カント曰く、學習は摸倣に外ならず、故に如何に博學なるも、如何に多聞なるも、是摸倣の積聚のみ、未だ天才と言ふを得ず。又縦令思考研鑽に依て、前人の未だ考へ及ばざる所に及ばし、學界に於て許多の創見を發するも、亦之が爲に、此の如に頭腦を天才と名くべからず。何とされば、是亦學に到るべきものにして、其發見と尋常の攻究法、又の思辨の法則に違ひ、決して其中に自家獨得の法則を寓することなし。勉めて學ぶとせば、何人も其蘊奥を了解するを得べく、摸倣は巧なるもれば、同じ法則を用て之に凌駕するを得べし。技術界に於て自力悟入すべき妙境あるの比に非ず。ニュートンが不朽の著、プリンシピアに述作せし所のものは、其發見に際して、何等非凡の腦力を要せしむる關せず、何人も學で之を理會するを得。然れども、詩と學ぶ者は、如何に精密なる作詩の法と、如何に適當なる教師を有するも、終ふ之は依て好詩人となるものと能はず。其故は、ニュートンは幾何學の原則を、一歩々々推論して、終ふ其大原則は到達する順路を、明瞭に仔細に指示し、後の學者をして、其歩を逐て、彼と共に其始より其終は伴隨して、會得せしむるを得ればあり。ニュートンは他人の摸倣に到り得ざる、獨得の法則を有せざるあり。之に反して、ホーメロスも、ミルトンも、如何にして其豊富なる想像、深遠なる思想を得來りしやを告ぐることを能はず、實に彼等自ら其如何にして出來りしかを知らず。従て、人を教養して、同じ道に誘ふこと能はざるあり。之を要するに、學術界に於て、耐忍と勉強とを以てせば、何人も其大成に達すべく、偉人と凡庸との異なる、單に程度の差



異は過ぎざるも。美術界は在ても、大才と庸才との異なるは、常に量の等差非ず、性質上全く異なるものあり。此れ如くにして始めて、彼天才の榮號を冠するの價值あるを見る。カントが、美術界は於ける、大才小才の差別と、性質上の差別は歸一か否か、美術界は偉人をば、單に量に於て凡庸と異なるものとし、依て以て學術界は於ける天才を否定せんとせしむ、謬論と謂ふべし。恰もミケルアンゲロが彫刻師と異なるが如く、ダンテが群小詩人と異なるが如くは、亦ガリレオハ許多の數學先生と異り、カント彼自身は所在の哲學教師と異なるに非ずや。縱令ニュートンの造詣は、後輩の者歩々推理して、學び到るを得るとするも、彼が此の如き發見を成せし所以の着想、即ち、彼は如何にして、此推理の緒を想ひ浮べ得しかの順路は、學者の窺知を得べからず、ニュートン自らも、明に指摘して語るを得じ。其思想一旦勃然として湧出せし後か否かは、一步又一步、推理の歩を進む、一定の法則に遵て、結論せしと明かりと雖も、此の如き思想は湧出せし源を溯て考ふべし、亦茲は天來の妙趣をくんばならず。吾人はニュートンを理會を得べしこと、猶ホーメロスミルトンを理會し得べしと異ならず。然れども、之を學で、ニュートンたる能はざることを、亦ホーメロスミルトンたる能はざるに異ならず。カントハ何人も、自家悟入の工夫なく、單に摸倣を依りて、カント彼自身は如死學者とあり得べしと思へり乎。彼非常の天才を抱ひて、自其天才たるを悟らざること、不可思議と言ふの外あり。

何故天才と摸倣すべからざるか、是一定の法則を以て規定すべからざるを以てあり、即ち天來の創意を要すればあり、唯此創意の素あるもの、換言すれば天才あるものにして、始めて、天才の製作と師表とすることを得べし、即ち天才を識るもれば天才あり。而して、天來の創意なるものは、其發するに當り、天才自ら其何なるを知らずと雖も、吾人は其蹟に就て、之を推し、之を稽查し、之を解拆し、其何なるを知るべからざるか、其間心理的推究を容るゝの餘地はなきか。固より天才が技術に與ふる法則は、之を分拆して説明し得べしものにあらざらざるも、此の如き法則を與ふる、心的作用の活動は、客觀的攻究の問題として、好題目にあらずや。吾人は最カント不聞かんと欲する所と、此問題の解釋なり、而してカントは是に至て黙々たり。カントハ天才の何なるを叙述せり、而も之が説明を與へず。是最遺憾とすべき所なり。之を論じて更に詳なるものは、獨乙哲學の奇方アルツトルシヨペンハウエルあり。シヨペンハウエルはカントの流を汲み、更ハ印度古典の思想を注入し、茲ハ新生面を開き、其議論弱氣縱横、ヘーゲル以後の一人として、學界の明星なり。吾人をして暫く、其説く所を聴くべし。(シヨペンハウエルの論は頗る長きに互る請ふ次の發行を待て紹介せん)

### 辰章校々風乃現在及び過去を述べて 將來を新來生諸君に望む

高 橋 亭

尾山城邊。雪氣鬱勃森陰として。妖あるに似たり。流言あり。細雨凝々の夜。啾々として鬼哭を聞く。低らば。弱かば。激越憤慨。慨するが如く。訴ふるが如し。其の哭するや。一天翻壘。陰風四起し。毛髮盡く悚と。怪む可き哉。此の冤鬼。夫れ何にか在る。尾山城は鬱として大封百萬の恨を呑み。古柏九天を吼え。雉梟夜々帛を裂く。冤鬼若くは此に在る。然りと雖。故城今も北陸の雄鎮とな

り。越々たる武夫五千人。朝も夕もこゝに演武し。こゝに練胆す。故城亦以て快然瞑すべし。冤鬼愈怪むべし。人あり傳へて曰はく。夜々の鬼哭ハ。城下一望の平野に在るが如しと。異なる哉。異なる哉。城下の平野にハ。赤厦巍然。北陸の幼大學辰章校立てり。彼の冤鬼何爲れず。此の聖地に駐跡して。而して激越の哭をなす。漸くにして人言驗あやど。夜々辰章校々庭。綠叢雨に咽ぐ間に鬼哭を聴く。嗚呼此乃冤鬼。よの校の精靈か。此校の正氣か。抑亦此校の元氣か。恨むる所あやとて哭するか。慨する所ありて哭するか。抑亦悲む所ありて哭するか』

辰章校生れてより十一星霜。軀幹漸く長じて。將に成年に達せんとす。校舍は年々に増築せられ。大棟の碧華。層々相望み。朝暉夕陽。長へに相映煥して。北陸第一の大建築となれり。若し夫れ教職員は深泓切實と。生徒の勤勉勵精とハ。亦世間の認むる所。嗚呼何の慊か。ざる所ありて冤鬼此に哭するか。

山は高死が故に貴のらず。樹あるを以て貴しとす。地は低さが故に尊からず。穀を生するを以て尊しとす。學校は校舍美なるが故に榮えず。生徒多きが故に榮也。生徒多きが故に盛ならず。學術高尚なるが故に盛なり。學術高尚あるが故に尊ぶ可らず。其の中に磅礫する元氣旺勃。宇宙を眇する者あるが故に尊きなり。若くば冤鬼の哭する。此ハ慨する所あるか。

樹草を觀よ。幹根の涵養蓄積せる精美ハ。華之を發す。文學ハ時代の精華なり。故に平安時代ハ優柔文弱ハ。源語昭々として千古に露はし。春秋戰國。殺伐の極。天下の靡然として厭世樂天。若くは功利術數に傾けるハ。南華の經。國策長へに之を示す。羅馬全盛時代ハ。文學の豐富典麗ある。中世暗

黒時代に文學の地お委せる。文學に由て其乃時勢を推測せば。常に正鵠お當らざるなし。而して我が辰章校精華。北辰會雜誌の現況ハ奈何。曰はく論說。曰とく史傳。曰とく文苑。曰とく批評而して雜錄雜報。四百の青俊が。鍛心彫腸の文學。羅綺として此に煥發せらる。美や則美あり。艶や則艶なり。將た其の美艶といふの外。歌々たる元氣の一貫する者ありや。惜むべし。僅に短歌片詩の端ハ巧を弄し。半雅の文に綺を銜ふ。而して論說を出す者。亦終に古人ハ陳糟を嘗めて。紙を塞ぐに過ぎず。氣魄あるの人ハ。假令其の論盡く條理不當と雖。必ず駭衆の文字を出す。元氣中ハ盤て自ら外に溢るゝあり。嗚呼我北辰會雜誌ハ。中世平安優柔ハ代。學識なく。氣力なき。才媛純袴子が。深閨に紅筆を染めて。花風月を歌ひ。白元の集を誦詠摸倣せる。懶惰文字の迹なきと稱せらるゝか。辰章校々庭二里。亘々として健兒の横溢跳梁するよ任かず。元聲堂少ありと雖五十間。柔術擊劍弓術。皆其具を整備して。壯夫の飽まで咆吼雄飛するを待つ。學校の生徒ハ運動の途を啓くこと至れぬと云ふべし。而も校庭は常に甘艸再々として蔓て。兵式教練ハ外ハ。絶て健兒ハ足跡を見ず。僅に其片隅百歩ハテニス場ハ。草まて。時に十數人の。ムム球を追ふを見る耳なるは。何ぞや。元聲堂ハ。鼯鼠鳴いて氣寂に。竹刀稽古衣の。无聊を歎するを見ざるは。稀あるは何ぞや。

春期。風習々氣暢び足自ら輕たれ行軍也。平素大言壯語する人々乃。一銃一劍の重に逡巡して。從軍人數ハ決して二百五十と超ざるは何ぞや。況んや又。從軍の人にして。六里の日程に足晚れ首僂ト。隊に后れて。或は銃を他お托き。或ハ二人協力して提げて。尙喘息を憫狀の。頻々たる。運動の不振と參看して。奈何の消息を洩さんが。宜あり矣黒天細雨の夜。激越憤懣ハ鬼哭の。恨を世に訴ふ



者かき非ず。概言すれば。北辰會雜誌の其れ學術と審美とに於ての進歩は。往年學友會時代に數歩武を進めたり。而るも余の終に。學友會雜誌の。一片耿耿の生氣の冲天する者あるを。慕はずんばあらずあらず。左に抄出せる所。亦聊其の面目を認むべけん。

## 學友會雜誌第二號

## 點 論

深町鍊太郎

或人予に問て曰く。予は點を賤むとさく信か。予應て曰く。否。點の實の表なり。ゆりて賤むべき。曰はく。然らば何ぞ點を求むる者を賤むか。應て曰く。名士の貴ぶ所あり。然れ共。名を求むる者と君子之を賤む。點亦然り。蓋し實ありて而して后點あり。點ありて而して后實ある非るあり。實之本あり。點は未なり。若し本を棄てて末に奔るべくんば。點を求むべくして實は求むるに足らざるなり。苟も本を務むべくんば。亦何の暇ありて。點を求めん。……是を以て。學生皆争ふて點を得んと欲す。其一文を綴り。一書を讀む。必要の爲にす。若し之は點を付けざれば。彼等又勵まず。謂へく。既に點をつけず。何の爲に勉めんと。彼等も實に點の爲に勉むるなり。點の爲に勵む也。彼等の眼中唯點ある耳。豈に憐むべきに非ずや。然れ共。點の爲に勉むれば猶可あり。點者の點に於けるや。其の智を用ひざる所あり。彼は試験に點を取るべきを知る。故に竊に點を取るべき者のみをつとめて。自ら勉めざる爲て曰く。我は遊ぶ耳と。何ぞ知らん。是れ人を欺くの術あるを。彼既に其心を點に專にせり。故に一度試験に臨み。其の成績却りて人は過ぐる者あり。教師之を觀て曰く。彼は才子なり。彼平日勉めずして。却て勉むる者に勝れり。彼は才子なりと。嗚呼才子の價誠に低いなる。

深町君と。當時章校一方の領袖あり。此人として此壯雄の言をなす。闔校の風尚瞭々として察すべきは非ずや。

## 學友會雜誌第三號

## 志 論

堀内秀太郎

試し小學校に兒童あり。彼等が職として社會に立たんとする所を問ぬ。曰く。陸海軍の軍人となりて。異域を蹂躪せん。大學者とありて。前人未發の眞理を發見せん。政治家となりて。大に國運を盛ならしめん。商人となり。貴巨萬を積み。殖産を業として。一國の富源を開かん。其對ゆるや千種萬別。而るも皆功名富貴。手は唾して取るべしとなす。故に其言や粗大。意氣八荒を吞むの概あり。己にして漸く長じ。學殖日に深く。見聞又日に多く。漸く世路の辛酸を思ひ。英雄や豪傑や。皆容易に及ぶ可はずとし。人世は果敢なきを觀て。安逸の念從て起り。加ふるに自家の伎倆を顧念して。以て大に爲すゆるに足らずとなし。小成に安する者滔々皆是なり。……夫れ

思を至遠に及ぼし。事を不到に慮るは。吾人の當に勉むべし所。而るも過慮細思。以て進取の氣象を害ひ。耿々の雄心の消磨する。是豈に吾人の爲すべき所あらんや。今乃時何の時乎。人種競争の風潮。逢々として渾圓球上を遍ねく。各色の人種到る處に闘ひつゝあるあり。我蒙古人種は。未だ毫も白哲人種に輸する所あらず。其超乘して彼等の上に出る者。亦少しとせざるあり。嗚呼我等か前途は多望あり。我有爲の青年はた何を苦しみてか。半死に老人を學び。退嬰自ら喜ぶことをなすや。

この他第六號に於ける。芝湖迂童の片篋漫語。第五號秀巖の立山紀行。第七號の日置蓬心は豊秋津洲。皆當時の校風を發揮する者に非ずや。

剛樸ハ仁に近くして勇に似たり。其文辭は則迂豫圓轉の妙に欠くと雖。自奮軒昂の氣は。今の北辰會雜誌の。徒ら綺言鹿語を臚列する不孰や。嗚呼此に由て。既に當時の風尚の。今と大に異なる者あるを知る可きなり。

(二) 廿六七年頃の運動部の極盛なりと

内に英氣の盤る者と。自ら外に發せざるを得ず。武士道の隆盛時代の武術に之に伴へ。希臘全盛時代のオリンピックや競技は古今并ぶ者か。志氣の消長は運動の原にして。運動の振否は志氣消長の果なり。而して我辰章校。廿六年頃の運動部ハ。殆ど現今を以て度るべからざる者あり。僅に學友會誌上を載せらるゝ所を以てしても。今の狀況に目慣れ耳熟せる人は。等しくこれ辰章校のど。茫然自失すべし。

廿六年三月卅一日。出羽町練兵場にベースボール大會を開く。戦争數刻夕陽の西に傾くを知す。

劈頭第一に。予の眼を眩せしめて。心裡に不盡の感慨を漲らまは。實に第二號誌の此記事なり。當時學校生徒の數ハ。僅に今の半乃至五分の一あり。此の僅少の人員にして。一里の校庭を狭しとして。去て大鵬の翼を出羽町の練兵場に搏して。夕陽は没するを惜む。等しく此を辰章校と。歲月僅に四星霜あり。而して月驚霄壤。余又云ふに忍びんや。

廿六年二月廿九日。大雪を犯して。遠行部の九員。金石松任に遠す。此の記事慷慨。志氣の不振を罵て餘すなし。惜むらくば。この九先輩を去て。今の辰章校を見せまめざるを。

四月十八日。種樹式終りて。劍術部會員は城南大乘山に野試合を舉行す。試合前後二回。前者勝敗なく。後者利白軍に在り。(此日兩軍進退度あり。旗幟明に。自ら古風を見る。)來り會する者。凡百五六十。内試合お出る者七八十。試合終り。一同環坐杯を擧げ。歡を盡して退散す。時に午後四時。

是に至りて予又贅を贅す。且夫當時の記者は。誇大の筆を用ひず。平々叙々來る處。其頃の校風也。此を以て殆ど平常事と做し。裝飾して外に誇る不足らずとなせる者。歴々として眼に映し來りて。懐古の情を天を仰がざるを得ず。

四月六日。委員會を開いて運動各部の目割を定む。

劍術部日水金。

弓術部火木土。

フットボール金。

ベースボール水、土

ロシテニス天氣次第

當時辰章校の英氣の鬱勃や。猶傾け盡す不足らず。暑中休暇を以て。擊劍朝稽古をなす。

十月に至りて。竿頭更に一步を進めて。ベースボールの晴天あれば日々開會し。遠行部は臨時之を催すと。定む。而して規約空文に屬せず。廿三日。秋季皇靈祭の休日を機として。佐々成政の舊趾。松根に遠行す。嗚呼此の尙武勤儉の諸氏にして。此の英雄興亡の跡に遊ぶ。此れ聞の消息。豈に長袖者の窺知ざるを許さんや。



十一月五日。秋季大運動會あり。今の人乞ふ記せよ。この運動會番組中に。ベースボール。ロンテニス。の加とりて。而かも尤其の重なる者なり。芝を。  
十月十一日。土曜日。遠行部那谷。遠行す。暴風大雨。而のも衆皆快然談笑して。那谷の紅葉と赤心を映照せしめて歸る。

十一月十八日。出羽町練兵場。ベースボール空前の大競技あり。此の日の競技の激越勇壯は。妄に筆を誇大に用ひざる記者をして。

ベースボール大會。同十八日。出羽町練兵場に。ベースボール大會の催あり。こまに實に必勝俱樂部と養浩俱樂部と。乃決戦の日。兩黨が數週前よりの鍛鍊の結果。一に繋て此日に在り。午前十一時。兩黨の猛將勇士。輕裝練兵場。集る。やがてゲームの始されり。新製のネットは用ひられたり。或はサクセスして誇り。或はアウトして絶叫す。ピッチャの勢と。キアツチアは勢と。利益高まれり。而して遂に十九に對する五の割合にて。全く必勝俱樂部の勝利に歸すと叫ばしむ。あの記事を讀で。神往魂飛せざる者。辰章校。忠實の士に。非ざるあり。

既して星斗一轉して。新曆發せられて。廿七年來る。運動部は隆盛の更に衰へず。四月十七日。廿六年十一月十八日の競技を相對して。永く辰章校運動部に特筆すべき。ベースボール大會あり。記者亦筆を舞ひて。盛況を寫して曰はく。

ベースボールマッチ。十七日己丑。ベースボール部必勝俱樂部と。養浩俱樂部とのマッチあり。「ボールワン」。「ボールツ」と數ある「ピッチャ」。取落して狼狽する「キアツチア」。「フォルド」にて討死する「バッター」。球にて目を打たれたる「サードベース」。「フライボール」にて首取り功名する「フィールドコン」。天竺回りを打たれて仰ぎまつ。「セコンドベース」。「フェーアヒット」や。「ファウルヒット」と呼ぶ「アンパイア」。千態萬狀。名狀すべからず。勝負も中々定然難くて。恰も甲越川中島の如き觀あり云々。

ロンテニスの盛。前後無比あり。

ロンテニス。咲く花と共に榮ゆるボール。終日晴空に舞ふ。鳶の舞はざる日はわれ共ボールの飛ばざる日はなしと。法螺吹く人もあり。

四月十一日。校庭又々野試合あり。了りて和氣洋々。滅多汁を啜る。記事勇壯。當時は颯爽の風來。猶目。新あるが如し。

嗚呼。校庭の大榎。年々古枝朽れて新枝生じ。古松根益々蔓りて。翠影將に百歩に盈さんどす。校庭の風物依然。校庭若し靈あらば。當小泣いて而して泪濁すべし。

既にして校内の紛紜。學友會解かれて。廿八年復。北辰會成る。運動部の消息。北辰會雜誌第四號之を洩して曰とく。

ベースボール。聲なれど何の雲雀。練兵場の綠野。晴空にボールの舞はぬ日なし。是養浩會有爲俱樂部。相對峙して技を練るを。若夫修練稍熟するの日は。花々しく大々的マッチを施行せよ。頃來學校のクラウンド常々寂寥の感なき能はざるなり。唯時習寮の連中か。縷乃如き氣炎を以て。此れ技を闘す耳ありしが。其も今。見るを得ず悲哉。

ロンテニス。に至ては大お然らず。時に光炎萬丈。塙外道路の人。足を爪立て去る事能はざらしむるに至る。盛哉や。

霜を履で堅氷至る。誰の知らん。此時に既に。運動部衰替の萌して。而して漸次今日に至れるを。廿八年十月北辰會誌第五號に。運動場の秋の寂寥を歎ず。此に至りて運動の不振ハ學友會時代と別校の如く然り。只一點の微光の。闇天の一方ハ認光るハ。端艇ハ此時に成り。十里ハ蓮湖。長へに我校ハ占領ハ任りし。事あり。然れ共僅にこの一技を以て。野球、蹴球、柔劍、の壯技の隆盛に代へしハ。深く慨きて而して慄せざる可らず。蓮湖地の佳ハ則佳者ト雖。甚遠隔りて。凌霄の血氣常に之に灑く可らず。况んや又。艇數の甚少きをや。予ハこゝに辰章校運動部衰替第二期ヲ唱ひて。長太息筆ヲ投せんことを。其の以下の事に至りてハ。則實に現況の如シ。噫嗟。

(二)生徒の間明黨あり相競争奮發し彼一步我一步此の間の辰章校は英氣常に溢れんとす。由來辰章校は。加藩と故森文郡大臣の方に由り。萬艱を排して金城ハ設立さる。其の加藩ハ負ふ所や少しとせず。且地勢偏局して。未だ以て天下の青衿をして。足を北西に向けしむるに足らず。當時の生徒は。重ハ石川縣の青年として。而して其の牛耳を執る者ハ。實に加藩の子弟なり。是に於て。同氣相結び。同郷相黨し。石川縣人ハ打して一團とあり。辰章校ハ跳梁せり。時勢漸く進で教育普及の。他縣ハ青俊。亦駭々策を此ハ解くや。文無く。これと相軋るに至る。其の始や内に含むに過ぎず。雖。兩者の勢の甚だ相隔らざるに及びて。洪水ハ河口ハ如兇者あり。平常河水の穩あるに當てハ。海水亦甚だ妨げずと雖。今や氾濫滾々の河勢は。こゝに海水を激して。其の會する所。巨浪怒濤。相衝き。相打ち。彼一進すれば。我一進し。爆然轟然。肝膽爲ハ寒く。或ハ運動に。或ハ文學の。其の競争の極ハ。或ハ一校の親和融永に於て。間然すべきなきに非ずと雖。當時の辰章校ハ志氣の靈活ハ。寧ろ黃金時代と稱すべきに非ずや。

(四)廿八年十一月ハ至るまで雜誌に校風を云ふ者なし  
廿八年十一月。始めて編輯員の名の下に。「噫我が辰章校々風を奈何せん」と云ハ一篇の悲文字あり。假令其ハ説く所。盡く適切ならずと雖。而かも依稀の間に。辰章校風の萎靡不振を慨し。この救濟策として。

一、學校ハ第二の家庭かり。路傍の驛舎に非るあり  
一、校長教師ハ第二の父兄あり。風來ハ官吏ハ非るあり  
一、寄宿舎を増築せよ。而して之ハ爲に自治を許せ  
一、全校一致の運動を獎勵せよ

一、制服制帽の着用を勵行せよ  
といふハ六條と數ふ。其ハ策今を以て見れば。決て盡さずと雖。校風振張を説くの第一聲ハ。此ハ許さんとす。二十八年十月よりして前は。第一高中の。校風ハ刷新若よの聲の四方を動すハ。實として我校々風を云ふ者あり。則此時の校風ハ英靈活潑。一も歎すべハ者ありハ由るに非ずや。

(五)廿五六年頃ハ生徒の服裝の甚質素あり事

藤氏の世。天下太平にして。優遊柔惰の風をなすや。奢侈靡然として起る。玄宗亦然と。羅馬亦然と。



り人情優長に流れ易し。武斷活潑に由て競争を醸し、辰章校の。其の和平に復するや。其の反撥として。自個の境遇に歎然たるを感じ。數年來の鬱せる者一氣に發瀉して。争ふて優柔に流れ奢修も陥ふんとせり。若し夫れ當時に先輩にして。少しく古今の弊に留意して。今の過渡時代なるを思ひ。巧に楫楫を操らば。或はこの甚しむに至らずして。文武相濟ひ陽々の校風に新生面を致せる亦知る可らざりしかり。而かも策此に出でず。亦自ら時世の渦中に捲し去られ。遂に雜誌元氣なく。運動萎靡。陰雨黑夜激越憤慨の鬼哭を校庭に聴くの今日を致せるは。予の痛悼慷慨に堪へざる所あり。然と共。極端に走れる者の。復た漸く舊道に反動す。回顧すれば。嚮に第二高校の發に應じて。隅田に競艇を諾し。闔校六百。皆貴を醜して撰手をして后顧の憂をのらしめ。撰手の又蓮湖に堅氷を破り。棹櫂の凍氷を握り。重任を双肩に荷ぬて。切齒鍛鍊に従ふ。或は野球部の。時に大にゲームを行はんとする傾向の見ゆる。或は文科生のロンドンに熱心して。放校後休日に日の没するを惜しむ等。觀來れば。校風改善の曙光の。天の一方に見ゆる者に非ずや。

夫れ學校は校舍美あるが故に榮えず。生徒多かり故に榮ふ。生徒多かり故に盛ならず。學術高尚あるの故に盛あり。學術高尚あるが故に貴ぶ可らず。其の中に磅礴する元氣旺盛宇宙を眇する者あるが故に貴ぶあり。今辰章校の校風の萎靡は。必ず其の生徒の誓て宣揚せざる可らざる者あり。而して今や其れ極まる所。復舊の微光の時に現るゝ者ありに非ず。好機に逸すべからず。此に大に公共勇壯の運動を勃興し。古昔英雄の傳奇を熟讀し。奢侈に遠かりて質素を務め。善く遊び善く學び。膽を北溟に怒潮に養ひ。節と白峯の皚雪に學び。舊時の尙武勤儉の辰章校を復活して。光炎を

北陸の天に漲らし。東南平野の和平兒をして駭胆喪神せしむ。而して事固より闔校の絶大事に屬すと雖。然れ共。吾曹の最深く且厚く。自今在校年月の。尤長遠にして。而も未だ嘗て現今の校風に染まざる。新來生百五十余れ諸君の身に望を屬せんと欲と。諸君希くは。予を以て徒らに辨を好む者とあさず。採るべきあはば採り。捨つべしあはば捨て。誓て辰章校々風の發揚を努めよ。嗚呼尾山城下平野の鬼哭は。諸君を待て始て已れしむべし。

## 史 傳

ラ、フェイツト

潮 來

人生の最大快事は眇然たる六尺の軀を以て世界の人物とあるを快なると云ふ。人生の最大奇觀と稱すべきは北米合衆國の獨立と佛國の大革命とに過ぐるもれあし此の二大奇觀の旋渦中より立ち挺然として其の底柱となり意氣は一世を蓋ひ勳業は東西二大陸に跨り芳名は永く後昆の腦裏に印されて決て消磨せざるラ、フェイツトは實に世界の快男子と云ふべけれ。況や身は一貴族の公子を以て薄俗澆季の世に生れ年僅に壯にして萬勝算をさ米國に獨立戰爭を助ぐ以て此の絶代の偉勳を奏しざるを思へば其の凜たる義氣益々以て多しと云ふものあり余曾て詩あり

慷慨夙懷天下憂

挾霜義氣自千秋

休言紉終不任事

歐米功名隻手收

措辭拙劣にして觀るに足らずと雖もラ氏の勳業を頌するに於ては私に其れ萬一を冀へり今之が

傳を叙する豈偶然ならんや、

千七百五十七年十一月六日を以てオーヴェルヌ州のシアヴハニヤック城に生る、家世々佛國の清族より、侯ハ初めオーヴェルヌの或る學校に入り稍々長して巴里に遊びプレツシー専門學校に入る侯の父ハ未だ侯の生誕に先ちメンタレの役ハ斃れ母は侯が巴里遊學中に長逝しければ侯が幼時は零丁孤苦常ハ憂愁れ中に經過せり母氏既に没し其ハ遺產頗多かりしハ侯は年齒僅に十六歳にして早くエイアン公ノ女ノアイユ嬢と婚ハ姻を富有の名家に通ハければ王廷の覺之淺かはず或人侯を王弟モツシエレー伯の重宰にとて推薦ハけるハ侯は之を固辭せり蓋し侯は天資卓犖不羈にして自由を愛し人の隨使に従ふを屑しとせさればなりされば侯は行は常ハ廷臣の意に投せざるを以て遂に去りて身を軍籍ハ投テ其の心を縦ませり、北米十三州ハ侯の利器を試験するハ活劇場として設けられざるが如ク十三州の人民既ハ英國の虐政を厭ひ其の羈輓を脱せんとして兵を擧ぐるハ華聖東を推して總督となしフランクランを以て歐洲諸大國の聲援を乞ふが爲め佛國に至リハ佛人固より義俠心に富み且當時ルーソーヴォルテール等唱導セリ自由平等の説に心醉せる折柄なれば之を聞きて同情の念湧然として起テ奮然銃を肩ハ志劍を平にして救援せんと欲せり然るに滿廷の臣僚之徒に逸豫を冀ひ直接の援助を與ふるを憚り躊躇未だ決せず、時にラファエツトと出テハ職をメツツの營に奉テ偶々英國に至り英王の弟グロセスター侯より米人の義旗を擧げざるを聞き躑躅私に脾肉の嘆ハ堪はず、人に語りて曰ク「騷亂の報を聞くハ余は飛舞措ク能はず一意直ちに本營に歸りて事を謀らん事を思ぬのミ」

ラ氏は本國の地を踏むハ直ちに私賞を擲ちて船艦器械を購入し北米渡航の準備ハ汲々たり時に氏の外叔父ノアイユ侯は英國駐劄の公使たり之を聞き大に國交上の難問題を惹起せんとを恐れ且つ夫人も方に孕莞るを以て廷臣族類皆其の決意を翻さしめんと欲せしも氏が勇往果敢の氣象之區々たる緣故情愛の爲に拘束せられず蹴然袂を奮て起ち交を米國の使者に結び僅少の同志者を率ゐる未だ面だハ遭はざる愛兒を顧みず妻を捨て門地を捐て郷を離れ久しく住テ馴れし父母の國を跡に見て遂ハ身を九死一生の危地に投ぜり實に一千七百七十七年七月にして氏が年甫ハ廿の時あり佛國の志士風を聞テ感奮興起國を脱して米軍に來り投ざるもの日に多し嗚呼盛なる哉

ラ、フェイエツトハ萬里の鯨濤恙なくカロリナ州ノデヨーデダウンに到着スられたれとも尋常一様の諸國の冒險者流と同一視せられんとを恐れ先づ書をフイラデルヒヤなる國會に出テ自費を以て從軍する事と義勇兵として役ヲ服する事の二箇の希望を陳べたり、國會ハ書を得て痛ク其の義烈ハ感じ恭しく答書を草シ遂ハ七月卅一日を以てラ、フェイエツトを聯合軍の參軍に任したり、時ハワシントン兵を率ゐて費府の近郊にあり、ラ氏則ち往死て之と會見し相得て懼ぶと甚しく遂に刎頸の交を訂せり

同年十一月十一日ラ、フェイエツトはブラレデー、ワイレの初陣に挺身敵ハ當り不幸にして太腿深く敵丸に貫りれ起ちて軍を見ざると六閱月、病愈えてヴァイルデニア軍の指令官となり次で北軍ハ將としてかなたに向ひ英領地を襲撃し以て英兵の力を分さしめんと然れども衆寡に糧繼がず加之時期未だ熟せざるを以て奇功を博する能はず轉してバーレンヒル、モンマウスの等諸處に戦ひ



到る處驍名を轟かたり、殊にバートレン、ヒルの戦お利あふずして退軍せし際の進退駭引の如だ能く其の節度よ中り頗古名將の風あるを見ワシントン大よ之を嗟賞たり

時よ佛人は米人の聲援をなすに決し西班牙と聯合して英國と兵を構ゆるを聞きラ氏の書を國會よ致し本國の爲に義務を盡し事果へまば則ち又來りて共に國事に盡力すべき由を述べたりしうば國會は劍を贈りて其の勞を謝し且書を佛王ルイ十六世に呈して曰く「吾人の此の壯年を陛下に推薦するを以て榮とす彼の思慮は富を戰に臨みて畏れず能く艱難に堪ゆればなり」時に一千七百七十九年二月とす、王乃ちラ氏を擢用して將軍とす、ラ氏の佛國に歸るや上下舉りて其志を壯とし其行を偉とし巴里にヴェルサイユに到る處として歡待せられざるあり懽呼頌歌は聲街衢に滿ちくあり、ラ氏は斯かる榮譽を負える中にも米國の事は常に其の念頭を往來して小時も其の胸を離れず遂に佛廷に説き援兵を發せしむ、政府則ちロシヤンボー伯をして兵四千を引きて赴き援はしむラ氏の意見は大よ伸ぶるを得れば翌年の初を以て伯先ち再び米國に赴けり

時にヴェイルデニア州の英將アルノルド、コルシワリス二人の侵襲を蒙り敵勢甚ぶ猖獗にして米軍一さび此の關鑰を失へば南部諸州は土崩せし有様なりければ國會は大に之を虞りラ氏に乞ひ之に當らめたりラ氏軍に臨み兵寡なりと雖も勉めて士氣を養ひ鋭を蓄ひ漫と鋒を交へず持重以て敵勢を扼しければグラツス伯は此機に乗じて海上より英兵に援を絶ち遂にワシントンをしてワシントン及ひろシヤンボーの諸隊を引率して紐育より來會するを得せしめたり、是に於て諸軍相合きて英は驍將コルシワリスをヨークタウンに圍み遂よ之を降せり、是より英軍の勢沮喪して又

振はず大勢已に定まれり、是の後やラ、フェイエット及びブイオメニールの二將戰最も勉む、時に一千七百八十一年十月十七日おしてラ氏時に年二十四、大勢已に定まりければラ氏は復し佛國よ歸るよ決せり米國々會は大にラ氏よ依頼する處あり歐洲諸國に派遣せる米國公使を訓令を下し皆ラ氏の助言を待つて事を決す可きを以てするよ至れりラ氏の重望を負ふ此の如し又榮ありと云ふ可し既にきてラ氏は復た佛西二國の義勇兵八千人を率ゐて將にカヂック港より發し英領諸島を攻撃し以て米國の聲援をなさんと欲せしよ適々米國の委員が巴里よ於て英國と媾和の約を結びしと聞き宿志初めて遂けれ俄に其行を輟め後ち千七百八十四年を以て新造の共和國よ向ひて旅行を試み闔國人民の歡迎を受けり翌年歸國せり、此より二三年間ラ氏の歐洲諸國を漫遊して人情風俗を察し國政の醇漓を問ひ到る處萬衆乃具瞻を受けて國よ歸れり此時に當り歐洲諸國上は王公大人詩家文人より下兒童走卒に至る迄苟も頭を聚め言を接する時は其の話頭に上るものよラ氏の功名談に在らざるはなし

然るよ當時佛國は庸懦の君相上にあり紀綱振はず財政素亂して又救ふ可からず王后アントアネット奢侈を好し輕佻おして偏愛する所多く前後任用せしカロンヌ、ブリエンヌの如き孰れも黠作儂巧れ才にして一國の財政を料理するよ器識なく唯阿諛迎合の之れ事とま上下の情をして益々壅塞せりめら然るよ在野有志の士の間自由平等の説益勢を得て朝政を誹議する者日に多く號令下に行はれず是よ至り國費益々給せざるに至りければ遂に名士會(assemblée des notables)を召集して諮詢する處あらんとせせ、蓋し社會の風潮一波僅に收まりて一瀾又起る如く米國の革命漸

く其の局を結びしと思ふ間もなく佛國の大革命將に來んとするに會しラファエットの身も益盤根錯節の前途を見るに至れり

千八百八十七年ラ氏は撰ばれて名士會(縉紳名望家を招集して國政を諮詢する會)に入り國政は日に非にして時機の正に至れるを察し遂に國會(Assemblée nationale)を招集せらる可からざること  
を揚言せり時王弟アルトア伯驚て曰く「何とよ、君が希望する處に三民議會の謂にあらずや」と  
ラ氏笑て答て曰く「固より然り加之國會は夫れ或は三民議會より佳からん」(Mieux que cela)

當時佛國は封建の餘習未だ脱せず人々門地を尊びより社會に僧侶貴族平民は三階級あり此の三級より撰舉して招集せられたるものを三民議會と云ふ、千六百十四年以來佛國にて三民議會の招集を(États Généraux)見ると茲に百五十余年ラ氏の前言は眞に一閃の電光の間に進出する如く之を聞く人々大に驚けり、是れ於て政府と先づ地方議會を開いて責を塞き三民議會を招集せざんと欲せり然れども氏は銳意其議を唱へて已よ當時に輿論亦皆之に傾ければ宰相ブリエンヌの其の力の紛擾を制するに足らざるを知り遂に職を去りネッケル代りて相となるに及び勢の己む可からざるを察し遂に一千七百八十九年五月四日と以て三民議會をヴェルサイエ王宮に開くに至れり議員の數約一千二百人此三民議會こそ後國民憲法議會(Assemblée nationale constituante)となれるものなれり」

雜 錄

讀 史 雜 談

浦 井 恒 堂

露帝の稱號ザア

本月五日の時事新報に左の記事あり

露語其皇帝を呼んでザアとなす其ザアの語源につれてヴォルテアは曰く是を鞭撻より來れる語なりと左きども言語學者の多數ハザアとの單にシーザアの轉訛に過ぎずとせり二說斯の如くなきどもカラムジーンと稱する有名なる著者の說寧ろ正しきが如くにして同人の説に據ればザアとて東洋語なり權力といふ事を意味するアツシリア及びバビロニアは王をアラザア又ハナボナザアなど稱する皆是なり要するにアラ王又はナボナ王と云ぬの義なり云々とありと佛國新聞ゴア記せり

如何にも其説の如くアツシリア、バビロニア等の國王はザアを以て終る者尠からずサルマナツサア又はネブカツトネザア等のザアは王の意味あると疑ふし又ザアを以て東洋語とする説はヴォルテア始め歐洲に於て一時盛に行われたる説にしてザアを以て東洋語とすのみならず英語のDr 佛語の Sire は波斯の Sar の語源を同ふと論ずる者すらもあり余は佛國新聞ゴアの如何なる新聞あるのを知らされども是記事ハ決して珍しき事にあらず既に久しく言ひ傳へたる事也

り此種の説は所謂比較博言學の濫用にして例せば獨逸は城をシユコロスといふを以て日本と獨逸と其語源を同ぬーメキシコ語のワランチと我邦の草鞋と其語源を同ふといふが如く決して信すべからず露帝をザーといふハ獨逸はカイゼルと同じく羅馬のシーザアより出でーに相違なき事ハ最も有名なる比較スラヴ語文典の著者なる教授ミクロシワチ氏始め殆んど凡てのスラヴ語學者の信する所にして此議論ハ既ハ數十年前に決しゝる者とす論より證據ハ事實は露帝の始てザーの稱號を用ひまハイワシ第三世より此人一千四百五十三年コンスタンチノール府陥落のた先命を殞せる最後の東羅馬皇帝コンフタンチヌスバルネオロトグスは兄弟なるトーマスの娘ツォーを娶り其時始めて東羅馬の記章雙頭鷲(元鷲は羅馬乃記章に於て東西羅馬分裂雙頭鷲を用ゆ)を採用して露國の記章となせると同時ニザーの稱號を用ひ後イワシ四世以後歴代此稱を用ひコンスタンチノール府を占領して昔の東羅馬帝國を回復するを以て國是とあす至れり左ればザールのシーザアより來りしは明なる事實とす

三國同盟

明治二十七八年戰役に於て我國清國を壓服し地を割かしめ和を議するや突如として意外の故障起り其より三國同盟の名人口ハ噂矣するハ至れり今歴史を考ふるに三國同盟の起る事ハ前後四回にして我國ニ對せるは五回目なり第一回は一六六八年に起り佛王路易十四世ハ西班牙王フリップ四世死せるに乗じ路易の皇后ハフリップの女あるに依り西班牙領ネザラランド(今日の白耳義)を讓らしめむとし兵を起してネザラランドと占領す阿蘭國は此地にして佛國の有とならば

直ニ佛人の已れの國に侵入せむことを恐れ英國瑞典と共に三國同盟を結び佛國に壓逼を加へ其結果アクスラシヤベルの條約とあり佛國は其侵略せる地の返戻するの止を得ざるに至り  
第二回三國同盟は一千七百十七年瑞典の查理十二世に對し英佛和蘭の三國同盟せるあり但し是ハ後獨逸の之ニ加はるはりて四國同盟とありぬ

第三回三國同盟は一千七百八十九年に起れり是時露女帝カザリン不世出れ人傑を以て切小兵を土耳其に加へ將ニコンスタンチノール府を占領せむこと勢大に振へり英國普魯士和蘭の三國同盟を結び土耳其を援けて之に當り以て露國の野心を挫けり

第四回三國同盟は佛露の同盟に對し均勢を維持し歐洲平和を維持せむか爲を獨逸奧地利以太利三國の結べる者として幾分り佛國の獨逸ニ對する復讐心を挫き露の慢心を抑へ歐洲の平和を維持する小力ありや疑なし然れども所謂武裁せる平和(アームドピス)などの語出てしハ此同盟以來あり

第五回の三國同盟は日清戰爭に際し露獨佛の我邦ニ向て爲せる干渉あり

異名の問屋

恐らく佛國ナポレオン三世の如く多の異名を有せるハ無かるべし

(一) Man of December

八五十二年十二月二日ナポレオンはクーデターを行ひて反對黨を撲滅し佛國共和國を變じて帝國とあし皇帝の位に即けるに依る

- (一) Man of sedan 一八七〇年普佛戦争に於てセダンを籠城し終に普王フレデリック一世に降る
- (二) Man of silence 彼の性質に依りて云々
- (三) アレクサンダー伯 Camille d' Arenenberg 始め彼政府の轉覆を企てて捕はれハムに幽囚せらるゝや城を逃走し此名を用ひし
- (四) Badinquet 前のハム城を脱するや泥匠バチンゲーなる者己の着せる衣をナポレオンに授け守兵を欺り逃れしむ故よ云々
- (五) Boustrapa ブエーロンの Bou ストラスブルグの Stra 及び巴里の Pa を集めて云々是所ハ皆ナポレオン身を以て免れし地あり
- (六) 異名條約 佛王路易十四世盛外外國と戦ひ地を略するふと多し一千六百七十八年ニメーゲン條約に依り和蘭戦争の局を告げ同じき九十七年ライスウィック條約に依り所謂オルレアン戦争を終りユートレヒト條約を以て西班牙王位相續の戦を終る而して以上の條約に依り獨逸國の損害を蒙ること多のりしを以て獨人の之を呼んで Nim weg 條約 Reissweg 條約 Unrecht 條約と云々蓋し take away

不幸ある王室

佛國のバロア (Valois) をぞ不幸あると他に其比あかた、無事なると云はチャレース五世一人のみにて他の盡く非命に斃るゝか又ハ非常なる國辱を受たり先づフヒリツプ六世ハ英國と戦ひ大にスリエース (Sluys) 及びクレシイ (Grévy) に敗れ終ふカレイ (Calais) を英國に奪はれ國王ジョージハポアチエー (Poitiers) に敗れ擒とありて英國に至りチャレース六世ハ英國と戦ひアジエンタール (Azincourt) に大敗し己乃死後英王を以て佛國王位に相續者と認むるの止むを得ざるに至りチャレース七世と有名なる處女ジャンダルクの力に依り王位を得れども後己の子の爲めに毒殺されむことを恐るゝれ餘終お餓死するに至り路易十一世はバンガムチイお捕はれ查理八世及び路易十二世ハ以て大敗北を招き終おフランシス一世と獨帝查理五世乃ために以太利あるパビア (Pavia) に敗られ生擒せらるヘンリー二世はセンカンテン (St. Quentin) にお敗れ後比武戯に於ての負傷のため死しフランシス二世は幸に無事なりしうとも在位僅く一年よして死し弟チャレース九世の時には有名なるセントバートロミュー大虐殺起りて佛國の名譽を汚し最後のバロア家の國王ヘンリー三世と宗教亂の犠牲となりて弑虐の難に遭へり

婦人萬歳

十六世紀の終り十七世紀の始め西歐洲の重なる國々乃主權婦人の手おありしと奇といぬべし  
英國女王 エリザベス

西班牙 ヨアナ攝政たり

ネザーランド 西班牙王フヒリップ二世の代理としてマアガレット、ラフ、バルマ執政あり

ナバール 女王ジエーン位にあり

蘇國 女王メリイ

葡萄牙 母后カザリン、ラスアウストリア政を攝す

歐洲帝王の平均在位年數

英國はノルマンコンケストより現今に至るまで國王三十五人八百三十一年平均二十三年半

佛國はクローピスとりルイフィリップまで平均二十二年二月

獨逸帝はアルヌルフよりフランシスジョセフまで平均十九年三月

露西亞帝は平均十四年十月より蓋し最も短たものなり

奇運

佛皇帝ナポレオン三世と其皇后ユーゼニーとの間に奇妙ある數字的关系あり先づ奈翁は一八九六年位を廢せられければ滿一年在位なり最後の年は一八九六年なることと記憶すべし然る時は奇なる哉其即位の年一八五二年に奈翁乃誕生の年一八〇九年又はユーゼニー後の誕生の年一八五六又結婚の年一八五三年又は巴理府陥落の年一八七二年を加ふれば盡く一八九六の數と亦又結婚の年に奈翁及ユーゼニーの誕生の年を加ふれば普佛戰爭の年ある一八七〇年乃至一八七一年を得べし

即位 1852	1852	1852	1852
1809	1826	1853	1871
+ 9	+ 6	+ 3	+ 1
1869	1869	1869	1869

歴史的智識の必要

英國詩人シヨンのキーツ (Keats) の英國小年詩人の最も名ある者にして一七九六年倫敦に生れ一八一七年病を養はんがを羅馬に赴き復た起らず齡二十有一氏の On First Looking into Chapman's "Homer" を題する短詩に於て從來詩聖ホーマーの名を聞くも之を窺隠を得ずと云フコチヤンマン氏の英譯を得て喜限と云は趣を述べ終に次の如く謳へり

Yet did I never breathe its pure serene  
 Till I heard Chapman speak out loud and bold:  
 Then belm I like some watcher of the skies  
 When a new planet swims into his ken;  
 Or like stout Cortez when with eagle eyes  
 He stared at the Pacific — and all his men  
 Looked at each other with a wild surprise —  
 Silent, upon a peak in Darien.

此詩は頗る人口に膾炙する者なれど同時に歴史的誤謬を以て知らる即ち此詩にてヘルランド



ボルネオを以て太平洋の發見者となせども其實太平洋の發見者はボルネオに先つと約十年西班牙探險者バルボア (Balboa) あり而してキイツ氏は此著名なる歴史的智識を缺きしかば意外の失策を嘗て折角金玉は文章に大味贈を附けるに至れりされば歴史的查識何人にも必要なるを知るべし序ながら太平洋は名稱は此バルボアより始まるとは近來まで一般に信認せらるしが近頃の發見に依ればバルボアより始まるとにあらずして彼始めての世界週航者マガリエン (英語の Magellan) が一五二〇年十月二十七日南米最南端パタゴニアを巡りマゼラン海峽を過ぎたりし際今まで風濤も苦みしに反し至りて穩なる大海に出でしかば之を名けて Mar Pacifico (穩ある海) といひしより始まれり此誤謬は新版エンサイクロペデア、ブリタニカも於て訂正しあり

烟突掃除人

東京地方にてハ湯屋の三助又ハ米屋の米搗を呼んで越後ものといふ蓋し越後國此種は勞働者を供給すること多きを以てなり獨逸佛蘭西にては家々の烟突の掃除の爲め雇はるる者と呼ばれて Bayo-yard 又は Piedmontese といふ蓋し此地方の者多きを以てなり

國王の迷兒

英國ハノーバア朝の初代ジョージ一世及び二世とハノーバア國に生長し専ら同國を愛し事又托して英國に居らざるふと多く殊にジョージ二世最も甚しくある時ハノーバアより赴死歸らざる事二年に及び皇后カロライン空しく英國に在り國人深く之を喜ばず一夜セント、ゼームス宮殿門に次の廣告文を貼附せる者あり曰く

Lost or stysayed out of his house a man who has left his wife and six children on the parish. A reward of four Shillings and sixpence for news of his whereabouts. Nobody thinks him worth a crown.

クラオンは英貨にして五シリングありクラオン(王冠)を値せざるに依り四シリング半を與へむとあり嘲罵し得て妙所謂寸鐵人を殺す者といふべし

一日半の近郊見聞記

教授 市 村 塘

六月廿六日といふ土曜日は午後、突然近郊採集を思ひ立ち、箱を肩に、島氏と共に蠻門を出づ、目指す場所を何と程遠からぬ野田の奥ある大桑山と知られけり、市内ありく間ふ一寸珍らしく見受々しハ籬越に高く攀纏せる天門冬ありき通常は天門冬即ち特性天門冬と稱するものハ矮草にして根塊亦頗る小なり、乃ち主翁に乞ひ其花ある數枝を得たり翁曰く是南方より農業講習處へ取寄せたしてもの、一部にて金澤は無之と且年々甘薯大れもの十數塊を此一本にて採集するとかや、實に天門冬の砂糖漬として持歸さるる原料之是に外あらず翁又養蠶養蜂乃二術も長し現に飼養最中の蜜蜂巢箱三個を示せり、各發育圓滿なるが二個ハ本年分巢せるものに係るといへり夫より懇々分巢の事孫巢との關係蜂蜜採集の事など説け自著の畫學校へ寄付せらる及び先日夫は三箱より採集したる蜂蜜ハ是丈残り居れりとして一大瓶と外に蜜蠟數个を持ち出さる是を茶菓子の應接快

話は不思議時間を費したれば急ぎ暇を告げ門外に馳せ出でぬ漸く道を犀川藤棚に沿ふて上る小チャ  
ンバキク、カハラニンジン、クラ、など最も多き左側大桑瀧に近き岩壁は於て毒鉤吻ドクツツキの立派な結實  
せるを掘り採る蓋を吾植物園へ移植の目的ゆればあり、百姓其の優情ある態々其有妻なるを注  
意し呉るをも可笑しかりき程かく大桑村に到り乖角刺嚇を侵してムカコイラクサを抽き採りぬマ  
ユミ既に實を結び三葉ウツギイボタノキ花將に盛ると、左視右見大桑山に登るカタウダイヒヨド  
リバナ細辛等あり山上を傳ひ野田に向ふ間に於て殊に珍しく覺えしものとヤマトキサウといへ  
る蘭科植物なき花可愛きと云ふ許なし殊の外フウリンツ、ジアクシバの繁茂するも奇ありア  
チサイドクタンノイバラノアサシスヒカヅラオカトラノオツ、ジかど何れ劣らざる咲き揃ふ風情  
といつば今日此頃何處の野山も變らぬもの、河原松葉蟻通ともに結實す黄昏野田寺町より新  
橋を経て歸校植付を終り歸宅す。

翌朝昨日乃錯葉を終り大ホヒキガヘルを捕獲せん意氣込にて更小園丁を伴ひ大平澤に向て出發す  
出羽町練兵場のラシヤウモシカツラモ花既小放ち實漸く熟せんとし、ミクリサジオモダカ池沼  
ありて咲花さも得意顔あり途次一本松を過ぐ此邊岩壁多く清水を点滴し頗る普通は地錢苔類の繁  
茂に適せぬと見れば人家垣籬よりメダカラコウの立派な聳立せるがありき野心勃勃を禁する能はず  
主人に告げて一枝を得さり何を圖らん此屋の主人といふは吾校植物園へ折々出入せる人足ならん  
とは亦近といふべし聽て天徳院境内を經さながら土地豊饒耕作上手日當の宜しき無不足の地にや  
稻麥茄子南瓜胡瓜蒺藜凡て其發育の勢よきといふ許あり大麻島アサの饅頭形も幾等か植物生理の一試

驗と見做して可ならん咲ける花叢緑ある草木いづれ見馴れしもの、みかど就中目も立ちて紫なる  
之ウツボグサノアザシノビル白なるハノイバラアチサキオカトラノオドクダミマユミ忍冬ア  
オタゴとして赤ハツ、ジヒヤウギ黄ろきは粟溝酸漿白屈菜は類なんめりアジサキカクハナヤ  
マアチサキタマアチサキハ各似て非なるものも末中戸兩村より山路益面白くなり紅きヤマホウ  
シ花ある合法大葉シホのダイモンジサウ黄なるキリンサウ結實せるスバサイゴ大花のサ、ユリ等も思  
ひ及びて多く採りぬ合法ハ此邊の百姓共其嫩葉を日乾にし「シヨボ」と唱へ飯米に加へて食する  
者なりされば春期ハ其葉を見て合法たる知れども既小其葉も剛くちり一体に繁茂し花咲くに至  
れば平然顧みざるものと見ゆ合法の花は未だ知らずと應ぬる迂漢もありきダイモンヂサウの好で  
隠濕ある河岸岩壁に生するものもありては葉は横徑四寸許も有りて莖柄可なり太く長さ尺余も達  
す通常イハブキと稱し殊に酢漬にして食膳に供せば味頗る簡美あり又太平澤に至る間に於て左側  
の森林中に偶然四五白球懸垂せるを見認たり近づきて熟覽すれば木通アケビの纏繞せるチシヤナラは  
枝梢に青蛙の卵群り白色の圓團をさせるありき午後二時頃大平澤に着く早速村人聞くとヒ  
キガヘルの所在を以てす篤切に案内したれども今や期少しく遅れ一疋も見當らざる臍を噛むも不及  
無據多く産出の際金澤へ二三十疋持参すべしを約し此邊ウハミサウだらけなる土地清水充溢  
し頗る該植物の繁茂に適せばかかん山爺のヨシナと稱し振賣する風味ある菜ハ此ウハミサウの  
事なり尋麻科に屬す總して寒村の事として野生植物の食用に供する例甚多し一茅屋前庭も廣げある  
蓆の上へ何か乾のしてある故之を老媪に質と曰くウラジロと申し米飯に混和して食するもれと能

を能く見れば牛蒡に近死野生のヤマボクチと稱する植物の葉ありき別宮村などは一層烈しくドクダミの根を乾かき置き同煮く食用に供すと云ふ可驚かあるを聞きては、  
 歸途内川を沿ふて降り法師村に於て有花モウセンゴケ有芽胞イヌトクサの外亦採集は價值あるものなりき午後七時頃歸校す

白山のいへつと

嶽 坊

名にしおふ白山嵐に颯々の聲を破置かか未だ詣でざるもの悲しきに、まして草木禽獸の餘所に異られるが數多ありて、自然乃大を觀んとする人は一度は必ず行くべきなど、と聞きては日頃の望みの彌まよまよける、さる間、年頃、同じ心の人あも語らひて屢登らんとして屢果さるる、今年七月市村教授登山せらるゝと死死同行を願ひたるよ、いと快くすへなひ給ひぬ、爰本年頃の望成就したるれば、勇氣もみちて七月三十一日午前一時、學校の博物館に來り萬事れさく心して一時半といふに出立ちぬ、同行總べて五人、市村教授は洋装に植物採集匣を肩より脇へうけ、島助手の同様の扮装に洋傘を杖さ、杉本園丁も同様、腊葉用の紙、食糧、衣服、さては書籍などを入れたる、いと重さげある荷物は何の苦もあく、天秤棒で擔さゆくは臨時雇、笠舞生れの人夫あり、吾の洋装にて昆虫箱を肩より脇へうけ、捕虫網を構へたり、夜深きことて人の往來もなく、犬は遠吠を死、あがり、街燈の光を見あがして、野町よりかいもの名所を過ぎて、生姜の砂糠漬の辛くとも甘かふんと戸の前より吾のみ舌打ちなふして野中れ道も通り抜け煉瓦小屋の少し彼方にて休憩す、蚊公常

かかぬ匂と臭ぎ取りてにや、衣れ上より刺すと、はげーされども、笠舞君はひたすら無頓着の様子なり、如何さま地の厚き股引と穿ちたる故かふんと、近づきて問へば日に焼きたる正直正銘の肉脚あて、皮膚の厚ければ蚊も刺し得ずと答ぬ、其色の黒きとは吾如き近眼あかぬ人にも誤ると疑なし、うき空の星をかが死て、天氣を下ま、詩を吟下、謠曲を唸りて、足の勞を忘れ四里餘の途も何時しか過ぎて鶴來も入りし、山の端、やうく白み、禽も啼を出づる刻あり死、町外きの雜菓子店に腰うちかけて暫く休み、苦茶を無茶よ呑みて渴を醫ふ、朝餉をなして出づ、金澤よ鶴來までは植物の採るべ死處もあなばとして、さては、丑三つ頃より出でたるなり、鶴來をりて日も明るくなりければ、沿道何くれとかく眼につきて、只の草花も珍らし死心地一足の運びも輕からず、往來の人、異なる匣を下げつるを見て、不審の面地するもあり、中よ西洋風の煎餅賣りもやあふんと想ひもありけんかし、白山比咩神社に詣て國家安寧を祈る、此丘よて熊蟻のいと大きやあふるが居たりければ直に取きて「アルコール」に葬る、又「ハイドロクサウ」「テネカ、カツラ」「イボクサ」「ミヤマ、カタバミ」「オホバ、チドメグサ」ムカゴ、イラクサ」などを採る、下りて先へ行く程に、日は漸々高く蝶類の飛翔するもの、あち、こちよ見へて中々よ忙とし、此あたり煙草を裁ゆると夥し、近頃一種の虫、つきて其草を葉食ふとて男、女出で、虫を驅れり、各前よ藁れ一束を堅く結びたるを下げ、其尖端に火を点じ、煙草の虫を指よて採れば此にて焼き又は壓して殺す、兼ては其煙にて「ブト」を過ぐるありと云、市村教授就て三四を採り同く「アルコール」葬せらる青緑色の蛆にて長さ大なるも一寸を出せず、又盛んに石を切出す處あり、途れ左方よて、右方よ手取川、洋々として

流れ此邊、對岸一帶に地文學上の階段「Orifice」をなし、巖石巨大、奔流れ中央に矗立するもあり、半ば空洞とみえて水其間を派るゝもあり、碧潭渦きて響轟々たるもあど、總じて姿、壯嚴にして賤しからず、人力を加へずして自然に任せし故にや、此間にて。實に毒ありといへる「エゴノキ」、十文字鎗に似たる「十文字シダ」、仙人の白髪にも似せたる實を有てる「センニンサウ」、實は是と同じけれども葉は牡丹に類する蔓草の「ホタン、ヅル」正木のあづき「アラツツラ、フジ」、左れみ美はまぐもあづきの誰が名つらゝん「クサノワウ」、赤き舟を釣り上げるは「ツリフネ」名に似たる「オミチ、ヘシ」、其を女郎花と書くあづきは是の野郎花と書くべし「オトコ、ヘシ」、世の人の「フヂバカマ」と同じさものと誤り易し「ヒヨドリバナ」、煙管れ皿に似せる花れ「ガンクビ、サウ」己が實は熟すれば節毎に離れ、人の衣に着きて取去らるゝを、却て心よもなれ名を蒙りし、「ヌスピトハキ」、名は恐ろしげなれども花は白く長き穂をさしるゝ「ヌマ、トラノヲ」、此と兄弟の「オカトラノヲ」、諱いげに見せかけて、手を觸るまば嚴しを刺し容易に痛みれ去らぬ「イラクサ」、近比喧びすし「ラミー」と名の變りたる「マヲ」、其妹分の「アカメ」、聞くだに忌はしき「マ、コノ、シリヌグイ」、其は葉にも蔓にも鋭角をなして生る刺ありて、手にて觸るゝも痛みあるもの、又葉の中央より花出で、實熟するいと類少なき「ハナ、イカダ」、其外「シロ子」「タケングサ」「毒」、「ヒメオトギリ」一種「クマ、ヤナギ」「ケンボナシ」「アキノ、キリンソウ」「オトコヨモギ」「ヤマボクチ」「イヌチヨロギ」「リヤウブ」里人之新芽を食す「ヤブデマリ」「クロモジ」「カハ、ミドリ」等を採集す。斯くも種々れ道草を採るとして途れ運びも羊の歩まや、牛は驅歩にも及ばじ、やうく吉野村、領内れ名所、九十九谷、大鼓野に

來たる九十九谷とハ途の左右れ山々に、常い水なけれども、雨臻るときと忽ち瀧とあるべき水路の幾條となく並びて頂より麓と通ずるを云、他にも數多あれども名所と聞けば眼新らしき心地と、又大鼓野は九十九谷の邊れ官道、處々に聽くとを得、其は足にて地をうてば鑿々と響くものなり鳥氏うちて一行に示さる、吾も草鞋の破るゝは惜しけれと話の種と思ひ、いたゞあうちぬ、地の下ハ岩窟にてもあるやらん、いとあやし、十一時四十分といぬは吉野村に着き茶店に入りて憩ふ、日ハ、いやまゑお照りて汗したゞり、午餉するも物うけれども勤めなれば詮方あり、五月にあらねど蠅、群がりて、五月蠅を、眠るにもあらず、まばしまどろむ、十二時半出で、佐良橋に向ぬ、此間にて市村教授赤花の「ゲンノシャウコ」をと給ひぬ、佐良橋の尾添川と手取川乃合ふ所にうけたり、水の面までは甚だしく深く、兩岸截りさるが如き角ある岩れ幾何となく堆り、草木繁して「キ、テウ」「モン、キテウ」戯れ、表のれたる石ハ苔蒸して緑小、沈むると白くして、碧水之を激し、碎けて珠玉の澄みたると爰にて合ふが故なりと或人云なりと、されども、吾等が見し時は雙方共に清流なりた、こは濁清乃濁澄みて清くなりたるにや、いとおうし、河の絶壁に「コ、オニ、ユリ」美しく咲きたるがあり市村教授採り給はんとすれども手届りず、吾匍匐して手を延ばし、市村教授吾体の後部を引き、かくして漸く得たり「ノ、イバラ」の葉は似たる葉を有し此頃白死花を咲き又實を結ぶと普通の「イチゴ」よりも大なる「バラ、イチゴ」も此邊にて採る、木滑村より先きは漸々「カモアシ」と名くる莎草科の草を作る、是は稗に類する物にて米の作られざるより此物を食ふなり、四時二十分女原村

お着く此間まで牛が喰ふて死すへきばかりの「ウシ、ユロシ」臺灣にて藍を製する植物と同一屬に「コマ、ツナギ」幹を碎けば粘液多く出づるによりて名ある「ノリ、ノキ」、蓼科の物にて小き、刺ある實を穂のやうにつけて、水玉のかゝれるが如し「ミヅタマサウ」是の子分とも見るべき「タニタデ」又其子分の「ミヤマ、タニタデ」、其外「シヤク」かどを得たり、日は未だ高うけれども此處にて宿かるとして三谷某といふ宿に入る、折しも村の相談會ひてもあつたにや、村會議員、物識り先生又と口利きなどの面々七八名許奥座敷に圍居して酒酌みかはし聲高らかに話合へど、一人が無用の者は此處に来るべからずといへば、他の一人、吾は「アル」用を去行くべしと云、無に對して「アル」とい、いとくおかえ、さるにても彼人々が話をきけば豫算、決算、賛成、否決關係、なされ漢語數多ありて時々吾等のえしうぬ語もあるこそ、いと先でふけれ、やがて彼先生方の還り給ひし時、吾等の腊葉も皆造り、各浴し終りければ晚餐お舌打ちをらして眠りぬ(以下次號)

醫王山地方植物採集記事

島 定 保

六月十三日予市村先生と共に園丁(村松)人足各一名を伴ひ植物採集の爲醫王山地方に向ふ尋中校教諭廣戸保氏亦此行に加はらる午前四時一同打揃ひ先づ材木町を經田上橋を渡り淺野川に沿ふて上ると暫時夫より道を轉つて漸く山路に掛る既に旭光東天に輝き三方醫王戸室諸山爲に紫雲を棚引けり下上田上戸室中山俵等湯谷原諸村を經て戸室清水村に至り路傍の石に踞りて飯を喫ふ清泉を掬いて喉を潤はし一憩の後又進む時午前八時なり山路益々岨より日愈々高し炎熱次第に加はり歩

調交々蹣跚するを覺ゆ午後一時漸く醫王山御前の頂上に到達す草間に安座して午餐を喫ひながら四方を眺望するお加賀は西南に越中と東北に當り一瞰の下は宛然地圖を見るの思ふほど快談數時忽然東方に白雲起り吾行に迫る俄に變じて細雨となり驟々漠々咫尺を辨せず忽惶直に歩を進めて交錯せる倭樹間を潜行す偶々尋中生徒五十名許來遊せるお邂逅す細雨漸く篠雨と變り褥衣悉く濕ぬ前より頻りに暑さを歎き今却て冷を訴ふ此邊分きて採取の困難を感じり昇降幾回の後終に鳶が峯に着せり脚下數千仞の下是れ碧水の湛ゆるところ又地質時代の往事を想起するに足ると云ぬべし之より乖角絶壁を辿下し南に一路を得崖下瀑壺に到るを得たり時已に午後三時なりき此瀑流れて終お二俣川となるものとす茲にて魚類數尾を漁せり再び登りて大池に至り池中の風景を一瞥し路を矮樹の間に取りて彷徨幾回黄昏頃と云ふべき午後六時漸く舊道お再會し安堵の思をおせり七時頃悠々醫王山を辭し小菱池に着す是より予等ハ廣戸氏及び人足と別れ路を轉つて湯涌に向ふ長池を廻り右折し菱池谷を下り魚歸折谷平下上荒屋諸村を經て午後九時湯涌温泉宿新右衛門方に投宿す降雨尙未だ止まず飢渴と冷寒と疲勞の三大欠乏は全々食後の一浴にて満足されぬ燈下臥床の中驟雨沛然軒滴器々たるを聞く此日採集の植物概ね左の如し

- ウシ、ユロシ
- シホガマキク
- エンレイサウ
- サンカエフ
- Elatostemma umbellatum* Bl. var. *maxim.* (桑科) 赤車使者
- Pedicularis resupinata* (玄參科) 鹽竈草
- Trillium smallii* Maxim. (百合科) 延齡草
- Diphyleia grayi* Fr. schm. (小蘗科) 山荷葉



- カニカウモリ  
Cacalia adenostyloides Fr. et Rav. Senecio adenos tyloides Maxim. (菊科)
- タウキ  
Ligusticum acutilobum S. etz. (繖形科) 當歸
- マンネンクサ  
Sedum japonicum Sieb. (景天科) 佛申草
- トリアシシキウマ  
Astilbe thunbergii Miq. (虎耳草科)
- コケリンズウ  
Gentiana spurirosa Zedeb. (龍膽科)
- ウド  
Aralia corbata Thunb. (五加科) 土當歸
- アカネ  
Rubia cordifolia var. Mungista Mib. (茜草科) 茜草
- ニガナ  
Lactuca Thunbergii ana (A. Gr.) Maxim. qxeris Thunbergii (A. gr.) (菊科) 黃瓜菜
- キンラン  
Epipactis falcata Thunb. Cephalanthera falcata Lindle. (蘭科)
- カンラマツバ  
Galium verum var. Laetum Maxim. (金虎尾科)
- インカガミ  
Selinocodon soldanelloides S. etz. (岩梅科)
- ユウレイタケ  
Monotropa uniflora L. (鹿蹄草科) 水晶蘭
- クサノワウ  
Chelidonium Majus L. (罌粟科) 白屈菜
- ヒルムシロ  
Potamogeton polygonifolius Pourr. (眼子菜科) 眼子菜
- チゴユリ  
Disporum smilacinum A. Gr. (百合科)

- ユキザ  
Smilacina japonica A. Gr. (百合科) 鹿藥
- サノユリ  
Lilium japonicum Thunb. (百合科) 百合
- ハウチヤタサウ  
Disporum sessile Don. (百合科) 寶鐸草
- ナルユユリ  
Polygonatum giganteum Dietr. p. canaliculatum Pursh. var. Thunbergii Maxim. (百合科) 黃精
- ヤマゴボウ  
Phytolacca acinosa Roxb. var. esculenta Maxim. (商陸科) 商陸
- ウメガササウ  
Chimaphila japonica Miq. (鹿蹄草科)
- ホミチンジマ  
Ainsliaea acerifolia Sch. Bip. A. affinis Miq. (菊科)
- フタリシヅカ  
Chloranthus serratus R. etz. (金粟蘭科) 及己
- ネチヤクサウ (一藥草)  
Pirola elliptica Nutt. (鹿蹄草科) 鹿蹄草
- ヤマデマリ  
Viburnum tomentosum Thunb. (忍冬科) 鱗蝶樹
- アカメガシハ  
Mallotus japonicus Muel. Arg. (大戟科)
- ツリガキツノシ  
Menziera cillicalyx Maxim. (石南科)
- ヤマボウシ  
Cornus kousa Buerg. (山茱萸科) 四照花
- ヤマキナギ  
Berchemia racemosa S. etz. (鼠李科)
- ハナイカダ  
Helwingia rusciflora Willd. H. japonica Dietr. (五加科) 西莢葉
- ナンキミナノカマド  
Pyrus gracilis S. et Z. (薔薇科)

- ツリバナ *Erionymus oxyphylla* Miq. (衛矛科)
- モミヂゴロロ *Dioscorea septemloba* Thunb. (薯蕷科)
- ウチヤドコロ *Dioscorea nipponica* Makino. (薯蕷科)
- ハハシヤウヅル *Glennatis japonica*. (毛茛科)
- エゴノキ *Styrax japonica* S. et Z. (齊墩果科) 齊墩果
- ガクウツギ *Hydrangea virens* Sieb. (虎耳草科)
- コアヂサイ *Hydrangea hirta* S. et Z. (虎耳草科)
- スハメノヒメ *Paspalum Thunbergii* Kth. (禾本科)
- ガマヅミ *Viburnum dilatatum* Thunb. (忍冬科) 莢蒾
- クヌギ *Quercus serrata* Thunb. (殼斗科) 栲
- モウセンゴケ *Drosera rotundifolia* L. (茅蕁菜科)
- マタノボ *Acinidia polygama* Miq. *A. potygamna* var. *latifolia* Miq. (獼猴桃科) 天木蓼
- ウロギ *Acanthopanax spinosum* Miq. (五加科) 五加
- ミヤマハシロ *Stellaria nemorum* L. var. *Bungeana* Maxim. (石竹科)
- ヒメシヤガ *Iris gracilipes* A. Gr. (鳶尾科)
- シユミサイ *Brasenia purpurea* Casp. (睡蓮科) 蓴

ギンラン *Epipactis erecta* Thunb. *Cephalanthe taerecta* Lindl. (蘭科)

六月十四日昨日來の雨未だ霽れずと雖漸次晴ると傾あり則ち衣服を乾かし採集物の手入を施し坏して遂に午前を宿所に費せり午餐後雨亦晴る直に發程 田子島、白見下谷、西市瀬瀨村を経て午后七時市村先生宅に着す此間天氣は快晴、麻川沿岸の美景、道路の平坦昨日に比して雲泥の差違なり 兎本日採集せる植物を左に掲ぐ

- ハコキウツギ *Diervilla grandiflora* S. et Z. (忍冬科) 錦帯花
- ノイハシ *Rosa multiflora* Thunb. (薔薇科)
- ウツギ *Deutzia scabra* Thunb. (虎耳草科) 渡疏
- スベカツラ *Lonicera japonica* Thunb. (忍冬科) 忍冬
- ミヅキ *Cornus macrophylla* Wall. (山茶茺科)
- ノボル *Allium nipponicum* Fr. et Sav. (百合科) 山蒜
- イボタノキ *Ligustrum ebofa* Sieb. *L. ciliatum* Sieb. (木犀科) 水蠟樹
- アカソ *Boehmeria japonica* Miq. var. *tricuspis* Hce. (蓴麻科)
- イラクサ *Urtica Thunbergiana* S. et Z. (蓴麻科) 蓴麻
- ビナシカヅラ *Kadsura japonica* (L.) Dunn. (木蘭科)
- タニワタシ *Vicia unijufa* Al. Br. (荳科)
- イヌガキオウ *Gymnogramme japonica* Desv. (水龍骨科) 蛇眼草

ヒヨクサウ

Veronica laxa Benth. V. Thunbergii A. Gr. (女參科)

ヒメハギ

Polygona japonica Houtt.

(遠志科) 遠志

因に記す湯涌礦泉之温度攝氏四十一度、無色、透明、無臭稍鹹味と帶び酸性の反應あり熱すれば「アルカリ」性を有する其性分ハ

硫酸 〇、三四三三五

鹽素 〇、八五〇二九

硅酸 〇、四〇〇〇〇

炭酸 〇、〇八〇〇〇

硼酸 微量

ポツタシユム 〇、九三四五〇

ソヂユム 〇、六二四一八

マグネシユム 〇、〇一七二

酸化カルシユム 〇、三三五

酸化鐵及礬土 微量

有機物 〇、〇〇八五

合計 三、六六七五三

外に炭酸瓦斯より成り慢性腸胃加答兒、リユマチス、に特效ありと云ふ

(了)

### 先師晋齋松田先生の靈を祭る

垂 東 仙 史

明治丁酉秋十月念五日、受業某等謹で清酌庶羞の典を以て、先師松田先生の靈を祭る、先生諱は晋齋、祖考世々伊豫松山藩に事へ、醫を以て業とす、弘化元年甲辰八月を以て生る先生幼にして緘黙自ら操り、未嘗て苟くも人と語らば長じて藩醫に入り句讀を藩儒某に習ふ、少壯筭を負ひて江都に遊び慶應義塾に入り英學を攻む、三年西岐陽に至り、長崎英語學校に學ぶ、明治四年藩命を奉じて海に浮び、米國に航し新約克州ブリークン市に於て法學を修め研鑽貳裘葛、六年十二月業を卒して歸朝し、褐を工部省工學寮に釋く、後大坂英語學校、鳥取縣尋常中學校、岩手尋常中學校に教諭あり、十八年長崎師範學校長兼外國語學校長に任せられ、廿一年秋田縣尋常中學校長に轉じ、尋で群馬縣尋常中學校に教諭たり、廿九年八月聘に應じて當校に至り、居ること月余適々症に罹り校を廢すること半歲荏苒久しに彌り、病膏肓に入り卅年五月十九日天陰霾に日色暗澹たるの時に於て遂に溘然として鑿と屬せらる、嗚呼哀哉、先生人と爲り、温厚篤實人に接するや穆として春風に向ふが如し、其の諸生を教諭る諄々誠を推し未だ嘗て少しも倦色あらざり、諸生皆函丈に侍するを樂む、圖らざりて一朝幽明境を異にせんとす、孺人花輪氏先生に配し、三角貳孺を生む曰く巖曰く環曰く遲、長女薰と曰ひ臺灣藥局長相川某に嫁す、次女猶幼なり、孺人婉婉聽從淑徳あり、能く兒童に教ふるに義方を以てし先生をして内顧の憂なからしむるもの孺人の力與て大あり、先生性謙遜恭順汎交を事とせず未だ俄に人に許さず既に慇懃を通すれば苦樂哀歡之を共にし、終生渝らば、音

信を絶つこと三歳而も情交の親しき舊の如し、嗚呼外ハ溫和ホして而して内敦厚ある先生は如死ハ能く自ら持てること牢あるものと謂ふべし而も今と則ち亡矣、嗚呼哀哉、先生在天の靈若し知るあつば著書懐愴として夫れ來り饗けよ、

文苑

聽衣

花 廼 舍

わけ昇りたる松と後になしてみるまで月影更行ま、小夜もいと静り虫のこゑのみ心ねさう時を得顔なる折しもあるハ高くあるハかすか小聞ゆるは軒は芭蕉葉に風の渡るにやあふん松吹あふしの雁うねをさうふにやと耳聾つきは砧打こゑ也けりさるにてもいほちの里やふんあはれ其里のうなるかたふちねの爲にやふくるもしらて打とさむふんあはれ里は女か夫の爲にや夜さむをも忍ひて打とさむふんあはむさんかもへは閨度ハ物言し

むしの音もいどいられ行く夜寒をは里のさぬや打いたすふむ

長歌

福井 嘉彦

七月某日大堰川にて船遊しけることさよめる歌

なつ野ゆく牡鹿のつもの、つかの間も夏とすれむと、おもふとちさをひかはして、みやこべの大堰

のかはに、玉だれの小舟を浮けて、さよを瀬をいゆきのおまひ、あしびだの山のみずゑの、しげりあひすいし影を、夕つゝのかゆさうくゆき、むつましく語らひ居れ、川うぜと止まず吹き來て、人みなのもと涼しく、岸への松をよぎて、瀧の音にうへば、手あきよ扇をすて、夏といへどなつとも思はず、うせそみの世をも忘れて、おれが身のうをなぐねども、たきは瀬にハしる若鮎の、いよきこゝろ知れり、ほこりに言あげしは、諸ともにならきて居るがたのしさるかも

反歌

あつさをも瀬織津姫やひひむねはるの川の風のすしき

大堰川やふねのうりり跡たえて清きせとに年魚子さばしる

海上月といふ題にて

月はしもさばにあれども、日ハもこゝろあれども、ことひとも秋のもあかこ、天てるやつきのひかりハ、常よりもいやあださく、さなばらの邊もおさあも、ひるのごとくか、やまぬれば、ひと皆の酒うたげして、たかどのに月をめぐると、我らもよたよたひのさ、うるかやふ大海原に、まろかまをばばに見むと、高麗産る輪島がささめ、舟よろひ真楫ひきと、七つ島をかひに見つ、うしれ實れひとりぬけぬてし、沖つし船倉をさして、はろくに漕ぎてし行けば、ひさのたの空ゆく月も、みまそこれすの影も、いよくたさやけなきて、打たす千里のほろも、波うづらちひろの底も、くまもなくいてりか、やま、ゆくふかに心にのりて、とほすまに舟はてぬれば、

あまつたふ月の御船も、天のがはとわたもつくー、我こそ、ろいまだあのねば、ちたつなみ立ちまきさへずて、やう／＼にかたぶたひてぬ、あられ／＼遠きむらさゆ、よきひとのよしとよく見し、秋の夜れつきの光も、出づるより一夜くまなく見れど、ほろぬうも

反歌

まなるこに月のかぐみを入れたまび大海に立つなみもあ

奥の濱苞

山田清定

兄弟と十府の浦もれまける折に

風たちて船さしかぬる十府の浦の浪をも凌ぐこゝろかたふむ

外か濱に文しける折に

雨の夜の浪の音さへ淋しきまやたぬなくなり安方の浦

松島にて

みつ汐に島かくれ行々大船の舵の音たかく日暮れまなり

越のあわ雪

新橋より旅立ける時師れ君に別れまつるを

うかまみて

つゝみてもなげきは見せし我君に袖の浦波立ちかへるまで

越前ふる金崎神社に詣りて

三吉野の雲井よ匂ふ花をさへあへなく散らす越の山風

源丸に乗り組みて金石湊につきて

浪枕も染もおひえて染さむきは夜嵐渡る越の海つら

花廻舎正義

案山子 遠里に宿もる犬のこゑすみて月見顔にもるのかし哉

雨中紅葉 笠さりの山にしあれと紅葉を染る時雨はふるにまのせし

紅葉遍 見渡せば秋にもれたる色もなく染つくしたり木々の紅葉は

十日菊花 昨日としほこり香あれと今日よりは心のまゝの千代や重ねん

花の下仗

花樵人 松下雅雄

としにひとさひあひあふを、まれとあひひそあまのうは、いはなみたのくゆくとの、かへぬひともあるものを。 たな機

とをにみたれてあるつゆも、ちくさのいろのやちくさを、つとにゆへとかひもときて、たばみつひたのいとなかし。 秋の草

あしのほわたるゆふせに、ほろ／＼あぢたのこほる／＼を、さそひけにとるさ／＼れなみ、まつにも



秋の聲

あはれこそはあり、秋の聲  
ますほのすゝたあきふけて、あせれうつらつらとよさむみ、いねうてになくひとあゑに、穂すゑの  
つゆはちぢになり、うつら

櫻園主人譯

(原文とチャイルド、ハロルド中の一)

節あり語句に旨意に多少原文と異ち  
る所あるハ譯者のさかしらなり)

更々ゆく夜半の酒うたげ

ともし火ひるをあさむきて

黄金づくりればを太刀を

身にひき添ふるます雄も

ぬなともゆらにか玉を

たま手に纏けるをどめらも

見のハす目にいかぎりな死

こゝろのさけをふくやつ、

吹くやぬえの音にききよく

あまつみぢぢに澄々のなり

この世のはかの樂しきも

死めはくせるをせうくに

はるりにひやく毛の音を

みくをすまして聞けやひと

聞きしや如何に物音を

われい何をも死うきまき

木末をならすかハ風か

ちまに響くをぐるまか

さもあふわれ處女らに

をどこ立ちそひ踏みなす

花のミヤこのさのうたげ

舞てうさひでもろどもに

一夜をこゝに明さむと

のたりも敢へぬ聲のうち

又もやひやく物ねとは

近まさりしてまこえ來ぬ

いやあきらけく山びこの

こゝふるこそもものすぢし

もの、具よそへつは者よ

いまのひききおはづ、

うさげのには、忽ちに

かなへの沸くが如くにて

彼方こなたに走せ違ふ

ひとのなうよも今までと

みゆさかにうち解けし

處女がいなのかんばせい

きた世お馴れぬ心より

さあが色をうしきひて

我身のこゝに在る事も

忘れ果てたるばかりあて

苦し死息もほきあへぬ

あゝるをぞのき別れがら

月にうさくも花にかせ

このしる盡きて悲しみの

來るハ浮世のことわざと

さとれるひとや誰なむ

いやる若駒ひき寄せて

ゆきを乗るや益良雄の

やみの衢におど立ちて

そするぐるまに後きじと

我もくどかけ出でつ

ひづめれ音をあとにして

空にとゞろく太づりの

猶もはるかにまきこゆあり  
 ほこを枕にすたゝねの  
 はうなき夢をれどろかし  
 兵者どもをあかつたの  
 星よりさきにさましたる  
 つゝみのねとの鑿々と  
 ちみ立ちさわぐ市びとは  
 聲もえ擧げずさまくりに  
 白きくちびるうごちして  
 そはや仇こそ寄せ來され  
 ぼぶとくくと云ふばかり  
 ますら健雄がふる里の  
 山まひびきてまのかみか  
 かたきの耳まねそろしく  
 ひびきわたりしその歌ハ  
 いま小夜中にこゑ立てゝ

しづへも高くうははれぬ  
 山また山のやま里の  
 そまひに馴れし益荒男は  
 歌にあはれて山笛と  
 今をかぎりど吹きあらず  
 高さしづべは人みな  
 こゝろあしみていかで我  
 譽れも高きいにしへの  
 ますらたけ雄は劣らめや  
 寄せくる敵を打きため  
 人のおどろくいくさして  
 名と後の世に残さむと  
 立つることろの雄々しさよ  
 なさけをしづぬ心無き  
 もまの木末もほゆけは  
 生死てかへらぬ丈夫を

送るわかれのなみだかも  
 進みくつともの  
 いま踏みしだく草のはら  
 草はさかぐら生ひ變り  
 しげまゆきかむ茂るとも  
 噴毒よ燃ゆる思ひにて  
 敵おむかひしますすらを  
 くさのまぐも冷かに  
 さびし死夢をぞ結ぶべき  
 つゝがも有らで見えつるハ  
 花のお日高きときかりた  
 處女うち添ふさかうさげ  
 さのふの宵のことなりき  
 あやめも分のぬ小夜中の  
 夢れどろかす攻をつとみ  
 うち物取りて進ましは

ほのくしづむあけの空  
 日とやうくに登るども  
 修羅のちまゝや常やみや  
 けぶりの雲と立ちかくし  
 玉はあられと飛びちがひ  
 いかづちまがふ大砲の  
 ひびきに土ハ裂けぬれど  
 さけめおほひて餘りある  
 思はぬつちのつまれしハ  
 ひと馬このわかち無く  
 敵もみうたももろどもに  
 からくれあむに染まつとも  
 倒れ伏したるうばねあり  
 うゆるひかゆる物ぞとや  
 そのしうばねもやがてまた  
 まあとの土になりなまし

零全子集

芭蕉葉比露一つちまで手水鉢の住民秋に驚たけらし。長た書寐食りしやとに蚊ともいな  
 ずとかこのもれ、獨り子々の天地のこころは。さりとても化し得ざるもの、朝を寒み夜を寒み、殘  
 る暑さに残り物とだに殘れるはよくいくところ。歸一の終極を觀し、踏梁の愚を晒ひ、却て  
 壺中の一夢を愛ま。見と壺中の虫其生るゝの前花神之を訪ひ、其滅ぶるの後月靈之ふ次る、  
 子々とさわく人の世眞に兩者いさゝかの隙のこゝろ、而して遂に無始無終花なく月なく有無無  
 趣杳か冥か只潔白の銀盤をありしわとに見る也。噫、人盡るの後天地長く存せん、人をこの  
 ちみ天地を味はんとほゞするもれ、得たりやあらずや、只々そは嚙語うとかるしむものもよ  
 へ吹きすすさひし秋風に軒の零余るに心をいさむるを見れば、流石に人皆之あはれを知れりけ  
 り。嵐は朝、落ちる零余子をあそれと、さなからに失せんとのをしめて、字なかつたて、  
 拾ひたるか、えものいと少死に、猶えつやあふすやち死りつる人のおくりおこせねは心細死  
 までにてなむ。

明日は必ず冒す急流瀉の音いとわろろしきを二里のこなたに

聞きて眠なきぬ夜の机に

山お見ろる野川の秋の夕日哉

鳴き飛んで後泉上の柳ちる

歸路と小雨とあまの暮詣

一 望 識

木 魂

明方の雨にちり行く踊かな

送別

温泉の験を萩の山路に試し去れ

一村の法話お會す秋の雨

夕鴉寺千年の紅葉ちる

秋風や瀬の音變る昨日今日

流人の袖に落ちけり雁は影

秋風や破壁を毛る、隣の火

夜長しと欠伸に語る宿直哉

船寄せて紅葉は雨をしのさけり

花野くれて風に芒の野となりぬ

正す襟の垢身おしむや魂祭

日參や秋蝶にかゝむ寺の道

夜食して野分を守る小家かな

甘柿を諾とよむへく君か文

切と殘す鶏頭葉鶏頭と見ゆる哉

野雪隠に尻こそはゆき芒かな

無 禪 舟

花 樵 人

一 望

望

望

望

望

望

望

望

望

望

望

望

君何子秋海棠の冷を愛す

留別

温泉に残る君を思ふに夜寒哉

能登紀行

村上 函 峰

加越能之地。以海山之勝著者多。而以能州爲最焉。余去歲夏。遊和倉數日。恨未遍究海山之勝。今茲七月。賜暇會坂本生來。能州人也。談及其勝。且曰余近日歸省。請爲先生之東道。余大喜。則移檝。促二三子。

七月十四日雨。寅下雁車發金澤。過森下村東白。左顧見河北瀉於水煙模糊中。抵津幡驛。雨漸歇。抵宇野氣。右折里餘。過高松村。抵一屋驛。此間爲加能界。東南則山脈起伏。蜿蜒如列屏。竇達山爲之背。抵敷波村。有岐。右七尾道。左外浦道。乃取左進。右顧見邑知瀉。較河北瀉稍小。午下抵羽咋驛。有川曰羽咋川。卽邑知瀉之委流也。行可一里。抵一宮村。右折數十步。詣氣多神社。聞此社係崇神帝時創建。歷朝崇祀。勅陞神位。附社田。發使奉幣。事見國史。今爲國幣中社。祠宇古朴。叢樹遂蔚。使人肅然起敬。出樓門。右折。行可十町。復本道。柴垣村。左顧遙望外海。心目爲爽。又西北見浮圖於林梢。是爲瀧谷妙成寺。卽法華宗本山。過瀧谷村。右轉陀陀斷續。無復可觀。車聲撼夢。屢驚屢睡未下投高濱驛。過岫藤井生至。以彼步而余車也。飯沿畢。閱地圖。議所向。初更就辱。

十五日雨。早發渡神代川。行可半里。抵安部屋村。向島突出海中。凡三町餘。褰裳以渡。島安天妃祠。祠後岩石盤錯。波浪撞舂。響如萬雷。復來路。經百浦赤住諸村。抵福浦。此地爲外浦一要港。港雖不甚廣。帆檣林立。港口置燈臺。時雨歇風起。聞從是迄富來。海岸一里餘。有詭岩怪島。風景尤勝。從陸則不如從海之奇也。乃就漁戶。欲舟買舟子曰。逆風不可。余笑曰不能前。則反亦可也。乃諾。直艤舟出港。果然風惡。波濤洶湧。舟忽颺颺。不當一稿葉。西則瀛海萬里。唯水與天。空瀨相涵。東望海岸。詭岩怪島布置錯落。其最高爲鷹巢岩。峭立海面。凡數十丈。亂松植其上。其北有巖門。島裂爲二。豁如門闕。平時可舟過其上。其東北見峭崖築壑。一白曳練。曰不動瀑。瀑之中央。有不動石像。故名。旣而風浪稍平。又見水簾數丈懸。是爲牛下瀑。塔島拔起海面。巖々危立。猶世所謂五輪塔然。其東北機具岩斗出。以形似名。已下達富來。舍舟登岸。憇亭。舟中眺觀雖甚奇。但遭風浪。不得除賞。可憾耳。又東北行數百步。右望鷹爪山。屹立群峯之上。至大福寺村。路傍有華表。卽爲山麓。前行則畦窮而山。山窮而溪。陟降里餘。抵深谷村。又盤迴而上。喘汗頗窘。一轉得稍夷處。藉草吹煙。瞰劔地海岸。繚繞成灣。蒼波激澗。風帆煙島。點綴布置。極饒畫致。東下數十步。抵劔地。從此沿海濱而行。鹽場極多。白沙沒鞋。瑟瑟作聲。景非不美。而苦步行。渡阿岸川。歷黑島道下諸村。西下達門前村。投總持寺。聞此寺後醍醐天皇。賜曹洞一派本山綸旨。法堂西面。棟椽巍峨。飾以彫鏤。右爲佛殿。爲僧堂。左爲紫雲台。爲祥雲閣。前爲山門。爲敕使門。繞以長廊。規模宏潤。窮極莊嚴。足以知四方檀林。仰爲法窟。一僧延余祥雲閣。瀾茶供以淨膳。山樹鬱葱。時聞老鶯子規。初更雨灑檐滴如誦經。幽絕不可言。夜半眠覺。忽聞擊柝

聲。乃促禪定也。夜喚起藤井生。盥嗽正襟。乞僧入僧堂。參禪。出又入佛殿法堂。坐而聽。坐誦。僧凡四十有餘人。會有怠且倦者。則一僧秉扑。答其背。法規嚴可知矣。畢則天明。飯畢。管長棧仙禪師。延余燕室。談及宗教。不覺晷移。既謝而退。余顧藤井生曰。禪之爲宗。其要破顏微笑耳。而守戒律之嚴。他宗教之所不及也。然吾道至易而易知。至簡而易行。非若彼廢棄倫常。而難難知行者也。顧奉吾道者。多身之不修者。亦何故也。生亦慨然。十六日晴。辰刻出寺。取路門前村。東行數百步。入山谷間。泥濘滑。步履甚艱。過二又別所諸村。登梨樹坂。降則爲平野村。未刻抵大水。投旅店。此地爲內浦埠頭。昔長氏累世治此。今尙有城趾云。既而坂本生來迎。生家距此二里。曰會福村。乃馳車而行。主人卽生大兄也。見余大喜。厚見款待。家固素封。藏古今書畫數十幅。頗有可觀者。既割鮮置酒。使人忘道路之苦。翌又懇留。余以前途遠辭焉。

十七日。與主人別。辰刻馳車至鵜島村。聞每日。自七尾航宇出津。漁船。寄于此。已刻舟至。乃搭而發。船走迅駛。所在島嶼。頃刻萬變。勢如飛動。已過大白峽。烟波渺茫。時見鯨背出沒于波間。左揖武連二子山。酷肖嶽蓮。自小富士。右仰越中立山。巍然屹立。諸山皆排列其下。亦壯觀也。未刻達宇出津。此地爲七尾以北一要港。船舶出入。殆無虛日。海產甚豐。從此可舟達小木。舟小客多。交膝而座。雨復至。無蓬可避。渾身沾濡。舟子操撻甚力。客高呼曰。至矣至矣。放眸則左見形如艦山。橫亘海濱。曰御船山。左轉小木港。投逆旅。時已哺。晉議曰。明日陰晴不可知。蓋直觀九十九灣。且雨中游觀。不亦奇乎。乃買舟而發。沿御簾山而進。其東端曰日和山。與越坂

城端對。屹然爲海門。其間凡三町余。灣之勝。自此始。左轉入灣。潮不甚怒。碧波搖盪。沿右岸而前。曲岸回渚。或出或入。自平入奇。猶見走馬燈然。名稱極多。不可殫記。其盡處爲釜中。反舟。舟導左岸而往。轉撻就岸。曰橫引。登則左側有石坑。歷石級而入。點滴淋漓。廣如四五間屋。仰見鎔銜石骨。其勢如欲飛墜者。石工數人鑿石。其色淺黑。質極鬆疎。而能耐火。可爲倉材。出坑就舟。過椎木山下。迂回飢島。左轉又入灣。窅然成灣。曲者不一。最廣者爲舟隱。昔有盜奪公租。匿于此云。益進入吹上。左見茅屋數戶。曰瀨村。兩北岡巒綿亘。一峯峭立。是爲吹上山。舟子曰。從此登灣之勝。悉集眼中。余欲舍舟上岸。舟子曰。今雨矣不可。乃反右轉入淺野浦。有赫山。曰釜剝山。以形似名。轉撻過春日島腰。入二釜。沙濱皆鹽田。復前路。右轉則一島當前。曰蓬萊島。周回凡三町余。高數十丈。青樹翠蔓。蒙絡搖綴。命舟子就島。求徑而登。安天妃祠。時天昏雨飛。雲烟黯澹。灣之勝。渺不可辨。余甚恨之。既自解曰。衆景畢陳。不若舍畜有餘致。乃降。進舟左見越坂村。浦淑爲灣。其東端卽爲城端。有古城趾。故名。灣之勝。於是盡矣。出灣風浪益惡。舟子鼓勇而進。薄暮還逆旅。急呼酒自勞。謂藤井生曰。此灣曲折極多。雖一曲奇於一曲。惜規模狹隘耳。然浦淑之觀。島嶼之秀。位置錯落。悉得其宜。不覺其狹隘。作文亦然。若單調少曲折。豈堪讀耶。雨奇如此。晴益佳。幸得晴則復探。陶然就寢。

十八日。雨。又加風。不可舟。乃決歸計。辰刻發。坂路羊腸。一陟一降。時南望南浦。頗慰心目。歷間脇村。雨漸息。過羽根村。左轉得長坂。降則爲田浦。已刻抵宇出津。欲買舟以航甲村。風逆而不發。又取陸路。沿海岸而往。風益猛。潮益怒。海上不見一帆。此間沙斥。則煮鹽爲業。余



乃就質其製方。得一驛。曰：鵜川。有川亦質驛名。申刻抵前波村。投明晨。欲搭船。以過能登島也。茅屋蕭條。不能交睫。客况殊覺無聊。

十九日晴。早發就渡船。朝暾映波。水烟消散。遠近島嶼。若出奇爭勝。眺觀之間。不覺過大口峽。達向田。島周圍凡十八里。幅員方二里許。向田爲島北灣。直訪青山氏。氏坂本氏親戚也。通名刺。先問島諸勝。主人曰。從此東南里餘。有四塚村。是爲最高處。可以眺四方。他皆眺一方耳。已供酒飯。又曰。此島古出駿馬。源賴朝賜佐々木高綱。駿馬池月。其產也。今有牧野。曰。牧山。本村某社。藏當時賴朝所下證狀。乃錄其所聞。以質識者。午下主人爲導。坂路盤折。披荆棘而登。須臾達頂。東北祖母浦。沙灣回環。以連于鰲目。東南日出島。與鵜浦岬對。其缺處即小口峽。白帆數點。隱見其間。西南屏風崎。斗出灣中。與石崎和倉對。喚之可應。七尾隔灣在正南。入烟稠密。屋瓦鱗次。其東南山嶽連亘。而尤高者。爲石動山。余大喜曰。是絕境也。藤井生謂余曰。連日所歷。恐無此勝。余以爲然。又尾主人。而南下里餘。抵佐波村。憩。聞從是舟達七尾。旣而謝主人。就舟。蒼波如鑑。白鷗浮沈。島嵐山靄。掩映夕暉。宛如行圖畫中。申下達七尾。此地爲北陸大港。船舶幅湊。百貨匯聚。四方商賈所集。頃官許爲商湊。漁車開設亦不遠。可知他日之盛。亞五港也。迂路過國府村。訪木下氏。嚮相見於坂本氏。坂本生亦來。置酒酣暢。談所歷諸勝。且詢近地古蹟。主人善談論。余亦乘醉論時事。不知作何語矣。

廿日霧。辰下債導者而發。東南向城山。經田膝間。過長坂。屈七曲。草棘蒙徑。鉤人衣袂。愈登愈險。或俯或仰。猶攻城之士。志氣不屈。過靴脫場。有清泉。掬醫渴。又鼓勇而登。城堞之跡儼然。三面山嶽拱列。下則臨七尾灣。誠爲天險。昔島山氏城此。傳世。八歷年百八十。實爲北陸名族。一朝爲上杉謙信所陷。余顧藤井生曰。謙信攻戰如神。所向無前。當時橫槊賦詩。何意氣豪也。然自今見之。殆無異島山氏。因指顧形勝。徘徊久之。時雨又沛然。乃復來路。抵古屋敷村。憩。謝遺導者。傳語木下氏。右折過田膝間。抵七尾。雇車而就歸路。過二宮驛。抵御祖村。路傍見林樾。乃爲大入杵尊墓。以薄暮。不謁。西下抵高島驛宿。

廿一日雨。早發以金澤在近。不覺疲勞。過飯山志雄諸驛。抵敷波村。雨漸歇。從是前日所過也。午下抵宇野氣。雇車而走。抵津幡驛。雨又至。還至寓。日既晡。余此游。不能遍。究能州海山之勝者。以有入學試考之期。不能緩也。計海陸之爲道。九十里餘。爲日凡八日。明治三十年八月某日記於金澤長街寓樓。

(完)

人狐說

浦井 蓉 湖

尾張北鄙。有一農家。極殷富。會雇一婢。質直而敏慧。且有殊色。主翁甚憐愛。一夕往窺臥床。其肌膚氈々有毛。翁不覺絕叫。婢驚而泣曰。妾實狐女。在君家爲有所乞也。事已刻此。請辭去。翁慰諭問其所欲。曰。近時我族蕃衍。漸苦食乏。希得斗升以活之。故竭區々之力耳。語辭淒惋。翁憫而聽之。越數夕風雨大至。婢曰。我族今夜來乞米。異類醜陋。深耻人見。幸勿窺戶外。翁曰諾。遂不省。明朝見之。倉庫洞開。粒米狼戾。所失不啻數十苞。金帛財貨。亦不可勝計也。而婢亦無影跡。蓋巨盜以色欺翁。逞掠奪之計也。而婢以狐皮紮肌。以扮狐女云。予曾聞福神盜天女使之事。以利欺。一假神誑。此則以色。愈出愈猾。

也。昔者宋景濂。作人虎說曰。嗚呼世之人虎。豈獨民也哉。今予作此說。亦曰。世之人狐豈獨婢也哉。日下刁水曰。檀弓孔子。過泰山一篇。萬世名訓。柳州摸擬。作捕蛇此說。潛溪人虎亦此意。浦君人虎亦此意。敷衍古訓。警今人。三子一案。

詩

能登灣

荅湖漁史

載筆探游能海東。珠洲鳳至跡夢夢。室涵溫水浴來快。岩列屏風看去雄。求藥昔曾廣典籍。禦邊今欲泛鱗鱗。兵談仙訣非吾事。記勝愧無文字工。

三國

傳曰。鳳凰來儀。海神捧珠。故為郡名。又曰。徐福到此地。近時有設軍港之議。屏風岩名。樹擁荒祠澹夕陽。簾垂綺閣映波光。振姬遺蹟無人問。漫說風流小女郎。

振姬繼體帝之母、三國人、小女郎善和歌、三國名妓、

鶴賀

萬里雲濤豁遠眸。會來渤海使臣舟。仍看砂白松青好。何處當年清景樓。

日本武尊

自古者有渤海使客館、曰清景樓、

短劍征夷又遠馳。原頭拂髣草離離。憎他海上龍神惡。逆浪衝船奪侍姬。

西行法師拋銀貓圖

禪味嘗來拋武器。心觀心印毫無累。三衣一鉢亦風流。拋却銀貓與童戲。

清姬捲簾圖

晨鷄一曉曉光移。玉殿玲瓏雪霽時。織手寒簾含笑坐。朱唇丹臉賦新詩。

菅相函

偶邊妖氛出帝京。海濱靜處濯塵纒。月明猶記天恩渥。心骨清於秋氣清。

敦盛吹笛圖

笛聲搖曳隔朝霞。散遍須磨碧水涯。悲雨淒風吹有恨。折楊柳又落梅花。

丁酉九月辭東都偶賦

苦雁寒蟲亂五更。秋風殘月旅人情。函山西去加州道。何日錦衣還帝京。

憶亡友

一朝玉樹被風摧。幽蕊春來花不開。一世高姿空入夢。斷絃終古有餘哀。

出鄉吟

北村香陽

南莫渡土海荒惡。白浪吞吐馮夷宮。北莫越嶺嶮怪。老樹槎枒攀赤熊。胡為遊子就遠道。匹馬雙鬢向秋空。當面羊腸行路難。回首家山為誰容。水淙淙兮送哀音。日淒淒兮動悲風。美人抱恨訴聽蓬。慘懣愁雲失西東。天長路遠坐歎息。風塵滿眼去何從。人生識字憂患始。今古消沈寄玉缸。玉

簫中斷暮潮急。涕淚迸灑兩岸楓。楓葉下。紅一蓬。日暮烟水愁濛濛。嗟呼乎出鄉吟良苦。茫茫八極雲而風。

追軼先師余時在  
金澤

風露滿天白。碧海秋迢々。騎鶴人何處。高寒不可招。誰家一曲笛。日暮聲凄寥。浮雲惹愁緒。風裏魂欲消。一雁關河杳。千里月色搖。金氣肅自西。南浦摧煙茗。蒼茫文星落。鏡江晦暮潮。釣臺荒草長。書軒梧桐颺。瀛洛紹斯道。夫子何昭々。舉郡走清門。彬々羅衆髦。戎事蹈東海。笑佩赫連刀。風月托後生。詩酒彭澤陶。柴桑養鷄犬。閑適和俚謠。虛窓討妙棋。清筵振健毫。歲華一何急。天地淒高颺。望斷青山遠。落木下蕭々。秋墳悵不見。客子夢空勞。臨風揮暗淚。星冷霜旻高。寒發逼籬角。哀吟送永宵。

憶岐山先生在能州

秋風拂越天。涼氣滿能海。白雲遶蓬壺。渺々綠波裏。采藥人未歸。騎自空徒倚。憶彼雲外遊。去影何颺爾。月明桂舟頭。簫歌立蘭沚。明珠點漣漪。湘妃鼓瑟起。白鶴下青松。笑迎安期子。丹砂容易成。同參不死理。人間回首處。雲霧邈千里。一夜太下傳。少微錯天紀。迢々九州外。伊人水中在。可望不可即。嗟余在泥滓。歲月不人待。高颺摧蘭茝。正聲作何時。憲章傷頽弛。何以廢淫哇。所以望彼美。八極遊雖樂。莫忘小子俟。回望北浦雲。窈窕暮山紫。

寄三浦一竿先生

老屋霜寒蕭吟髮。詩魂今宵奈清越。秋空千里賓雁來。飛映吸江一輪月。山蒼々兮水茫茫。仙笛參差雲外出。此時伊人棹桂舟。拂面涼風坐彈瑟。冷韻嫋々金波碎。驚吟魚龍出幽窟。一竿風月一壺酒。世網固難羈鶴骨。笑脫十年腰間印。江湖堪濯凌雲筆。孤客天涯臨風嗟。安得南山築石室。松隄竹浦滄洲上。白雲涼步伴間逸。

批評

北辰會第十六號誌概見

山本彦太郎

文學美術の壇に於ける批評の價值一度江湖の認識する所となしてより、指を此に染むるの士、鬱然踵を接して起り、其旺前古に比なく、勢の窮まる所、漸やく弊竇を醸生して、終には摯實なる論議を缺くのみか、甚しき冷嘲、漫罵の言をさへ敢てとるに至る、去れば、此等評家が、過去數年の間に於て、作家に對する其本來の任務に關して收め得たる効果も、殆んど皆無とも謂ふべく、直に製作海の指針となりて作家を提撕し誘掖するの實に至れば、全然之を擧ぐるよと能はざりしにせよ、少くとも、作家を約して、其翻々たる浮泛の舉措を抑制し得たるの效果の之を没すべからず。されば、滔々たる此勢潮の流れて我北辰會雜誌の上にも及びたるものか、嚮に、九龍齋主人が評壇の氣勢頗ぶる振のざるものあるを慨えて、自ら劍戟を取りて此壇上に打ち出で、よと、磧川、藤馬卿、河滄浪等の諸將、爾來相尋で起ち、筆鋒頗ぶる犀銳あるものあり、其結果として、吾人を戒飭して、本誌隆盛其基を置き、その跡掩ふべからざるを見る。吾人亦た力を揣かず、此等諸卿が餘韻を慕ふ

て、聊の茲に、本號投稿者諸君の面を冒さんとす。而して、批評の意義及評家の職分に至ては、本號も於て舊滄浪君既之を立去れば、吾人は茲に之を再びするの要を見ず。只だ此際諸君より向て告白すべし、敢て重大なる責地お立ちて、諸君が金玉の什を是非するの光榮を得ざるを喜ぶと共に、殊に名を記して、曲筆迂文、以て言を蔭にまゐるの諂を避くと云ぬにあり。

## 論 說 欄

此欄に於ては、從來の本誌頗ぶる振らず、否な振はざるも非ず、多く之皆筆端は彫鏤に成りて、着實なる研鑽の結果も成りたるもの、僅か二三篇に止り。文苑も於ては、錦思繡想の文堆をなまて、絢爛殆んど目を眩するものありまも拘らず。此欄に於ては、晨星落落、吾人をして頗ぶる不足の感を抱かしめざるを得ざらざら。此れ一は學生も未だ専門的學理の蘊蓄なきこと、他は教師諸君れ多數が、本誌も對するものと餘りに冷淡なりしこと由るものなるべし、去れど、吾人は決して美文の多きを以て嫌惡すべし現象と爲すものに非ず、吾人は寧ろ其盛旺あるを見て、誌上の華として之を慶ぶるに躊躇せざるものなり。去りながら、美文なるもの、只だ吾人が有せる情想の一例を發路せるものに過ぎず、吾人の腦中に之、猶や森嚴肅整なる意思の一側ありて、此を記述せるの形式用辭亦頗ぶる具備せるものあることを忘るべからず。譬は、天地の觀、百花爛熳する春の野邊に盡きざりて、猶ほ綠樹蒼鬱する林苑の夏あるが如く、美文と論文との両々相須て始て本誌の完璧を成すものなりと謂はざる可からず。

西田講師の「先天的智識の有無を論ず」の一篇も接して、始めて、生平れ渴を醫するを得たり。先生

は先づ其精緻ある心理的頭腦を開き、先天的智識の有無を檢査し、凡ての側面より其存在れ必然なるを斷じ、愈進んで遂に本誌も於ては、其特質を詳論し、之と他の智識とを問お截然たる區劃を置きて其所論を結ばる。理義明細、殆んど餘蘊なきが如し。吾人深く先生の示教を多し、猶ほ屢々這般の論明お接せんことを期したりしに、此一篇の、圖らずも、本誌の上に於ける先生が絶筆とあり、吾人をえて、只此一篇の紀念にとりて、蒼顔淵默の一箇有力なる心理學者を追思するの止むを得ざるに至らまめたるも、吾人れ深く本誌れ爲先に惜む所あると共に、又それだけ多く現在の諸先生も待つある所あり。

浦井教授の「央海指針」と諄々數千言、一として吾人の訓誨に價せざるはありし。何時もながら、先生が該博ある知見と懇篤ある垂教とを以て、吾人と獎導せらるゝの好意に至りては、吾人の深く先生に感謝する所あり。

高橋君れ「現代と漢文學」は未だ完結せず、本誌に於ては、二様れ反對説を提掲したるのみにて猶ほ其所論の全豹を窺ふに至らざらば、其如何も此等の反對説を打破し來りて、漢文學の趣味と特調とを發揮し、之が果して、現代文學及其他の學科に對して、如何なる地步を占得るやの論明は、吾人之を次號も待て聽くんと欲す。兎に角、近時、藤田劍峯、笹川臨風、白河鯉洋れ如き穎才、赤門の中より輩出して、先づ世も問ふに支那文學大綱と支那戯曲小史等とを以てし、聲を勵まして支那文學に對する意義れ研究を唱道するに至り、在來沈醉の境もありし漢文學は、漸やく其昏昏たる夢の裡より覺醒せらるゝて、「古來一千年、靈淑なる大和民族れ經典となり、理想とあり、上も九重乃大政より、

下へ斐牖の家事に至るまで、一ハ其規矩中に鑄造し來れる漢學」の思潮と、更ニ復々び、眞面目と新生匠とを以て、我思想界を侵来來らんとす。蓋し、智識の程度頗ぶる高麗現社會に生れて、多少開發的、研究的の教育を受けたる人士にありてハ、從來の只、章句の末にのみ拘泥せる老儒者の單純無味なる讀誦法に飽き足りざる所あるは勿論あれば、這般の現象は、社會必然の趨勢とも見做すべきものにきて、高橋君の此論を見るハ、亦此趨勢に驅られざるの結果と云ふべく、兼ねて又之一鞭の打撻を加へんとするものあり。

## 雜 錄 欄

市村教授の「經濟なる茶の代用品成就」ハ吾人をして、茲ニ端かく當時の世評頗ぶる高かりし、用は日本風景論を想ひ起さしめぬ。彼は漢詩、和歌の趣味を標的として、専ら地理學的現象を觀察し、文學と理學との間に巧かる調和を謀りたるもの、今此文を讀むハ及んで、亦先生が此等の潤淡なる題目に對して、頗ぶる有興味なる筆致を有し給ふハ推服せざるを得ず。吾人或は、夏期捕鮎網を肩にし、河邊砂地蹂歩しざるの時、或は月の夕、叢野に涼を納れたるの砌、吾人ハ「足脚ハ觸れて振々鳴響する」かば、くけつめ、いあるもれを踏みしむたると蓋し屢々ならんも、此に些少ある注意をばに喚ぶハ嗜好を有せざりし吾人ハ、嘗て、尋中ハ生涯をたとりたる時、動植物半日の勉強ハ、殆んど吾人三年の身命を縮むるの思ありしにモ拘らず、先生の魔筆ハ、吾人を誘惑して思はず篇を卒ふるに至らしめたるのみならず、蕞爾たる一箇の雜草が著大なる經濟的功用を有することを知りしと共に、之が部屬成分をさへ明はすることを得たり吾人茲に思ふハ、從來ハの本誌

が、其趨向全く一部的にして、一部的趣味の外殆んど何物をも惹き得ることなきハ、隨に本誌の弊處と謂はざるべからず。ことハ、文學的性情ハ、元來普遍的のものにして、何人と雖ども、此種の製作物に對しては、多少の感興を惹き得るものあることハ確なる事實なるにモせよ、一般の上に見て、一部の會員が斯の如き本誌を見るの度と、一部若しくは三部の會員が之を見るの度とは、果して均一あることと得べきハ、吾人ハ從來本誌の「二」が、韋編少一だも舒ぶに及びずして早くも架上の陳雜と塵埃の中に埋もるハの憾なかりしとを保せず。此れ如きと本誌當初の目的に非ず。本誌の實益と、各部會員ハ平等に分配せられざるべからず。吾人ハ此點ハ於て、市村先生を始め其他の諸先生に向て、此等の科學的研究の結果を、本誌の爲めに惜み給はざらんことを切望するものなり。高橋教授の「無品親王服色考」ハ、先生が老大の意氣を以て、索引旁午、博く群籍に陟りて、精緻なる考證と、綿密なる推察を下されざるもの、漸やく本誌に入るとて完結を告げざる。流石ハ、當年、碩學林の如き百萬藩封に下し、自ら國學壇の泰斗と推されざるの人、此先生にきて始めて此言説ありと言はざるべからず。

恃愚袋川君の「草庵陳言」ハ、吾人をして忌憚なく言はしむれば、眞ハ草庵の陳言にして、殆んど徹も生ぜんばりの倫理學的講説に屬す。試に其第一節と第二節を見よ、此種の文學ハ、吾人既に十年の昔に於て、當年の學術共進會若しくは小年團等の誌上に厭見しざるものに非ずや、赤とんぼ云々の一節、何ぞ吾人ハ眞價を沒了するに甚しきや。吾人若し吾人より、「義てハ無形の一大羽翼」を除き去らば、吾人ハ果して「獸類と異なる」ととなきや。吾人ハ思ふ、獸類猶ほ一種の道念を具ぬるも



のあり、此点に於ては決して吾人と區別さるべからざるもの非ざる。吾人が自ら推して「萬衆の王を以て任」するも、主として、吾人が靈妙なる推理の官能を有するが故には非ざる。去れど、吾人が此を以て袋川君に責むるの、大早計の誹を免かれざるやも知るべからず何となれば、此は君が義を見ること頗ぶる重き之餘に出でたるの言なるべく、所謂、文を以て意を害せざるものあるべしべからず。

## 文苑欄

花の舎吹雪君の「尋花」の猶ほ圓熟の域に入らず、今一層の修練を望む。文中「花をあるの盃を汲て」とあるの確は吹雪君の不注意なるべく、「盃を傾け」若くは「酒を汲む」とあるべき筈あり。猶ほ「二ひら三ひらちる音さへ耳にとする」とあると誇張も過ぎて却て著るしく趣味を殺ぐものと云ふべく、末尾の短歌は、鶯を以て花れあるじとあし、之は一夜の宿を借らんことを求めざるの心、迂曲にして稍凡を脱す。

松下雅雄君の「觀兼六公園之櫻花作歌並短歌」は聲調殆んど滑稽的にして字句冗長、卒讀するに堪へず。去れど、此とあながちに松下君のミを罪すべきに非ず。長歌其自身の負ふ所の罪も亦大なるものあり。元來長歌なるもの、其性質として、詞調頗ぶる緩漫にして平板、決して吾人の情想を發展し得るよ足るべき恰好なる明治の詩形よあらず。試に萬葉集に就きて、人鷹、赤人の作を觀よ。彼等の歌聖と稱せられて、其歌作上の大手腕の殆んど古來一般の認識する所、之に對しては吾人など何等の感興をも抽出し得ざるよ非ざる。彼の萬葉集の精髓とも見るべかりし長歌の、僅かに百

年を経て、古今集時代に至りては、之を載りたる數僅かよ二三首に止まり、命脈漸やく絶えんとしたるの事實の、明に此間乃消息を語るものと謂はざるべからず。松下君のこの歌ハ儘に此弊處を踏襲したるもの、其全然失敗に了りたるの、固より其所と謂ふべしあり。反歌四首まよ平凡謬劣の誹を免るべからず。一層の猛憤あれ。

花の舎吹雪君は短歌七首中、吾人の川落花、卯花藏水の二首を以て白眉とすべく、花林蝴蝶は樂ちに過ぎたる觀想に失し、窓新竹は平凡、加茂祭は粗笨、花林朧月は難かし。

松下文樵人君の今様ハ、本號に於て汨滄浪君のいひたる如き嫌ふしき引きかけなく、賣花翁、椿花、山吹、梨花の四首にも、稍雅古清淡の趣を見る。去れど、後の三首に至ては猶ほ未だし。

花曙散史乃新躰詩「若菜摘」の落筆着想共に見るに足るべきもれなし。春の野の若菜摘みに、也かき人を會えて、かきふて花の一枝を送るが如きは、頗ぶる陳套の嫌を免かるべからず。吾人の花曙君に勸むるよ清新なる題目ハ觸れんことを以て也。猶ほ「こも風よあびく糸遊」、「花れるまひれたもかぎ」、「鎮守の森にくれろ光り」など、語句のあやしと思はるゝ節あり。注意を乞ふ。淡翠迂人譯の「海の城」に於ては、原作を見ざる吾人は、之に何等の批点を加ゆること能はざると、只、茲は表はされたる譯文の上の之を述べ、言詞蕪雜にして、調整せず。末節の

うるはしき綾羅の衣

いかにせま日と輝く

姫君よ花よほへる

其姿いつもいにけむ

われは見ざり

の如く、たとへば詩には其特質として、散文の規矩を以て論ずべからざるものあるもせよ、奇峭に失するの極全然意義を成さず、思ふよ、草創の時代に属せる斯詩の命運は、方今猶ほ、亂離混沌の間に在り。其形式用辭等未だ全く一定せず。或は擬古の極端に走りて、濛朧と罵られ、或は俚語、俗調おあつむの極、いさく颯逸雅醇の致を缺きて、卑蕪粗雜、蠟を嚼むが如しと嘲ふる、紛々擾々、未だ斯詩海の思潮を率ひて其風尚を標定するの才學と手腕とを有するものを見ず。花曙君淡翠君の如きと、共に斯詩に向て、忠實と熱心とを捧ぐる人、此際發憤涵修、更は大に英氣を蓄へて、遂に風雲を捲て立ち、彬々たる斯界の人士を提げて、靡然として歸着の点に向ふ所あらしめよ。敢て囁す。夏季は雜詠俳句二十首、皆とり／＼ある趣ありて、この壇の旺ある、多く他雜誌に區儔を見ず。今や、俳句の分身ともいふべかりし熱心ある秋竹子去りて、吾人ハ本誌俳句壇上の一勇將を失かひたりと雖も、猶ほ一望、球江、豊泉等奇才のあるあり。冀くは以て盛名を維ぐに足り、猶ほ長く異彩を見んか。

村上先生の「祭穀堂鷺津先生文」と簡素にして、而も悲悼の情の貫盈する所、頗ぶる先生が老熟の筆致を見るに足る。去れど、元來祭文にハ一箇の類型の自々に具はるものありて、其の殆んど、其理想的形式とも稱すべく、結構布置一定せるが故に、吾人は、此種の文をとり、寧ろ照應波瀾の多き他の文章に於て、先生が縦横の奇才を觀、併せて示教に接せんと欲す。

藤紫溟君の「吊祝記」の著るしく紫溟君其人の面目を發揮し得たるものあり。吾人ハ此文を讀むに及んで、其愛硯を墮碎せる童子と視、怒らず又罵らず、却て之に告ぐるハ「汝童子不復尤」れ言を以てして、靜かに宇宙の事理を探る底の紫溟君が宗教家的氣魄を、一篇の首尾を徹して認めざるを得ず、去れど、其辭句の猶ほ洗練を缺くものあるハ惜むべし。

次は漢詩あれど、吾人ハ深々此詩の趣味を解するものあらば、或は諸君が白玉の什と取つけんことを恐れ其評隘ハ之を憚かる。

批評欄

前號の批評に關して吾人ハ大體ハ於ては、洵滄浪君に同意す。去れど、猶ほ一二首肯し能はざる点あきに非ず。滄浪君が、批評の意義を解釋して「文學的美術的製作ハ對しての善惡美醜の判斷」とせられたるが、批評の意義の、美醜の判斷にあることより、吾人敢て喙を容るゝ所なきも、善惡とせし人は善惡の判斷は倫理の職分ハ屬し、若し此判斷を、文學的美術的製作に向て爲すもれあはば、此ハ既に、文學的美術的批評の埒と超えたるものあることを信するものなり。次に又、磧川郎れ言と駁して、理想と現實とハ一致せざるもれありと言はれたるが、吾人思ふに、理想の意義と、必ず之を現實にされ得べし條理と約束とを有する想像といふに非ざるの、果して然らば、吾人ハ滄浪君の疑ふが如く「理想ある字が、有限を意味せずして、無限に高さことを意味する」ものよてとあはざるふとを斷言すると共に、又理想と希望との、著るしハ類似の点を有するにも拘らず、兩者全く混同さるべしものに非ざることを言ふは憚らず。滄浪君は事實ハ照敷して、理想と現實とハ決して一致したる例なきが如く言われされど、此ハ吾人が、一箇の理想的境地に達したる時は、更は又必ず

一步を進めて、他の理想的を劃し、斯くして追索極まる所ありを見て、早計なる論斷に出でられたるものあるべし、去れば、吾人の腦中には、理想なるもの轉々を盡くすることありと言はふ可ならんも、理想は決して満足さるべきもれは非ずと云ふことを得じ。換言すれば、吾人が之に縋りて攀上する理想の鏈條は絶ゆることなれども、其一鎖の理想は、常に現實にされ得べき條理と約束とを有するものならざるべからず。

## 雜報欄

本號の此欄は於ては、滄浪君の指摘したるが如く無意味の文字あきは、編輯員の代りたるが爲めなるべし。行軍記事は、暢達の筆も成りて、健兒奮闘の情狀機略を語るに、些の遺憾を見ず。第二回春季大競漕會記事は、班をチャンピオンの例も置ける人れ精透する觀察も由りて成りたるもの、面白かざる筈あり。只だ、文中も、名詞を句尾に置きて、甚しく助辭、接續詞を省略したる所あるは、聲調緩漫の弊も陥らんことを避け、道健れ度を増さんとして、却りて文の氣格を損したるものと謂ふべし。

## 附録欄

播水坊、不眠坊兩君の「七國めぐり、春の旅」は殆んど文体の共進會とも評すべく、「宵の雨はと静よ柳糸緑をうえ春の水ゆるむ、八重霞たなびく里より雪は消えろ光て」とは温々玉の如く文章は、忽ち變りて、「炬燵黨の總大將とまで銘打つたりし男が、をかや何を智識に、ことし北溟は狂瀾も田

舎修業の泥足を洗ふの成竹ありと寢惚々てか、母ろばの……」の道化文句とあり、再轉してと、「かふ眠坊殿、されふ今日は面の當り世も恐ろしは閻魔王廳の吟味をさへ果て」と、義太夫的節調となり、三轉して、「おまこの通り骨ろばたちて豊頬の微紅も驚くばかり瘦せた、雙星と云われた、優まき眼まで弓なりに凹み落ちた」と言ふに至り、吾人殆んど之を評するも苦む。此の初一頁の間お出でたるを抽きたるものあるが、是に至り、吾人最早次は頁を繰すの勇氣なく、七八葉を超越して、豊泉君が「總持寺の一夜に移りぬ。

豊泉君の「總持寺の一夜」は、一言にして之を評すれば、筆路森嚴、舒事明晰と謂ふべし。

吾人は今茲も、批評の筆を擱らんとするに臨み、一言を附記して、諸君も望む、秋深く風雨蕭索の候、諸君が机上「一寸青燈」は、諸君が「萬古心」を照して、感愴頗ぶる長き毛のあらん、敢て本誌の爲に、金玉の什を綴ることを厭ふこと勿きを。

黙しがた死事情ありて、編輯切期日前二三日、匆々に去て筆を着けたれば、諸君の文を精讀して、充分なる批評を爲すよと能はざらし、深く吾人の遺憾とする所にして、厚く諸君に謝する所なり

雜報

望新入學生諸君

金風浙瀝として敗荷血に泣き、天地寂寞として秋氣益々清肅なり、此の時に當りて我校更に數多青松秀才の士を獲たり吾人の喜んで諸子來るを迎ふるものあり、諸子其れ自重自愛せよ、吾人常々意づく國は之を治むるに法制あり、校ハ之を整ふるに校規あり、井然として犯すべからざるものありと、然りと雖も市井巷街の無頼漢を除く能はざるが如く、巧は成規を侵し優柔放逸に耽るもの何の校にか之れ莫らん、諸子既に我校に入る謹敎自かつ固守を學育に體育に德育に三者偏廢するところなく精勵倦まず以て純良なる美風を發揚せんことを庶幾せよ、嗚呼男子志を立て、郷關を出づ學成らざるば死すとも還らず、佳句徒らに俗流の瀆すところとなり、其の價を損ずること幾何ぞ、一世を擧げて浮誇輕薄に陷溺し、偽惡横行し瓦釜雷鳴す、少壯勇往の志士にして一たび聲色に惑溺するが如くんば噫々邦家百年の後を奈何せん、本校先きに世評

上り、一時衆目の注視する所となる、大丈夫自ら尊大おし、毀譽意に介せず、正義の爲にこそ水火をも辭せず、獨立獨行超然として信據する所なるべからず、諸子夫れ勉旃、

送舊教官迎新教官

嗚呼聚散離合の萬世脱する能はざるの通則あるが、何ぞ其れ古來幾多の人士をして銷魂斷腸の思あらしむるや、校庭と夫れ家庭の大なるものあり師は是を父なり弟はおれ子なり、嗚呼是れ實に我と欺らず、唯々其肉親なりと然らざるの差あるれを父子の間は愛を以て繋ぎ、師弟の間は敬を以て結ぶ、均しく情の恐ぶべからざるもの存す、是れ實に争ふべからざるものあり、我々今茲丁酉教官の更迭あり秋山、木村、得能、西田の四教官ハ先きに前學年れ末期に於て、上田、須藤、得永等の教官は夏期湯沐中に於て何れも本校を去らるゝお至れり、吾人は久しく諸教官の音容に接し薫陶を受くる茲に數年矣、一朝袖を分つて東西南北を分る、嗚呼再會期なれおあらずと雖も、涙滂沱とさざるを得ず、否な一掬の暗涙覺へず珍を沾さるを得ず、實に感懷忍びざるものあらばなり、吾人之諸教官を送るに美辭を以てせず、賤禮を以てせず唯だ簡單なる

一語以て足下に呈せんとす曰く攝養自ら守り邦家の爲に勤勵せられよと、之を反して中野教授以下十教官と前後來りて榎楚を本校に執らるゝに至れり、又パウエル、エーマン氏の學習院に轉じ同じく獨人エミール、ユンケル氏ハ其の後任として當校に聘せらるゝ吾人の滿腔の赤心を以て新任の教官を迎ふ、新教官の略歴之を別頁に列叙せし同學の諸君就て之を覽よ、以て其れ意を得るものあらん、

(十月廿四日夜、三休記)

新任教授略歴

教授中野嘉作、先生明治十六年理科大學探礦冶金を卒業し理學士となり宮城縣尋常中學、同師範學校に教諭し歴任し、後轉じて第二高等學校の教授に榮進せられ、薰陶年あり、去て本校の教授とある吾人之先生乃刷新經營の深く時弊に適中せんことを望む(先生は本校大學豫科教務掛主任たり)

教授大島義脩、先生ハ明治二十七年を以て文科大學哲學科を卒へ文學士となり、大學院に入りて倫理學を專攻せらるゝ、後一年志願兵に従事し陸軍歩兵少尉たり、本年六月當校お來りて教鞭を報ふる、

教授宮本平九郎、先生は明治廿六年法科大學を卒業し大學院に入り、後職を福岡縣に奉じ尋で文部省に轉じ、遂に當校の教授とあらる、

教授矢板寛、先生明治廿七年法科大學を卒へ文部省に入り本年初夏當校に至らる、

教授佐竹利隆、先生明治十九年工科大學を卒へ岡山尋常中學校に在り、本年中夏福岡前教授の後を襲ぎて來て當校に教授たり、

教授中俟匡、先生と亦諸教授と均しく本年九月を以て來て本校獨語の教官なり、先生初め大學の右筆たり後大學豫備門、陸軍士官學校に子弟を教訓し、尋で第二高等學校に轉じて本校に來らる、

教授宮川熊三郎、先生初め帝國大學古典講習科を攻め第二高等學校に助教とあり、教授に昇進し、久からず去て當校お轉任せらる、

講師内田夏、先生少壯海を航して北米自由邦に遊びエール大學を卒へ法學士とある、歸朝して福井縣尋常中學校教諭たり、後休職となり尋で本校に聘せらる、

講師草鹿丁卯次郎、明治十九年學育院助教たり、後獨逸に遊びエナー大學に入り業成り更ニライプツヒ大學に入りドクトルの學位を得て





にかなはしめは幸甚、

### 學科長級長及幹生制度の實施

太島前校長の企畫にかゝる學科長、級長及幹生の規制中學科長のみは前學年來既に實施の運に至りしか、級長幹生の制も本年よりして施設任命せられり、即ち學科長は其所管學科を統一し利害得失を考へて其進歩をつとめ、級長は擔任學生を統率し、行狀及勤惰に注意し、兼て教場内秩序及清潔を保持せしむるを計り、幹生の級長乃指圖に依り學生心得の實行を誘導する者とす、而して級長、學科長の教官中に就き校長之を命じ、幹生は各學級の學生中に就き校長之を推薦し校長之を認定する者なり、今回新任せられたる學科長級長の次の如し、

大學豫科	學科長
第一學科	教授 村上 珍休
第二學科長	教授 花輪虎太郎
第三學科長	同 中俣 匡
第四學科長	同 浦井鏗一郎
第五學科長	同 矢板 寬
第六學科長	同 野田 貞
第七學科長	同 今井 省三

第八學科長 教授 佐份利 隆  
第九學科長 講師 磯田 正謙  
大學豫科 級長

第一部法科	第三年級	教授 浦井鏗一郎	
同	文科第三年級	同 花輪虎太郎	
同	法科第二級	同 大島 義脩	
同	文科第二級	講師 向 軍治	
同	第一級甲組	教授 矢板 寬	
同	乙組	助教 蒲原 重實	
同	丙組	教授 宮川熊三郎	
同	第二部工科	第三年級	同 佐份利 隆
同	理科農科	第三年級	同 野田 貞
同	同	第二級甲組	同 河合 義文
同	同	乙組	同 内田 巽
同	同	乙組	講師 中俣 匡
同	同	第一級甲組	教授 雨谷羔太郎
同	同	乙組	講師 兩谷羔太郎
同	同	乙組	同 草鹿丁卯次郎
同	第三部醫科	第三年級	同 市村 塘
同	同	第二級	助教 市村 塘
同	同	第一級	助教 田中 鉄吉

### 齋藤理科大學々生の手束

左に掲ぐる本年吾校を卒業して、理科大學生物學科專攻中なる同學生齋藤賢通氏が予お寄せ

られたる手束あり、頗る後進學生の注意を惹きよ足るも乃あるを信すれば、能々諸子は一覽に供せるとはなほぬ。

前略理科大學は愈去十三日を以て始業仕候處同級生都合五名にて中第一より來れるも二名、第二より來れるも二名、僕を加へて都合五名に御坐候(後略)

動物學講義	(飯島博士)	三時
植物學講義	(三好博士)	三時
地質學講義	(小藤博士)	三時
生理化學講義	(ダイバース教師)	三時
動物實驗	(宋戸博士)	三二回
植物實驗	(松村博士、藤井、大渡、兩學士)	四回

動物學講義は元來箕作博士の擔當なれども米國華盛頓府に於て北太平洋及白令海に於ける腫肭獸保護問題評議會開設に付委員として出張せられたるを以て當分飯島博士の受持と相成候次第お御坐候先生ハ先づ分類動物學を主眼とする事を述べられ唯少しく細胞に就て講演せられ候先生ハ英語發音の奇妙なるは面白く

御坐候講義遅緩よして筆記し易く實に結構に御坐候先生の顔の黒さと丈夫さしき容態を見ても其嘗て寄生虫の幼虫を飲み込まれし様に被思出申候

植物學講義は三好博士にして Allgemeine Botanik に候先生中々懇切にて講義は餘程愉快を覺の申候参考書として與へられたる書籍の Frank - Lehrbüch der Botanik. Band I Strassburger, Aool, Schenk, Schimper - Lehrbüch dr Botanik.

は御坐候尙此等此書物にある事實も陳腐のところあれば取捨すべしと云ふ質問の講義中に許されず講義後おぼよと申されテクニクは凡て獨乙語に因るといふ事に御座候ザツクスレ植物書などは現今用ゆべからざるの事に候先生第一に生物と無生物の區別の説明(難きを述べ且つ自然發生説(Spontaneous Generation)の不可あるを説き唯最初太古に於て一回のみ自然發生ありしを、動物植物の區別立て難きと云ふ順々焉と論せらるる是を講義の Unterling とし植物學の歴史に及ばれ、餘は未だしに御坐候

太陽等の星學的觀察に御坐候講義の速かある  
と言葉付の奇麗なるは先生は特風有之殊に  
「ツ、フアール太陽の事は是にして」「ツ、フ  
アール地球の事は是にして」との談偶合に一  
段落毎に So far と被申候は面白く御坐候  
生理化學講義の例年之通了解し難く大閉口に  
御坐候參考書として與へられたるもの左の如  
し

- Bernitsen: — Organische Chemie  
Gannell: — Physiological chemistry of  
animal body.  
Hoppe-seyler: — physiolvginhe Chemie.  
Shevidan lea: — the chemical basis of  
the animal body.  
Dragenlorff: — Pflanzen Analyse.

先づ初めに生理化學の定義、生物體化學作用、  
生源、次々生物體内は化學的元素、醱酵の事々  
入り申候言ひるゝ處は左程高尚なるにもあらず  
大低有機化學一般ノ智識アラハ左程困難ある  
學科も無御坐候信居候

植物實驗は松村博士乃擔當に御坐候博士の質  
朴なる其風采の備はるゝ候、僕は最初何か一  
種の Decimal officer of the Botanical Ga-

relen と存居候處後大に驚き入申候而し  
て大抵實驗は大渡學士の教示に預り居候先づ  
初めの花の解剖にして其寫畫をのくとに時間を  
要し其 day なる本草家の死する事の様に思は  
れて馬鹿し御坐候檢索書は Gray's Schole fuld Book of Botany といつ初めは His  
Bis ous を檢索仕候

動物實驗は原第二高等學校教授安戸學士の擔  
當にて第一とイセエヒの解剖に御坐候此頃  
は頸肢、歩行肢、各關節なぞ外形を見て一々  
畫き置く事候僕と一回も此類の解剖をみせ  
しと云は故實を困り入申候參考書に

- Huxley: Crayfish.  
Huxley D martin: — practical zoology.  
Huxley D martin: 動物通解總論  
を御坐候得共僕は Marshall & Hirst の著  
書を參考致居候

故に動物の實驗に可成り動物界各類れ一種  
を type として實驗若くは解剖する事を學生  
に御教授相成候て如何に候哉乃ち Amoeba,  
Hydra, Earthworm, snail, crayfish, cockr-  
oach, Turtoise, frog, Frlh, pigeon, rabbit  
を以て之と云ふ様と一々と實驗致置く時、非常によ好

都合と存候如斯きとハ生物學志望者が隨意の  
時間熱心にやるあらば一學年より弟せざるに  
をわづらるべきの存候

植物の解剖乃檢索は少く Groys Botany  
に因りて學生お練習せしむる様被成候では如  
何候哉僕は是迄如斯に dry なる事を好まずし  
て練習せざりて爲大に不都合を感申候、前  
車の覆へるの後車の誠めといふとも御坐候得  
者生物學志望學生に左様御教示はんとを願  
上候

學校動物學に關す圖書を見るに動物圖書  
は非常不完備致居様に候得共植物教室より  
Text Book 非常少く唯外國雜誌のみ多數  
有之候尙 面白く書發見候ハ直に御報知可  
申上候

植物教室の植物園はあらず二棟より成り間に  
廊下を付けて相通せ中に生理實驗室、講義室、  
腊葉室、解剖實驗室、分類圖書室及び他類圖書  
室、小使室、食堂等ありて中之美麗に御坐候  
(後略)

昨廿五日後二時より植物學會例會を同講義  
室に開始し白井光太郎氏九州旅行談河野福  
太郎氏醱酵素に付ての研究の兩演說御坐候

(後略)

九月廿七日誌

吊中島金能君

生ある者は、必ず死ありと、常理の數、遂に免り  
る可ざるか、是歳八月、蘆花の風、雪を散し、殘  
螢の光、灯を点するの夕、君は城南の客舎に、盞  
焉蒿里に歸す、嗚呼哀哉、一埋骨豈期墳墓地は、  
特よ君が口誦して、愛玩常に措のざる句、圖らざ  
りき、此地遂に、君が青山さふんとは、呼、蕙蘭花  
美ならんとして、狂風之を妨げ、明月皎かふんと  
して、浮雲之を掩ふ、老松月冷かあるの夕、古檜  
風涼し死の晨、孤客尸行に對して、能く此嘆な  
かふんや、

多く言ふ勿れ、古は從て身動かば、芭蕉葉潤言し  
て、風に其幹を折らる、意を傳ふるに、何ぞ必し  
も三寸の舌頭と須めん、張儀の功を成せるも、豈  
唯よ唇動き、舌鼓せるの時かあふんや、寧ろ沈黙  
たるに如るやと、君が抱懷、未だ其銳利を試み  
ず、白雲一去、今や冥然不歸の客たり、君誰と共  
にか此心情を語らん、嗚呼哀哉、物の堅芳を忘  
む、人の明傑を諱むと、彼の松柏の霜を戴き、雪  
を負給が如く、測まらずして折るゝれ類か、各、世

事や蹉跎より易く、心と違ひ、靈鬼ハ踰邁し去て、遂に君を待たず、幽明萬里、隔絶の天ハ、呼之より分る、英魂去て何處にか行く、毅魄去て何處に歸す、招けども歸らず、追へども及ばず、蒼天を仰げば雲漢々、黄土に俯せば霧茫茫、風は萬莖の稻に戦ぎ、虫は百草の露に鳴く、積悲懷ハ溢れ、慟哭何ぞ堪へん、嗚呼哀哉、山野羞酌ハ奠、尙くは饗々よ、(露子)

### 杞憂

長睡昏々、曉を覺へずてふ、苟安的封建時代を蟬脱して、維新日尙ほ淺き、而も今や「衣到肘袖到腕」と誦する者、寥々として晨星の如きを思へば、心事劍相知、の氣象精神ハ、昔の沙汰とあり果シが、多くは唯に、前哲の行爲を扮し、前人の轍を倣ひ、徒らに、亂髮會て梳らず、古履終に繕はず、淵嘿して、雷聲ハ、山立し、海受する者、固より無爲の作、已む可らざるの議と勢に投ずる而已、狂躁客氣、宛乍ら冬の虫の水を知らず、夏の虫の火を食るにも似て、雪理空論を談ずるを事とし、老の將に到らんとせるを悟らず、更ハ指彈すべきのみを待たて死、甚しきに至りてハ、荆棘を以て目すべき者、

### 荆棘

輕裘便僻、之事とし、巧言令色、之業とし、優悠不斷、以知らず識さずの中に、醉生夢死し終らんとするの徒、尙自ら謂ふ、吾能く吾浩然の氣を養ふと、怙として且顧みるなり、風紀を亂して、世道を害す、恐る可く、寧ろ憐む可きのみ、

徒らハ狂躁客氣、以て空理空論を談ずるは、之果去て國利を廣むるの要法なる乎、碌々優悠、以て此青年有爲の時期を徒消する、果して後日新ステージに立て、新活劇を演ずるハ元氣を養ふ良手段ある乎、是れ豈書生の名を盗んで、人を偽る者に非ずや、目して臭才といひ、荆棘といひ、故又曰似て非なる者を惡むと、而も又、吾人は寧ろ之を憐むと同時に、其非行を矯め、漫々たる長睡を破り、誘掖輔翼、其舊染を一新し、營々純なるに導け、又將ハ帝則に遵び、王道を行かしむるの術かしとせん、已むなくんば、驕悍の民は御するに政刑を以てとべたのみ、夫れ、荆棘は或て取て薪と爲し得るも、糞土は又、遂は如何ともす可らざるあり、

### 糞土

何と云糞土といふ、「長死日を嘔を足らぬ雲雀か否」、似て更に非なる者、忌む可く、且つ厭ふ可き者、才あま、慮あり、然も矯風を名とし、人の爲お人を脅かし、人乃爲又人を傷く、試一片の道火、此中ハ投ずるあれば、以て狗たふしむ可く、狸たらえむ可し、其居住や、常に定まらず、時に政界に隱現するわれバ、亦學界ハ出沒す、噫、吾人は能く、此輩と齡するも耻ぢざるか、吾人豈、糞土を以て自任する者からん、是豈書生の假面を被て、世を欺く者ハ非ずや、故曰、似て更に非かる者を惡むと、

### 時習寮

きが如く、天成の美性、既に地を拂ひたるか、噫學界の前途夫之を奈何、胡思亂想、一刻又一時刻、心ハ狂風に騒ぐの斷雲とあり、思は野火に燒かる枯草と似たり、

然るに世人、動もすれば、荆棘の以て薪と爲るを視もせて、徒々ハ制刑を斷斷し、却て糞土を目して、才なりとなす、何ぞ識見なきの甚しき、狗狸其者を矯むるを知らずして、唯に驕風其物を矯めんが爲先に、却て狗狸其者を作らんとす、是猶尋を枉げて尺を直ふするの類と何ぞ撰ばん、鼎鏑ハ輕し、羽毛は重し、と夫れ何ぞ苟安、生を偷むれ甚しき、而も其茶毒を長せしめし者、抑も誰の尤責や、若し夫れ、規矩繩墨の末ハ之律、以て謀らんとせざれば、青天白日の光、得て望む可からざるのみ、知らず革新の前に情實なく、革新の後に私慾さきりを、六尺ハ男兒、首を屈して骨な

嗟呼時習寮に在る所や美なる哉、後にと。往昔百萬の雄鎮、猶十似の石垣、陰森ハ古木の間に、依稀とて併存せ、前には加賀芙蓉、兀として空を摩すると一萬尺、直ハ千秋ハ皚雪を冠して、笑て我に對ま、兵營の朝夕の角聲は、蕭々とて長へに我が情安を鞭叱す。諸君遠く笈を負ふて此に學に就の始也。人寰の紛塵を脱して、この佳境ハ阻勉するを得しハ、豈に亦諸君の幸に非ずや。あ、然れ共、諸君は、學校に諸君をして此の佳境に在りて、淬勵切儆せしめんとする眞意を知れりや、今や四高舊時の校風也、雲烟糶糊殆ど知るに困しむの時、此に舊弊を一洗して、辰章の光輝をして、爛然四海を壓せしめんとす。教化内ハ成りて而して后外に發す。學校の矚望する所は、實に諸君の身に在り。諸君夫れ決して汚泥に染まらず。澤々清漣に濯て、徳性を涵養し、深く學校に矚望する所以を考へ、協同力以て校風の振

張を謀れ。

### 自治制

時習察新來生諸君。諸君の今や尋中の羈絆制度を超えて。四高時習察自治の下に立てり。其の寛嚴難易。固より同日の論に非ざるべし。然れ共。只是の寛裕容易。即自治制の本色なるべし。乞ふ静は熟慮一番せよ。舊寮生が幾多の瘁勞と時日とを以て。自治の制を求めしは。豈に其の眞意に寛大放任を之れ求むと云ふにあらずや。蓋し自治の制の下に在らんと求むる者は。其の者既に意志確立して。敢て他人の干渉容喙を須て後。學を勵む徳を崇らせざるを自白するあり。故に自治の制に非ざると。失行あるも。其の責の上たる者亦分つべし所ありと雖。自治の制の下に在りては。纖塵の虧缺も。皆其身の失行にして。其責其罰。只我身之を甘受すべき耳。則自治の制の表に寛ある如きは。其實大に悛ある所以なり。諸君深く舊在生の眞意の在る所を思ひて。自個に身及ぼし。刻々反省して。自治の制に背らざれ。

### 偶言

一指の更る彈は。一拳に如かず。闔校の事ハ闔校之を務めざる可らず。僅に之を四五の人に委して。我關せず知らずとなす者は。一指をして弾かしむる者に非ずや。北辰會雜誌ハ四高の雜誌あり。之に責ある者豈に只其の一部のみならずや。のみハ慨すべし。前例現狀僅に文才ある一部の人士の。英華を繼にするより止りて。二部三部は闕とて聲を失し。蓋し二部三部ハ。研鑽する所の實學的にして。之ハ一個の主張を樹て。堂々然論説を立けるなり。一部の理想の學なると殆ど同日に疇に非るべし。況んや日課の繁劇にして。容與思を潜むるに間なきをや。然れ共。既より自ら撰んで斯學に盡瘁せんと期す。其の日夜精心尋繹するの間。豈に二三の爽然として會意し。案を拍て悟入矣と叫ぶ底の處からむや。嗚呼余輩の聽かんと欲する所は。此處即是耳。希くバ此時にして筆を執れ。筆神を生じ。飛龍翔鳳。一揮ハて千萬言至らん。今の北辰會雜誌乃文章絢爛に。此の微に入り隠を抉とる。精緻の二部三部の眞趣を加味しなば。大飛躍ハ。成らん哉。哲人曰く天下の事與ハ易き耳と。欺らざるあり。

### 新學年ハ於ける北辰會

七旬の休暇も半と夢裡に消過して。金風樹梢ハ秋信を傳へて。飛鴻翼に炎塵を掃ふや。復た書囊を理究て萬里金城に歸校せぬ。校舎怡々とて我を迎ゆるが如く。一樹一草皆喜愉れ種からざるはなし。況んや朋友と會ては。多年雲樹の故舊復ハ一堂に手を握るハ思わじ。朝鐘晚鈴。皆舊知の音を洩らすや。此の時に當り。新入生百五十余名。西中國。南紀伊勢。四國。北陸信州。の俊秀にして而かも皆北辰會ハ入り。將に運動部ハ。雜誌部ハ。多年の蘊積を發せんとす。因て九月十三日。

ハ無限の感慨を迷らして。鬱結、盤蛇、沈深、徘徊ハ此の時に思ふ所即ち是なる耳。男子此期に在て。駭天泣神の文字を出さずんば。水流れ木槁れ。空しく冢中の白骨に青燐を燃やして已まん。嗟呼諸君。多年修養せる手腕を奮ふの機至れり。而て我が北辰會大飛躍の秋は來れり。此乃機。此れ秋。一ハび逸してハ復ハ捉ふ可らず。予輩不肖誤りて諸君の先進するを明とせず。此れ好機に際して。豈亦度々の愚衷を盡さくらんや。新舊互ハ相推引提挈して。辰章校々風を振張し以て天下の望に答へん哉。

の揭示出づ。嗟呼我が北辰會此より振らん哉。若し夫れ其の消息ハ不敏と雖。予輩之ハ當らん。

颼颼たる金風炎塵を一掃して。玲瓏清肅の氣空ハ滿ち。蒼茫たる大月。凜として人寰不淨の穢土を照鑑す。此の時ハ當り。我が北辰會新ハ俊秀百五十余ハ會員を得たり。嗚呼是豈ハ我會大飛躍の秋なるなかつんや。暑中休暇七旬の間。我會の手を入れ。足を投せざり。一里の校庭に。綠草漸く露に咽で。土轉ハ冷なり。野球、蹴球、ロソテニス、唯諸君の欲する所。肅殺の氣神志を鼓舞して。壯士屠龍搏虎乃活技を演ずる。此の期を措いて將た何にの求らん。若し夫れ。半宵圓窓乃下。淨几ハ凭りて。神を四圍の萬象に冥合せしむれば。虫衰草に鳴て。寒烟月を罩む。寂寞幽青



第二高校盟友の熱誠に答へて我校半千に同胞に告ぐ

伊藤紫溟 郎

三秋の高天月色清くまて白露漸く深く、旅雁恨と合んで虫聲身骨お鍼す、不知宮城野十里の秋色今果して如何。烟霧蓬窓を罩めて積翠珠を轉ずる、松島灣頭の海風今果して如何。我敬愛する二高の盟友幸ひに健在なれや。

回顧すれば既で二數閱月當時乃事なりき。二高の盟友ハ、その五月發刊ある、尙志會雜誌第二十一號に於て、今春は兩校端艇競争會中止の件ニ就き、滔々數千言或ハ雜報ニ、或ハ附録に、反復鄭重、我辰章四高の同胞を規戒して殆んど其痛切を極め、痛切の極人をして或ハ其愛罵ハ非ざるを疑はしむ。吾人は固より信ず、二高の盟友之謹直にして友誼に篤く、自ら修むるニ急にして他を責むるに寛に、徒々私意を挾んで盲斷を逞ふし、以て他の落落皎潔の心事を疑ひ、又猥りに惡聲を出して人を傷け已を汚がし、以て自ら快とする者に非らざることを。是を以て彼の縷々數百千の言辭も、初めの以て通例一般の記事となし。學務忙匆の際、讀遇玩味の榮を得ざりしか、吾人の深く憾とする所、否疎慢の罪又鮮少ありとせんや。吾人が前號ニ於て一辭の敢て此ニ及ぶ者なかりしと、一は全く此疎慢乃結果に外ふざるなり、其後同窓の士裂眦憤慨腕を扼して吾人の怠慢を責先、切に警告する者一再おして止まらざりた。乃ち同誌を取て播讀一番し。吾人の胸底忽ち一大疑團を生じ來り、殆んど其解釋に苦しむ者あり。嗚呼由來方直おして自ら修め、洪量度お憚り二高盟友何を苦んで此言を發せる。知らざる友愛の至誠溢れて此お至れる者、抑又他お深意の存する者あつて然るか。吾人の萬々諸氏乃舉が后者は出るを信ずる者にあらずと雖ども、事實往々之を否定する傾あると、吾人は深く諸氏の爲災に悲しむ所あり。昔者和氏連城の壁を抱けて而かも三年血は荆山に泣く、嗚呼知己難か正義難か、抑又君子の徳風遂に人を服するに足らざるか。彼言は諷規たるを、罵倒たるを問はず、其責一に吾人の非徳に歸せざるを得ざるなり。已を赤誠を布き肝胆を開て人に接

し、他人尙ほ吾を議することあらん。吾又誰を怨みん、唯自ら非徳を訴へ不遇を哭し、退て徐るは修むる所あらんのみ。

第二高尙志會誌第二十一號雜報中、「流星光底逸長蛇」、なる條下は於て我校との端艇競争會不成立の恨を述べ、劈頭先づ其意氣と抱負とを喝破して曰く、

自號して東北幾多の校舎の半耳と取ると稱と、吾人の素志何すれば徹々たる此の如き者からんや、區僻なりと雖も高山峻嶺の我元氣を養給ふ足るあり、……中原馬を躍らして逸鹿を逐ひ天下の豪傑快戰まで、以て落落の雄心を満たし鬱勃れ霸氣を吐く、是吾人が日夜翹望して止まざる者に非ずや、而れども志事と違ひ未だ與に雌雄を決するの好敵を見ず、密かに肢癢の情お堪えざりき、

と、嗚呼、大丈夫の意氣此の如く、潑刺風雲を期する青年の霸氣此の如く、數百有爲の俊秀網羅し堂々覇を宇内は稱する高等學校の抱負應さよ此の如くあらざるべからず。吾人不肖にして天下乃豪傑と親角し、志を四方は致との力に乏しと雖も、這般れ抱負と意氣とに至てハ、夙夜腦裡に奔躍して須臾も忘る、能はざる所。是を以て春雨秋風中原を望んで空々浩嗟し、鬱勃鬱鬱の恨を抱て北溟の亂濤に壯夢を反復せし者、夫幾春秋ぞ、往事茫茫凡て烟の如し。吾人の不肖にして尙且然かり、况んやこれ朝に青葉の嶄然を望み、夕に瑞寶の儼乎を拜し、五城の山河は俯仰しては雄略一世を蓋ひ之當年は獨眼龍を悟見し。恨淚滂沱髀肉を痛嘆し給ふ、盟友は壯心を掬しては、吾人誰か又同情數斛の涙を惜しむべき、

昨夏白山下の同胞傲を傳へて戰を求められしも、事甚だ突然お出で我ハ準備を營むれ余暇をかりしを以て、已むなく之を拒絶せしは吾人が終天の遺憾とするところあり、

明敏なる二高諸君よ、諸君ハ此簡單ある數語を以て、昨夏の恨事を葬り去らんとするか、其事態の大小輕重或ハ今春の所謂競漕中止ある者と同一ならずとせんも、其情に於て又何の軒輕のこれおらん。中止ある者が果して如何に人骨を徹するの消息を熟知せる明敏なる諸君にして、尙此言あり



吾人の轉だ諸君の自恕するの寛よして、人に責むる峻酷ある美德を稱一稱せざらん欲するも豈に得べけんや、而も諸君の既に「境限なりと雖も、八百八島翠螺銀波に散在するところ壯士の英志を磨く鐵腕を鍛ゆる者あり……」落落の雄心を滿たし鬱勃の霸氣を吐く、よれ吾人が日夜翹望して己まざる者に非ずや」を絶叫し今ハ辭を準備の不整と事の突然と藉り給ふよ至て、治に居て亂を忘れず、春宵おは戟を枕にせらるゝ程れ諸君をハ吾人如何ハ解釋すべんかはたその言に孰れにケ信を措くべき、吾人殆んど茫羊れ嘆に堪ぬざるなり。

吾人豈に徒らに過去の歴史を抉摘し、既往れ痴夢を云々するを欲する者ならん。不幸諸君れ挑發的筆路ハ、吾人をして今や默止に安んせしめざるを奈何。回顧すれば昨夏八月、渺々たる芙蓉の大湖波靜かおきて横亂れ人なく、稷々たる唐崎の老松獨り千古の遺音を傳へ、白鷗の濤沈は空をく馮夷れ暖夢よ入り、瀟湘の烟雲萬里模糊、神勝精氣の萃まる所の磅礴凝りて此觀光を爲し、水銀れ如く、砂珠れ如く、將さに第二回琵琶湖連合大競漕會ハ盛舉あらんとするや。連合會委員、書を飛ハして第二高校撰手との競漕を勧誘し來りたるは實ハ六月中浣の頃ありとす。事誠に突然と出で、迅雷耳を掩ふ違なきの感なくんばあらず、加ふるに時偶々學年試業の厄ハ際し。吾人同學の繁忙多岐ある、さかから峻坂を轉ずる火球よ異ならず、一冷又一熱、一愁又一喜、片時の油斷ハ一年の得失と一身の榮辱に關し、孤檠ハ短夜をこめ、食事のひまを窃みて目ハ圖書の邊をたどると、平居氣を負ハ慨を尙び壯言大語風雲を吞吐する五尺の一身も、あられ今は「レツリンス」の「ビクナム」とありハておん折にも、我艇會員の健氣なる、忽率一回の商議に、咄嗟、滿腹の熱情を絞ぼりて、快よく贊諾の戰書を贈りしことも、顧みれば事豈に偶然ありとせんや。嗚呼此鐵腕朝に北海の寒颯と練り、夕に蓮湖の狂瀾に鍛へ來りし、吾人の鐵腕はた又何處にか用るを得べき。時非ある乎地利ならざるか、吾人今よして立たざんば、吾人の終に永く草菜お老去り、一片の枯骨空しく無情の寒砂お委するお畢らんのみ。嗚呼此の恨や綿々浪々又誰よか訴え、いつのん尽きあん。よ！越山千秋の白雪春風を孕と、滾々萬里の長江尽くるの期あるも。吾人の衷情遂お能く鬼神を動かすに足らんか。

抑昊天吾人を棄つるの意なきが。今や吾人を導き吾人を助け、滿天下貴紳環堵の中に吾人の技を試みんとす。地ハこれ琵琶湖十里の烟波、敵ハこれ東北れ好漢。昔ながらの滋賀の都よオール握つて二高の健兒に見え、今の盛りに昔を忍びてんこと、眞にこれ人世れ快事、我辰章校意氣の揚がるも亦此一舉にあらん。彼區々たる成敗利鈍の如きお至ては吾人の未だ計較するよ違わらざる所。是を以て吾人不敏にして辭令よ糊はす。言を左右に托し事の突然準備不整等れ私情に拘りて此好機を逸するを知らず。こゝに微力を揣らずして、連合會委員に向ひ應諾の戰書を發したるのみ豈に他わらんや他わらんや。

既にして行路難を唱へたる學年試業も間もなく、終結を告げしかば吾人拮据經營幾多の障害と艱險とを排し、部署畫策漸く成りて洩す所なれに至る。乃ち一騎當千の七本鎗からぬ七撰手を擁し、北國ハ荒武者優勢すくばて三十有八騎、緋威革威種々の鎧をこそ着かざらざれ。白帽黒帽北辰星章をひらめかし、金城明媚の山河を辭し、逆浪日を吞む金石港を進發し、船路遙か江州に攻光上りて、柳瀬七本槍の英風を慕はんこと將た日なふざんとなす。巍々として天空を摩するの白山は森然嚴父の如く、澗々連波を轉ずるの蓮湖ハ慈母の如く吾人と送るに似たり。依て校友一同酒を高樓に置いて撰手を招き以て其行を壯んにせり。杯三行壯士髮わがりて冠を衝き、氣宇豪宕四表を呑み、慨歌悲舞、單蓑直入りて虎狼の窟をほくを歌へば、一臂深くさぐる蛟鱈の淵と舞ひ、吾人をして轉だ燕趙悲歌の士を想見するに堪えざらしむ。行く者送くる者かたみに手を握りて別を告げ、雄風四邊を拂ひ一行車を連結て、金石港頭にこころは向ひけれ。先に吾人も本誌上お於て當時の狀を叙して曰く。

噫誰れり想はんや、別を送るよの高謳亂舞の瞬間が、忽ちにして、絶望、落胆、否寧、乃悲恫痛恨、無念の奈落お吾曹を沈め終らんとす。あはれ神なぬ身の撰手は、打よする港頭の鞑聲に耳をまして曉くるを遅しと扣えたり。役員評議員は、東馬南轅鞍を徹して萬般の行装を急ぎつ、奔れり。……發矢、咄!!聲之何物ぞ、刹那、大會委員の簡牘は、突然一行の手に落ちたり。

これ何事の消息ぞや、嗚呼これ何たる消息ぞや。我艇隊が當の敵手と覺悟し、る第二高校の艇友が、撰手競漕を謝絶するは悲報ありけり、撰手競争不成立の悲報なりけり。然かも、我艇隊の名譽、存亡、死活を、毫厘一髮の危きに繋ぎたる大問題が、遅々たる一片の斷簡に依りて宣告されたるありけり。一同展讀唯相顧みて茫然たるのみ。乗船の間際に逼りて迷ひ去のみ、泣き去のみ。……行かんや、苟くも四高の幡幟を翻ひしたる健兒が、名もなき野武士と引組んで、敵の細首搔たりとて、何程の功名やある、未練の者よ情けあの撰手やと歌はれれば、未代までの耻辱、之に過ぐる者い勿らん歸らん。歸らんか。さうな宏堂の下に、袂を連ねて高會歡呼する三十八騎、々々零々の箋信に挫きては、何の厚顔か再び半千の僚友に見ゆるをえん。船は出船の瀛笛をささる、人々絶望の吊語を贈くる、思は千々に亂れ、撰手の胸裡は、諸共に哀れと思へ山櫻、花に心を三芳野の香りも清きも肌抜いて、いさと言は、見んぞと据え、覺悟の健氣さ、想ひやるだに苦しむらざるや。

嗟呼是れ少くも吾當局の罪にあらず、二高諸君の罪にあらず、又大會委員の罪にもあらずして流轉免れ難き世態の一不遇のみ、一天命のみ、されば固より人を怨まず、自らも咎めず、洒々落落たる光風を宿して、鏗深、絳然、素波を濯歴に碎き、海若れ堂を北溟に探りて、徐るに期と次回に待ばを願ふ者、之即ち四高男子の本領に非ざるや、本領に非ざるや。

吾人今又此言を反復するの止むを得ざるに逼る、明敏ある諸君幸ひ首肯する所あるや否や。爾來歲月烟れ如く去て、日と閑すること茲に殆んど半星霜。料ざりき今春睦月二高の盟友檝を飛ばして戦を挑み、春風四月輕く花片を吹て、烟景皇城に滿つるの時。墨陀洋々花雲翻て流水も入る邊二校撰手の壯士を會し、輸贏を二隻の輕艇に寄せ、決勝を刹那に争ひ功名を半楫に賭し、大に東北々陸二州の元氣を闘て、花に浮かれ月に酔へる滿城子女の懶眠を攪破せんと。是固より吾人の所

期。昨夏昊天无情よして吾人を憐ます。垂成れ機運と奪ひ去りて、空しく一片の泡沫さかたれ、吾人の宿志徒々に蹉跎し畢りつと、緘黙自ら胸中萬縷を悶を抑へ來りし所以の者、實に機を他日に待ち、今日の如き事あふんを夢想したればあり。是を以て我辰章校七百乃同胞此慶報に接して誰れかハ踴躍狂呼せざるべき。地をこれ神州の帝京、時をこれ陽春、敵ははれ東北の雄鎮。噫十年恨を呑んで朔方に眠り、慷慨長劍を弾じて中原を望む。中宵蹶起して痛哭脾肉を撫すれば幽鬼影凄涼。窈かに北陸秀靈の山河は孤負するを悲むる吾人も。今や槊を横へて中原の月を賦し、深蘊蓄積の我技を發揮し、四方環堵の肝を破り胆を碎くに至らんとす。千秋の快事百年の好機、丈夫會心の事豈又是に加ふる者あふん。乃ち自ら揣らず辭を卑ふして快然贊諾の意を通す。然と雖も成敗は數のみ、輸贏は時のみ、又豫め必とべからざる者あり。否區々成敗の事の如きに至ては、吾人の深く意に介するの所にあらず、吾人は唯我力のある所を盡くし、天分を致すを以て甘心せんのみ。吾人不敏と雖も必窃にテームス河畔斯道老將は雅量を欽して止まざる者。春光蕩々花開く時、二校の壯士落々笑て相會し、嬉々手を握て昨の非を語り、慷慨歌呼赤心を開いて肝胆相照らさば何の快か又之に加へん。オール取てこそ敵味方あれ、もどこれ同胞學府の子弟、他日相共に提携爲とあるれ大任を帯ぶる者。互に元氣を發揮し、意氣を砥礪し、萬丈の光炎能く天下の耳目を動せば即ち足れり。又何の他に求むる所かこれあふん。

我艇會の這般全幅の滿悅と希望とを抱てその準備をあすや。滿校七百の士氣横溢し來て軒昂の極半狂亂とあり。撰手七士と殆んど學科と一身と犠牲、供し、叱咤運湖に馳せて鐵腕を陳る。稜列二月の寒風肺腑を貫ぬき、飛雪紛々急霰矢の如くにして肌を劈くことあるも、能く萬難を排し百難を顧みざりし所以の者、諸氏愛校の熱血炎々沸くが如きに外あらざるあり、此際に於ける撰手七士粉骨碎身の熱誠辛楚と、滿校七百の同胞が撰手諸氏を盡くせる友愛れ至情とに至ては、吾人ハ又た何の辭を以て報ゆるをえん。少くとも二高の盟友ハ此間の消息を經歷玩味せるもの、吾人ま何すれぞ贅するをなさんや。

堅忍なる我撰手諸氏、此の如きの熱血を抱て、寒颯逆浪に肺腑をさくし、鐵骨を浸たす者此に幾句。健腕鳴り來て春色漸く短籬の一枝に笑ふに至て、壯魂益々昂りて意氣天を衝く。乃ち唯指を屈して南風京城に滿つる豫定の戦目を待ちしに、何事か蒼空忽ち電靈を点して、暗雲忽ち氷月を包み、悲風地を捲死來て花梢を亂さんと。嗚呼時乎命か、昊天吾人に歎するの虐一に何ぞ此に至れる、吾人誠に天道の是非を問ぬお躊躇する能はざる者あり。先きに昨夏已でに一ひ吾人を苦しめて、空しく雄志を奪ひ、今又宿志をして遂に蹉跎お畢らし先んと。蹉跎の原因とは何ぞ、他なし、當時第二高校は内部に於て不幸紛紜不祥の事を醸し、諸君をして非常け困厄に遭逢せし先し、同胞校として、吾人の深く悲しむ所、哀痛同情の念轉々禁ずべからざるなり。吾人不敏にして其事由れ如何を知らず、又其正邪曲直如何を論ずるを欲する者に非らず。唯同胞校の悲運此の如くなるを見、此際に於ける兩校撰手競漕會を對し、我辰章校が同胞として二高より向ひ取るべき處措果えて如何。敵陣内お潰へて勢虚あるに乘じ、尙我鐵腕を加ふべきや、抑又退然温克禮讓の美德を守り、才を収さ光、滿引の弓弦を絶ち、以て我大義を示すべきや如何。

今三軍の魏繚旗鼓堂々敵陣を壓し。將軍算成まで士奮躍、劍戟血に渴して飛箭手も在らず。凄風颯々戰機迫て間髪を容れず。將軍一呼せば鐵馬砂を蹴て起さんとする一刹那、哀哉敵軍和を失して内に亂れ、暗風天を蔽ひ來て亂鴉城上お啼くよあふり、彼堂々二軍乃師向を能くこれ潰亂れ敵を衝くべきや如何、若かず默然士氣を抑へ刀矢を包んで軍を班へし、徐ろお期を待ち敵の勢また盛あるに及び、快笑一番輪贏を角逐するあらんのみ。誰か又敵の困憊お乗し我威武を瀆す者あらん。敵國相臨むに於ても義まさし此の如くあらざるべからざる者あり。況んや同胞の誼ある諸君と吾人とに於てをや。吾人は諸君が奈何ともすべからざるの急厄に陥るを見て顧みず、義尙ほ之に乗じて能く挑戦すべからや、或は又諸君が情を訴へ媾和休戦を哀請するに及んで後始めて戈を収むべきや。吾人不幸として北陸に學び深く不識庵の義を慕ふて己まざる者。初より旗鼓相臨むを知りて。敵を米鹽

に苦しむるを知らず、兩雄相角するを知て其遺孤お加ふるを知らざるあり。彼老奸伊達獨眼竜が豺狼の慾を逞ふして弱小を凌虐し、而るも尙ほ汲々江戸將軍の御機嫌取りを以て満足する如死ハ豈に吾人の能くおべた所おらん。吾人微力否其分として諸君の困頓紛紜をこそ救ふ能わざ。いづでかは諸君の厄に乗じて諸君を苦しむるに忍びんや。請ふ今より吾人をきて少く兩校撰手端艇競漕會中止に至る迄の顛末の梗概を録し吾人が如何に此間に處せしやを語らまめよ。

抑彼競漕會ある者の消息ある、本年一月廿六日附を以て第二高等學校尙志會水上運動部より我校端艇部に向て送るる戦書お起原し、我校やがて應諾お意を通ず爾來營々其準備を事としてこれ日も足らざりき、既に去て三月一日吾より書を二高に致し四月上旬の春季休業をとり此盛舉を遂げんと欲するの意を告ぐるや直に其承諾を得たり、依て二高諸君と共に第一高校の端艇競漕會を期しそれ來賓として競漕を行はんことをば第一高校と交渉せし、二高と四高とは互に其春期休業の期日を異にするよりして此議遂に成らざりき。是より先き二高は不幸にも一學校と生徒との間に確執を生じ生徒一同擧て其業を廢し「競漕の前途に關し大に憂ふべからざる者ある」に至りしが、此時に及んで「騷擾其極お達し密雲漠々雷霆轟き大雨沛然として至らんとする者の如く」の文字と凡て二高諸君に借る、ありしかば、吾人大に憂慮して痛悲措く能はず、同胞の誼いかに袖手二高の厄を傍觀をべき乃ち飛電して曰く、

競漕見合ハスカ、  
 と實にこれ三月十六日の事なりとす。同月廿一日又私電を發して、  
 第一モ斷ハリ貴校モ混雜中レース見合ハスカ

と曰ふ、去れども是等の電音に對する二高の返信たる「二三日待テ」及び「處分アルマデ待テ」と曰ふ、るが如死茫漠殆んど其要領を得ざるに感に堪えざりしは吾人は熟慮以て數回の商議を凝らし遂に涕を揮ひ三月廿三日電報を以て二高より告げて曰く、  
 遺憾ナガラ競漕見合ハスカ委細アト  
 と、依て此日吾人は直お左の書信を送りき。

拜啓各位益御清適欣喜此事に御座候者本日不取敢電信を以て御報知申上候通競漕中止の件貴會各位の御所存は如何も候得共弊會も於てこの這回の競漕に到底成立すべからざるものと愚考仕候其所以と元來端艇競漕の如き一種の游技に屬し、殊に御互に帝都の中央に會し萬目環視の間に競技仕等は云々平穩無事なる時を利用しては存候這般貴會より競漕の御勸誘相受け候節は貴校に於ても弊校も於ても別段の出來事として無之乍不熟驥尾に附して諸賢の御教示相受候得者斯技の進歩上學生の親睦上甚だ好都合と存じ實は不取敢御承諾仕候次第然に今回貴校も於ては端なく不慮の紛擾起り各位の御心配も容易ならざる儀に有之殊に次第に依りて將來各位の御方向上にも容易りざる影響を及すべき今日と成居り尤も遠隔の事に候得者詳細の御様子目下の進行等一々拜承仕兼候得共何分此度の事件ハ學校重大の凶事に相違無之兄弟校さる弊校學生一同に於ても實に各位の御不幸に向て同情の涙を濺ぎ居候全体學校長の交迭す其校に取りての重大の出來事に可有之況んや貴校今度の事件の如きは實に未曾有の大事事件にて兄弟校さる者は徳義上宜しく愁傷謹慎仕るべし者存候隨て弊校に於ては右紛擾事件承り候當初不取敢評議會相開き今日は到底端艇競漕等催すべき時非ざれば徳義上右競漕は弊會より謝絶可然との議も出候得共何分遠隔の事として事情にも通じ兼ね且の貴會より未だ何等の御通知もなきに謝絶仕候事は欠禮の虞ある儀と存じ過日日報を以て御照回仕候處返報ハ二三日待つべき旨御返電に接し爾來未だ何等の御公答なきは御紛擾の善后策御講究の目下大急務にて端艇等の云々未葉の事項にて到底御評議の及ぶべき筈無之と愚推仕至極御尤の儀と實も愚考仕居り候中新聞紙の面にて貴校は事件も略落着の様相見受け稍然眉を可解儀と窃も奉祝賀隨て今一應電報にて御公答相促候次第然るに貴校の或方より弊校の或向へ御私電に依り該事件の處分未だ相附りざる旨承り更に惑を重ね候乍去處分未定とすれば落着の期も定かならず又處分の方法に依て之向後如何なる進行を見るやも料られず各位と勿論弊會一同に於ても到底共に競漕等の事を語るべき今日に非ずと愚考仕り候就ては本

日評議會相開き休戚を共になすべき兄弟校さる者ハ今日ハ實際に徳義上競漕等の事を以て再三各位を煩はすに不忍進て弊會より謝絶仕候に至當の儀と決議仕り不取敢電報を以て右通知仕候次第御座候尤も今一應詳細の書信をへて決議仕候事至當の順序なるべしとの議も有之候得共何分時日切迫ハ際猶預れ違も無之又貴校の御紛擾ハ際等は是等の事に關する書信の往復も快あらず遂に右決議仕候次第に御座候且第一高校某氏の書信に依れば校長は貴校と弊校との春期休業ハ衝突有之候得ば來賓として兩校を招く事は出來難との御意見の由に附て一高諸賢も不易配慮にて兩校共出京乃至端艇借用方相申込候は十分盡力して競漕成立を謀るべしとの來信有之候得共御互學校の責任競漕を企て候も不確定の條件の下に上京仕候事は如何とも存ぜられ又大學へ依頼仕候とも諾否ハ豫期難仕貴會に於て他の方法御搜索の御暇も有之候間敷時日切迫の際ハ候得ば是等の事モ一の障害に可有之候且又幸にして貴校事件近々落着仕候とも天下の衆評未だ冷めざるに帝都の中央に於て競技仕候と御互余々快儀にも無之是等の事之強て不成立の理由とあるに足らざるも幾分の御互に一考可仕事かと存せられ候要するに貴校が大事事件ある今日も有之また今後とて合議の上何時にても成立し得べき競漕に御座候得ハ強て今回を限る譯ハ無之不都合の時日を避けて便宜の節を相待度と存右謝絶仕候に附不惡御諒察被下度奉願候恐惶頓首

三月廿三日

第二高等學校尙志會水上運動部御中

第四高等學校端艇會

と、吾人が節を折り情を屈し二高諸君を盡くしたる事既に此の如く又頗る努めたりと謂つべし。吾人ハ誠意と微衷とは頂天立地俯仰神祇に愧づる所なく、又自ら其間然する所なきを信じて疑はざる者あり。借問す二高の盟友吾人の俠骨を解するや否や、此同情の至誠を知るや否や。此の至誠を致して通せず、此俠骨を抱て疑はるゝに至ては夫れ之を何ぞか曰はん。人世不遇の恨何者か之に加へんや。噫吾人の徳をそれ畢ひに孤なる乎。曷それぞ己の誠を盡くして盟友に疑はれ、職軻の恨を



呑むこと此の如く惨なる。唯自ら痛哭して我徳非まなく人を動すに足らざるを悲しむの意。果して然らば二高は盟友は如何も吾人を解し吾人を疑ひ、自ら知す自ら恕するの厚きか、乞ふ吾人をして盟友の文辭を借りて之を説明せしめよ。

二高の盟友の同じ「流呈光底逸長蛇」の文中に記すらく。

而して何事を越て一日一道の霹靂空を破りて直下し、吾人が連月の經營を空ふし辛苦を水滸に歸せしめん」と。

覇心勃々將さに天を突かんとし、滿校の健兒、殆んど茫然爲す所を失ひ、覺えず齒を切して北天を睨すること多時。

壯士甲を擇し、刀を提げて陣頭に顯れるは、戦せんが爲をなす、戦に死するは、死すとも憾なし、唯夫兵刃相接せず、弓矢相及はず、血未だ流れず、屍未横はらずして、敵己の旗を卷て逃走す。

決戦の期眉睫の間に接し、諸般の準備全く成り、壯士の鐵腕己に熟せる時にのみ、突如として此を報じ來らるるに至りて約に背け信を破るの非難決して免るべからず。

吾人は四高諸士は二校競漕の大事を決するに益み、專斷遽急に過ぎ盟約を輕らんと信義を藐視する舉動に出でられし、頗る恠訝の至りに堪えず。

東北自男子の爲るあり、戦はずして頭を屈し、自降將軍たるを甘んずるの輩は斷じて一人の之をきを保せん也。

又撰手諸氏の勞を謝す中に於て、

好敵正に目前にあり、相健闘搏撃、勝敗を決するの約己に成る、而して敵忽ち軍を退けて遠く去る。

と又其附録「阿武隈川遠漕記」、又記すらく

遙かに北方の天を睨して獨り腕を撫せしもの多時、然りと雖とも磊々落落々々光風霽月の如くなるは我等の本領とする所、亦誰をか恨みん、何ぞ亦深く他の不義不信を問はんや死んや、彼の漫然として諾し偶爾として去る輕薄兒の如死ん我等の共に事をなすを耻する所にして、初先より其然るを見るの明かかざらん我等の却て竊に悔る所なるに於てをや云々。

嗚呼これ果して何等の言乎、嗚呼これ果して吾人に教ゆる者か、抑亦吾人を嘲けり吾人を誣ふる者乎。是に至て吾人の胸中蟠擔せし一大疑問は、始めて解釋一掃せられ、所謂謹直なる二高人士の素性を看破しぬ。若し此言をして禮讓の念なく、廉耻の節なき車夫馬丁の口をり出でたりとせんや、吾人又深く恠をせずと雖も、此徳聲が堂々たる帝國高等は學府を遊び、學藝の深奥を叩くと同時に自己の品性を崇大せらしめ學徳混成以て當世を照らし百代に垂れんことを期する諸君、而かも謹直友誼に厚た二高盟友が其同胞に對して發したる者あるに至ては吾人又何とか曰はん、吾人の唯長大息して己まんのみ。其位置を問へば即ち高等學校の學生、其責任を問へば即ち社會を先導一世の儀表たるべき諸君にして而かも却て此言あり。吾人夫誰と共に社會を壞亂を救さんとする。臆濁濁なるや現代の社會、吾人は遂に築狗却て堯は吠急、他人を付るか自己の蠶を以てま、恩に報るに怨を以てするの眞理を是認せざるべからざる乎。

我辰章校七百の同胞よ、二高の昌言を拜して今感果して如何。我心石にあらずば轉ず可らず、我心席に非らざれば捲く可らず、我心死せるに非らずいかで脊骨の感なるべき。吾人偏狹或の清濁并せ呑むれ雅懷に短なりと雖も、而うも尙や自重の何ざるを知と、品性の何ざるを解する者。あはて暴を代ふるに暴を以てし、亂を酬るに亂を以てし、睨然惡聲れ戒を破り、親濼なる同胞二校の誼を以て、唾を識者に招き、醜を天下に傳ふるが如きは吾人の斷つて爲す能はざる所あり。吾人不肖唯



永く二高れ昌言を懷裡に存して箴を敷き、造次も忘れざらん事を期せるのみ。  
 敢て我校半千の同胞に告ぐ、怒る勿れ慣る勿れ。君子若怒亂庶幾過已矣、男子の怒るまきに自ら  
 の時あるべし、區々の小憤は堪ざる如きは豈に吾人男子の本領からんや。見よ小勇は悻々大勇は  
 黙々、小人詭辨を弄し悪聲を出して人を誣ふれば正士益々温平たるを。徒々に人を罵り人を傷け以  
 て自快となすはもとこれ匹夫の勇のミ小人の事のみ。偶々以てその陋劣無力爲すなれを証する  
 よ足らん。丈夫の襟懷磊々落落々應さる光風霽月の如くなるべし。吾人又何をか曰はん。吾人もど  
 も是等不祥れ言を以て二高盟友は美德を議する者非らずと雖ども、唯自ら己の非徳を顧み、偏  
 狹を慚づるの余録を以て一片れ箴たらしめんことを期するのみ。  
 吾人の非徳遂に同胞諸君の棄つる所とあり、諸君をして「……輕薄兒の如きは我等れ共に事をあす  
 を耻する所」と叫びしむるに至る、夫之を何とか曰はん。然りと雖も遠く望れば一高の健兒は雄然向  
 丘畔覇を一世に稱し、五高れ壯士跳躍中原を睨するあり。吾人の教を受け事を計り力を角する者  
 何ぞ獨り二高の士のみあらん、東北の士のみあらん。我か辰章七百の同胞よ幸ひに努力奮勵徳を養  
 ひ技を磨き自重して可あり。

吾人不敏にして文辭に嫻はず、魯直にして意をまげ言を飾ざるを知らず、單刀裸体敢て赤心を布く  
 明敏ある二高諸君幸ひに情を垂れよ、今や秋深く馬肥え燈火親むべし盟友希くは自愛せよ。  
 漫りに冗言を陳じて本誌を汚したるハ吾人の深く我同胞諸君に謝せざる可らざる所。是又止  
 むを得ざるに出でたればあり豈に他あらんや他あらんや。



本州横断并西國順禮紀行

豊 泉 生

一夜關山の月に征戈を枕すと夢みて、旅情頓ち動け、風には緑陰老松の下、洵然杖を横へて晝寢の  
 夢を結べしむるの涼風を想へ、雨には嶮峻峻嶺に、汗漿淋漓たるの時油然雲を呼び沛然涼味を送る  
 の驟雨を思ふ、月を雲に山に水に、見るとして行旅の妖魔に魅せらるることなく、日夜西南の天  
 を睨みて、うが青山白水を空畫する者茲に半年、今や至快ある夏期休業も既に旬有餘日の間に迫ま  
 り來れる今日此頃、此感殊に深きを覺ゆ、一夕阿部吹城と談し、談偶々之及ぶ、吹城謂ふ之ある  
 哉、生も今夏こそは愈々飛濃の山水に、暮年の塵思を洗へ、長良の濱に、信長が遺魂を吊して、蕉翁  
 の舊懷を慕へ、養老山下にて、孝子タ片身れ菊水を汲んで、大廟や二見に神代の昔を忍び、那智や高  
 野に參して、明君大徳乃靈蹟を拜し、更に難波に、師旅を整へて、瀬戸の内海を渡り、琴平に詣ぬて、  
 海上に安全を謝し、以て歸省とるの覺悟あれば、與に共々、鐵脚の根氣較べするも亦快ならんと、壯  
 旅の根底は茲に定められ、高橋揮水、渡邊埠良、之を賛するも及んで、茲に四人の健兒ハ、血を盟り  
 て、杖を頼との雲水の友となるを盟之ぬ。  
 鶴首して、一日と待ち、二日と數えし、終末の試験も、六月念九日を以て終り、茲に萬鈞の重荷ハ地  
 に落ちて、心も氣も只旅行の一途あるのミ、即ち余は匆匆歸省の途に就け、ひささら其準備も汲  
 々たりき。  
 歸省の第三日、朝來降りしたる大雨は、人類も山河も眠に落ちん七つ頃、吹城、埠水、埠良の三兒は、  
 甲斐々々しくも、脚絆甲掛を身を固めて、愚庵を叩きけり、興もなく趣もかた愚庵の三夜も、泡の如  
 く消へ去りて早や、今日は、發途れ日となりぬ、呼我れ異郷に遊子とありて慈親お見えざる者、茲に  
 一年、僅々四日の歸省、焉なんぞ能く綿々たる萬斛の親話を盡すを得んや、然るに今や再び立つて  
 慈親に背け、卿堂に離れ、三寸乃草鞋に千里れ嶮山荒波を踏破し盡さんとす、不孝れ罪も亦大なら  
 ざや、若夫四旬半千里れ行旅、能く浩氣を養へ、詩囊とやらを肥やすを得て、父母弟妹お其快の幾分  
 を別つを得ば、卑懷何ぞ窮まらん、

時ハ維れ七月五日、東天漸く紅を告げて、殘月低く西嶺よかへり、満目の稻田颯として涼しき青嵐を漂はすの時、四個の行脚の泉郷に草庵を出てぬ、青翠と廣漠の外、何の眺めもなき婦中の廣野も、二里と過ぎ三里過ぎて、神通河畔に出でて頃は、遽えたる夏草、道を擁して暑氣漸く加はる。

城跡や朽井戸深し夏れ草  
刈麥の上は乳飲すと木蔭かお

飛越の障壁をなす、千山萬岳の間を怒弄し來れる神通の暴河も、茲に至ると河勢頓に拓け、汨々たる順流となりて、遙に翠野綠圃の間に隠され行く様の、何處となく懐しく思はるるも、蓋し之を以て平野の見納めと思へばなり、笹津橋の景は、何時見ても悪く思はれず、試みに橋頭に立ちて、下流を睨せば涼風爽颯として征衣を吹き、快甚し、

吹き上ぐる川風涼し夏の山

片掛村に出づる所、殆んど一里は長坂、望むべくもて容易は達すべからず、坂頭眺望甚だ佳、脚下千尋は斷峽に、羊腸たる千丈は白龍の蛟の如く音を出て走り、遙に神通の谷を踰へて、北海の模糊たるを見る、

牛鳴して晝寢覺めけり時茶屋  
炎天に父の馬引姉妹かお

進むに従つて、溪漸く深く、山愈々高き、三時飛越の國境に達す、只見る二條の清流茲に合し、合する處斷崖刀削の如く、高く雲を衝きて低き水を嚙と仰げば呀々たる巨岩道は臨んで、枯木僅に之を支へ、飛橋之に架して景致真奇絶、西より來るは、宮川として、東より來ると高原川なり、高山に至るの道も亦之に沿ふて二條に分かる、一は古河を経て高山に入るもの、東なるは船津を経てする者あり、一行即ち后者を探る、飛驒に入るは從て景色愈々幽妙、吹城處々に彩筆を弄して寫生するもの屢々、時ハ一人の吳座を着け、壯漢の早くも一行に追付たまを看る、之れ誰かあらふ淺田氏なりけり、氏亦今回飄然飛驒越を企て、昨夜道に迷ふて將に露營の悲境に遇はんず折しも、幸に一軒の茅屋は、日來の疲魂を休めんとすれば、何事ぞ満室悉く是れ蚤、手より、足より、攻襲する様凄まじ

く、則ち暗中床上は端坐して、之を拂ふと雖も、如何せん數萬の蚤軍の敵し難く、遂に斯る憐れの様になりぬと、示せる肘を觀れり赤点班々全肘を埋充、一見我等をして震愕おしむ、

旅僧乃蚤とり逃す祠かな

君是より更々芙蓉峯より上り、神州正氣の鍾る所と窮究て、歸省する積りなりと、壯なりと謂ふべし、四時過ぐる頃、茂住鑛山を過ぐ、烟突天を摩せて高屢瓦を並ぶと雖も、一行の鹿間の銀山は、野心あれは只顧措の間は過ぐ、川の轟々たる水の滾々たるを、既し我が問ふ所にあらず、今ハ只飢と疲れの我を襲ふあるのみ、山亦山を廻り、溪亦溪を踰えて、呼ぶ電柱の數も五百幾十となりて、始て遙の向ふの山陰は、鹿間鑛山の烟突を認めたる時ハ一同思はず絶呼しぬ、薄暮船津町は着し、宿を求むれば何れも此風体の怪しき驚き者か、皆此疲れたる一行の泊を拒まれけるこそ無念あれ、漸くにして四段田旅宿に投ず、夜更け人靜まるに從ふて、淫歌管絃の聲雜然四隣より到り、眠遂に成らず、僅く日記を誌して其鬱を散す、我先年此地に泊て同トく爲に眠を妨げられ、今回亦斯の如し、何等の惡縁ぞ此日行程十四里

七月六日(第二日) 成り難きの征夢何時か成りて、醒むれば日既に三竿、即ち荷物を殘して鹿間銀山に向ふ、鹿間鑛山亦神岡鑛山とも謂ふ、船津を距る僅か八町許の處に事務所沈澱池分拆場等位し、中部は撰鑛場製鍊場あり、更に進む二十町許にして、初て坑口に達し得べし、其間電話以て信を通じ、電燈以て明を送り、分業の整然たる、規畫は大なる、多く見ざる處、然るも積々赤烟砂熱の裏に、作業を粉砕室に慘狀にと、吾輩轉々悚然たゞざるを得ず、正午旅宿に歸り、匆々喫飯高山に向ふ、道烟塵を飛ばして、炎風背に迫り、滿汗淋漓、氣息淹々、

葉牡丹を水車の撫でる山峽かな

山田に至りて舊道を探る、満山の翠緑は、老鶯の聲よ冷まくなむ、蔚然たる夏木は、喧嘩れ爲に熟し暫くはまて道漸勾配を増し、進むに従つて急となる、脚力盡きんとするも景の更に可なる者無く、渴して毛呑むに水あり、峠半ばにして漸く清水の混々巖より湧き落つるを得たり、

旅人の捨句など多き清水あり

苔を剝て、淨清水と題せり。

峠盡くる處、廣漠たる高原に荒蕪に歸するを觀る。蓋し冬期雪多きが爲に開拓其功果を收せざる者乎、左ふ白雪を戴ける肩ヶ岳の率然たるを眺め、前ふ乗鞍の雲に駕するを仰し、俯して山國の荒景を憐む、降る一里半にして、亦一嶺あり、坂路の峻峻前者を勝る、然れば互に青煙を吐きつゝ、辛ふじて上下二里の此峠を降れば、身体肢足踰々然として恰も病後の瘦客れ如し、一同困頓只茫焉として進む、六時に漸く新道に合す、此處宮川急な屈折して峽溪を作り、奇石怪石磊々として流を遮り、獅虎の如き者、蛙蛭の如し者、蟻臥する者、倚立する者、塞して潭を作り、懸て瀑を作る、奇景妙觀、七時半頃、東山道の小京華なる高山の旅舎に入りぬ、此日半日行程七里半、

七月七日(第三日) 半夜夢を破らし涼風なぐぬ、雨の響ありけり、星光燦然たゞ去昨夜の空も、今や凝雲低く位山を蔽ふて、凄寥の氣豆ほどの天地に滿つを觀ては、遊子の心腸焉が亂れざらんや、則ち出て、吳塵を購へ、之を身を包んで岐阜路に向へ、勇ましけれ、孤鞍雨を衝て茅茨を出づると雖も、蓑を借らん古武將の雅懷もあつたれ、勿論花を捧ぐる乙女の風流もあ、只到る處、水小車の悠々たる多きお驚き、道路の泥濘たるを歎つのみ、進む里許にして宮村に達す、茲に國幣小社水無瀬の神社あり、高照光姫、及、大神命の二神とを奉祀すると云ふ、堂宇宏潤、境幽邃、自ら敬畏の心を起さしむ、宮村を過むれば、神道益田兩河分水嶺たる岡峠あり、霽雨急おして氣候稍々寒冷するに背汗漓々として、流るゝが如し、岡峠を踰る處は、久九野村にして脚下已に益田川の南走するを見る、之より、道は全く益田川に沿ふて漸降す、岩の配置、河の屈曲、神通の溪は勝るあるも劣る事なし、殊に飛橋巉崖を亘る處、遙に對岸に半腹に雨に惱める小家の點在するの佳趣は、到底神通れ溪に於て觀能はざる處あり、

五月雨れ木蘇路を落降る野武士哉

亦處々に削れるが如き岩お何年何月何日何某茲に轉落して没命す等の字を刻しざるを觀、一行恐ろしき稱名手向々つゝ、過ぎし處も多かざり、五時飛驒深山の一名村なる小坂村に着しぬ、旅宿室狹陋にして蚤多く、加ふるに待遇其宜きを失ふ、終夜喃喃の聲絶へず、此日行程十里、

破れ鍋を清水お冷す山家哉

七月八日(第四日) 大雨覆すが如く、簷を降る雨滴瀑の如し、郷國の河水は定めし汎濫し居るからんと思へば、心も心あらず、九時大雨を犯して發す、村の南端、小坂川東より益田川に合す、合する處一飛橋空架し、其景其趣昨來稀に觀る處、所謂朝六橋として古歌にも

こと傳ての人の心の危さにふみだにも見ず朝六の橋

として有名ある者なり、然るも未だ古人の謂ふが如くに筆を極めて賞揚すべき程の絶景にもあらず、益田川岸に出ずれば、果然濁流澎湃として天を參し、奔激怒衝、打はてり十丈の白蛇を躍らし、嘴んでは百雷の轟然たるに似たり、

小坂村より御岳に登山すれば僅に五里の捷路なるも如何せん、道峻峻、崖鬼を窮め、猿体鹿脚の者にあつざるよりは到底登攀し得ざるのみならず、今や霽雨日を連ぬる頃なれば、望を得べくもあらず、されば某が折角の動議も忽ち消されぬ、萩原村に至りし頃、雨霽れ道も固まり、陰鬱れ心漸く散す、萩原村には益田郡役所あり、飛驒山中に名驛あり、中呂村を出て、路頭石標あり曰く「禪宗禪昌寺」と、漾々たる薰波を漲らすの青田を前を控へ、巖々千年の老樹を貯ふるの高山を後に負へ、庭幽邃静閑、優に妙遠なる哲理を悟入するに足る、

萍や六百年の龜が浮ぶ

漱水にポーフラ湧くや破寺の庭

既にして下呂村と云ふに着す、時恰も正午、即ち或る旅館に晝餐を乞へば、此日は恰も農休みありとて、特別に酢を饗せられたり、飢腹の際、味殊に美なるを覺ゆ、下呂村も亦深山の村として名邑あり、街衢稍々整頓し、電信局の設けさへあり、此邊稍々高原の風をさし、満月の島田悉く古雅巨幹の桑樹のみ、亦以て其養蠶の盛なるを推知するに足らんか、且亦氣候乃寒冷あるが爲か昨今漸く田植れ最中と見え、谷間々々に野良歌れ節も面白く、嘶く駒の音に和し來るあり、宛然初夏の景あり、

溪向ふる駒嘶く雨の田植哉

下呂以南河勢愈々奇絶、自然の妙を窮む、之より上呂に至る七里の溪と、古より中山七里とて、噴々

たる者あり、巍々たる巖崖相迫る處、大岩磊砢之を擁去、水勢更に一頓、懸て百尺の巨瀑とあり、散つては萬朶の雪萃とあり、而りも老松蔚然嗟哦として之に配合し、白瀧細瀑、一鷗怒注ける處、時に書趣をあせる人馬の來往するを見る、變化の奇ある能く照應頓挫の難を盡くし、波瀾關鍵は妙を窮む、眞小蘇歐か活文長卷を翻すは想あり、吐月峯、孝池水、浦白橋、孤松岩、歸樵徑等之を合せて、中山瀨戸の五景と稱し、古來騷人韻士の昂を引く者少あからずと、

雨過ぎて月吐く峯や夏木立  
蓋之山河斷峽の景は總て規模細緻に過ぎて豪宏の氣を欠く憾を免れずと雖も、中山瀨戸の景色の如きは天下又多く觀能はざる絶景あらんか、

釣り橋を 鮎釣歸る夕日哉

一行の無風流兒も、此住景に惚如として酔へるか如く、文も何もあらばよそ、然るども、何分長き間の景遂に厭さざる者、眺も眼に映せず、只例に由つて、足の疲れて腹の空なる感、切あるのを翠蔓朱蘆借に之を支ふる幾多の棧崖や、流は激衝する幾十の山嘴を踏み繞り廻り盡すと雖も、一嘴盡して他嘴之に代はると二里として一軒の小茶屋を得、三里にして一寒村を得る程の山路、行けどもく、更ま下原に着せず、只益田川の轟々として脚下の松籟と和し日漸く光射を收めて、暮色蒼然たるあるのみ、八時頃漸く所謂下原町に着きぬ、此日行程十二里、  
宿は加藤とて當地第一等の者なりとてか、主人白髯蓬々胸垂れ、年齢既に耳順に近きも、快談能く壯者を凌ぎ、東西四方を談して毫も餘蘊なく、優よ一個の村夫子あり、夜話漸く佳境に入るに及んで、夫子益々得意、徐ろに蓬髯を撫て下して曰く、我地方は卿等の觀ふる、如く、滿眸凡て是山岳耕すに平地なを漁するに順流かし、さきども山林培養の一事に至つては、袖手傍觀して、巨額の收入を得べく、勞せずして權兵衛も八兵衛も優よ一家を糊するに足る、空氣の清淨なる貨殖の利ある。恐らくは日本國中亦飛驒に及ぶ者ありらん、と、謂ふに至つて、氣焔萬丈且は謂ぬ老夫此年に至るも未嘗て蚊帳を鉤したる事ありとて頗る得意ありとも、夜半蚊になぶられて疲れたる夢も容易に纏らざりし時おと、一行の面々何れも夫子が食言をこがした、下原は實に飛驒と美濃と相接す

る過境なれば、言語風俗の幾分か美濃化し居るを覺ぬ、

關守が 檜にて 除けし 毛虫哉

七月九日(第五日)晴進む半里ならずして、河あり西より來る、河を超れば町あり、街衢整然、高山以來初めて觀る處之れ美濃金山町なりとの尤たる掲標にて知られけり、連日沿へ來れる益田川にも茲に別れて西す、然も道は依然山亦山の間を織へ、峠あり坂ある舊の如きも、深水は觀るべきなく、奇岩の賞すべきなく、加之炎熱熾くが如く、日來の疲勞厭心一時に溢れ出でるを覺ぬ、

旅僧の 晝寝す 蔭や 風薫る

上有知町に達する迄、大凡八里半の間、統て平々たる凡山の、道に一人あり恭しく禮して問ふて曰く検査は甘く濟みしや、と、生等其何の意たるやを知らず單よ、然と安心せよ等と無責任に答へて去る既に亦一人あり今日之酒の調べよ上から來りしと謂ぬ風説が金山町の方如何か御存じあるや、と、初めて知る嚮きの問者は生等を收税吏と間違たるを、而も此收税吏が、上有知町の旅宿にて、更お兵卒と間違へられしに至ては、下落も亦甚しからずや、然れども此處等が旅行の眞味なるん、されば生等固より兵卒と見做されしを恥ともせざれば亦憤念も萌さず、然れども是が爲に萬事の待遇惡しきに至りては、馬を鳴りして激怒するを得んや、楯水と怒れり、吹城を立て、轉宿の動議を忽ちにして可決せられ兩坊は既に他宿探索に赴てあらず、於是宿婦狼狽直ちおベストルームに轉せぬたるの心地よき事ともなりき、即ち少々の茶代を遺して彼の荒膽を挫けは、今迄冷遇されし一行も、今は懇待厚遇、呼金の魔力も恐ろまき者なる哉、

上有知町の長良川の上流に建てられたる一名邑にして、戸數一千郡役所あり警察署あり、街衢の清頓なる巨厦の軒を並ぶる殆んど高山と伯仲の間にあらん、

七月十日(第六日)晴茲より岐阜迄、毎日船便ありと聞きしが故に、長良河畔に至る、乘客各々に其住所姓名を記する既に不審とする處、况んや箱の如き隙間に牡丹餅の如くに填坐せしめられて三時間の長死も待たせられたるに於てはや、されば待遠くや暑へや、ちりて悉く小言に口酸つばちちよる者のみ、中おは切符を戻して陸路を取らんか等と意氣込む技手連も見受りたり、



夕立や易者逃げ込む橋下

櫓の音も穩に解纜せしと漸く十時而くも連日大雨の餘河水漲溢し、奔騰快馳、箭の如き、奇岩伏する處、巨浪吹ゆる處、舟子巧に之を避け、危懼の時、猗々の際、手に汗を握る殺那も、右に控へ、左に取り、忽ちにして、荒野豊田の間を過ぎ、忽ちにして崖關水を扼するの峽溪を過ぎ、山行き堤走り、壯快得て徐すべからず、船客凡て十有一人、技手あり田紳あり、郡書記あり、亦農夫あり、從て乗合話も千種萬態、既よして金華山も觀へ比良伊吹等も遙に蒼靄幽暝の裏に隱見するに至る、四顧指點は間、八里は長程を僅か二時間おして無事日來夢想せる岐阜市に着き、小熊の八仙庵お入りぬ、連日高山峻嶺と急流峽溪に慣れし一行が初笑て茫々たる濃尾の廣野を眺めて、天下の繁都に入りし時に、如何に愉快ありしよ、

一浴洒然塵垢を洗へ去れ、心神爽然、況んや渡邊八仙齊令兄が勞を慰せんとして、水滸亭に珍肴佳饗を饗せられしに於てをや、酒重なるに従つて、談話益々興入り、連日山間の失敗談や、得意談の早や時を得顔お語り出さる、う面白けれ、仰て金華山頭を望め、弦月斜に淡光を送り、清淨の貌は笑て生等が健脚を慰するが如く、俯して街頭を睨せば清流一瀉吹烟雲の如く熙々焉として遠來の征客に謝する者不似たり、謀らざりた今宵此月を觀て、此地は此宴に預らんと、其厚意親志吾輩も何を以て之に報ゆべき

七月十一日（岐阜滞在）馱起客窓と出で、久保田兄を訪ふ、邸大佛の後にあり閑雅清楚風通ず殊によし

水打ちし庭木は岐阜提灯を待るしよる

久し振らば棋局は對する者トランプを弄する者、各々其好む所に從ふ、いやがて午餐を饗せられ酒は溜つて濛の如く、肉は積んで城の如し、吹城咄急追、頻りにビール城を襲へ、無殘や却て擒せられ、醉顏朱を蹴ぎて倒れし様は羅生門に詰光寄せ、綱の兜に啖へ付き、鬼の首も斯くやあらんと思はしめたり、醉も乗せて一同不知不識の間に、華胥の境も遊ぶ、午后又八仙齊令兄に誘はれて、長良河畔に十八樓お涼を納る、ソモ此十八樓と、嘗て芭蕉翁が茲に居を占めし時、其佳景お感して命

せし名なりとか

此あたり目に見ゆる者皆涼し

芭蕉

ちふ翁が句は實に此處にて成れる者なり、されば獨り俳人墨士のみならず、涼を長良の清流に納るゝの士は、多く皆此樓を來ると謂ふ、暫くして清流に櫓して出づ、未だ月痕一耀銀光萬碎するの妙趣は之れなしと雖も、涼風面を掃ふて塵汗頓消ゆるは快味と則ち之あり、

夏川や瘦せたる男小船押す

掉して逝る者少許、船を金華山の麓に留め、或は綸を垂れ、或は水に浴ぶ、忽ちして百里蕩遊の身たるを忘る、既に夕陽伊吹は隠れて、半月一輪金華山頭懸り、白露江は横るなしと雖も、月涼に風清に水光天に接するの妙觀あり、焉んぞ東坡赤壁の遊を想起せざらんや、况や金華山は之れ織田氏が嘗て旗幟を震へたるの城趾、赤壁の古戰場あると殆んど其趣を一にするに於てをや、若夫日全く暮れて數百の灯影水に從ふて流れ、萬籟寂として電光時を閃焉たるの際、悲絶の聲を以て、織田の亡靈さる蝦蟇の鳴咽愁訴するを聞きては、焉んぞ千感萬慨の狭胸に溢るゝなかつらんや、感愴少時舷頭に立つて長嘯すれば江山憂として反響し來る、偶々驟雨沛然として到り、幾多の遊船匆違として逃ぐ、此夜明早朝の鵜飼見んとて一同十八樓に眠る、

七月十二日（岐阜滞在）圓うらぬ夢も鵜飼見ん爲め、噪ぐ人々に由て破られぬ、時尙午前の一時半、殘月曠を低く西山に落ちて、兩岸の灯影細く水に映り、長良の夜景、亦一段の趣あり、遙に篝火燭々天を焦す者は即ち鵜舟ありけり、舟を下流に浮べて待つもの少時にして鵜舟の列は長良橋下に來りぬ、只見る七隻の扁舟各々篝火を船首に掲げ、一人は鵜匠此下より立ちて鵜を御し、（鵜の數都て十二）三羽毎に細條を以て絆ぐ、他の一人は舟を舵を操る、叱々々たる鵜の叫ぶ聲あり、響々、響々、たるは舷を打つ音なり、篝火燭々水に映り、燈燼切々雨降する處、縦横突進、浮ぶあり、沈むあり、仰て之即ち之を呑み、潜んで之則ち之を捕ふ、而して鮎の己に喉を充ちたる者之之を揚げて吐あしむ、而くも毫も恨色なく再び水の中へ投じて忠勤を勵む、其鮎を捕るの敏捷なる、之を吐かむるの巧妙なる、流石に長良川特有の名物ありけり、終れば順次鵜を舷に立たしめて首繩



を解き雑魚を食ましむ、而るも解くに順序あり食ます先後あり、整然亂る、なく、亂るれば鶴同士の不和甚ま、斯の如くはして一時間一羽は獲る處百三三十尾より二百尾に至り、一鶴舟の獲る所千尾以上ると謂ふ、古は十二人の鶴匠ありしも、今僅に七人となりしと謂ふ、蓋し鶴舟は全月のフアンクシオンなるが故に、且も由て其々漁場と異に表、満月の夜は業を休むと謂ふ、既に去て幾多の遊船も電光の如く消去去り今迄喋々焉さりし長良の川も、今は只濠々たる水の流を觀るのみ、

歸り來れば午前五時、即ち鯨眠を貪る、此日揖水事ゆり先發郷に歸る、七月十三日(第九日)快晴岐阜客舎の夢も歡笑の間破れて再び身の行旅の絆を解さぬ、八仙齋令兄殊に新調の甲掛を饒げたる、好遇懇待知らず何を以て答へん、

梅雨野來て甲掛送る別れかな

清水入れを瓢を脚行に饒げつ

十時四十分の汽車にて久保田兄と共に大垣に向ふ、

町中お元たる城や青嵐

大垣に着すれば揖水既に出て迎ふに會ふ、則ち名物の鰻に腹を固免、特に一隻の扁舟を備へて揖水川を下る、指點願所の間處々水害の慘痕を留むるを見る、午後三時根古地の揖水が庵に亦も居候する身と相成りぬ

堀川の 水門 高し 夏の月

七月十四日(第九日)根古地より養老まで僅に二里と聞けば大氣を幸ひ相共お養老の瀑に遊ぶ、

稲田長堤の間を過ぎて、十時養老公園に着る菊水樓を遊ぶ、

水車の音静かなり夏木立

樓、山腹を拓けて建てられ、眺望絶佳、近く下池は碧波を麓に眺め、遠く金華山の翠黛を望み、濃尾十里の青野竭くる處、南お煙波漂渺たる伊勢海を望み、北お雪白眩々たる飛越の諸山を睨し、殆んど一幅の活畫を看るの想ゆり、樓側菊水神社あり、社庭清水湧く寒冽清透久しく手とべうらぶ、桃

青句あり

結ぶよりまづ齒にひやく清水哉  
所謂菊水として、有名なる者、即ち之れなり、

桃 青

更に進む者數十武、側に賣茶亭あり、噴水迸る處、二三れ雅亭之を繞り、涼味颯然、幽雅想ふべし、

更に谷に沿ふて上る者數丁、岩塊磊々たる處、老樹蒼々たる裏、仰て瀑聲の響々たるを聞く、

若楓の木の間や大瀧小瀧落つ

只見る一條の素練翠緑を縫ふて奔下し、涼風颯然征衣を吹て到り、浴びずして既に身の冷凍せるを覺ゆ、瀑の側に浴衣を貸すもれあり、余等則ち之を借りて怒奔激下する瀧に飛び込み、日來の汗垢を去る、冷然洒然、清爽得て謂ふべからず、

身に餘る浴衣の多き湯宿哉

浴衣着て孝子が墓訪ふ庄屋のか

養老公園に、到る處、櫻樹千本、楓紅萬株、春の淡雲濃花の美觀を沿へ、秋は紅風千里れ佳趣を致し、夏は瀑に涼を納るべく、冬は山お雪を賞すべく四時の觀備ありて加ふるに眺望の清絶を以てす蓋し、天下の良公園あり、六時根古地お歸寓す、今宵恰も満月に屬し、一天青壁拭ふが如く、玲瓏玉の如し、則ち、庭利臺を設けて、涼を納る、放歌高吟、尺八を奏して進軍の譜を歌ひ、板を敲て軍營の詩を吟ず、眞は遊子二世の快事なりき、

七月十五日風雨を犯して二里許の沼地野徑を通じ、遙に揖水が親戚某家の庭を觀る

日傘をて釣りする船や青嵐

全庭悉く石を以て配置せられ、築山あり小池あり、鯉魚下り浮び、瀑上に懸る、以て賞すべし、以て浴をべし即ち浴す、爽涼甚し、四時頃歸宅す、

七月十六日(第十二日)、雨、十時根古地を發し、昨の如く舟を舥して揖斐川を降る、密雲四山を閉ざして、翠滴さん許り、廣野短堤雨に惱むれ景、亦一顧の價あり、降ること四里にして、岐蘇本流に

合す、合せる老松亭々として列なり、大流を缺んで長堤に瀕す。

岐蘇見ゆる千本松や風薫る。

打合を帆走る船や青嵐

暫く去て關西鐵道の鐵橋を觀る雄觀宏壯驚くに堪へた。

鐵橋と瀛車掠めけり青嵐

鐵橋を踰て遙に青松碧砂の濱、白帆素檣の林立せるを觀、更ニ伊勢海の浩渺として、皓波悠に岸を打掃と觀て之、焉々鼻隆三千丈に達する香かふんや、呼昨は北海も足洗へし身も飛越濃の千山萬水を踏涉し、盡し今宵早や太平洋に杖を洗ぬ身とせよぬ、雲水の變、順禮が常ありとは云へ、三寸の草靴も一里の本州を股にかけし、事うも快心の至ならずや、顧みて飛越れ邊を臨先は雲山漠々指して太平洋を望めば波濤々々

午后四時勢州桑名に達し、直ちに鐵路津本向ぬ、短艇長驛迎へ來り、送り去り、或は萬里の浩景を望み、或は崎嶇る巖崖を縫へ、墜道往き鐵橋來りて、漸く七時半頃、津市に着し東町若六旅館に投ず、夜田邊輝雄君來訪せし快談夜の更くるを忘る。

七月十七日(第十三日)雨八時人車を驅りて、阿漕停車場に到る、今回四旬の行旅お於て、人力車なる者に乗し、實お是が初先の終まりたり、暫くして鐵笛鳴り、瀛車來りて、一行は既に列車中にあり、時に同車中一人大校拾八圓を掠められて、顔土の如く、只茫然たる處、驛長來り查公馳せて、我一行を睨み付くるが如く具へし時に之、相顧みて苦笑せり、而かも幸も次驛まで直し、該搦摸の捕られたる之番に被掠者乃幸のみならず、松坂を横に眺め相鹿田原も夢を過ぎて、十時半宮川町に着す、宮川は參宮鐵道現今の終局点たるも、宮川の鐵橋工事も殆ど峻工し居れば、山田迄全通する近きにあふんか、宮川より山田迄一里と稱す、而も連日雨後の道泥濘甚ましく、山田町に入ると、益々甚し、今も尚ほ何々太夫旅館等と標掲する、大厦宏樓の擔を連ぬるを觀る、宇仁館ホテルとかかひて晝飯を喫し、直ち外宮に詣つ、境内一步を入ると既ニ幽邃高雅人衆を離れたるを覺ゆ幾千の老杉の歸然として玄蔭耽々たる處、神馬の遠く嘶くを聞き、台朴たる大鳥居の邊、衛士が警畢の音の幽

響さ來たるを耳にして、誰り神聖の心を起さざらんや、若夫、太古風の茅屋、之れ太廊なるを觀、白幔素柵の中之れ國寶の藏せざる、處あるを想へば、吾輩草莽の微臣焉んぞ拜跪頓首寶祚の萬々たるを祈らざらんや、

萍や三千年れ龜が浮く

此大雨の日よ於て、而かも農家の忙季お於て、尙參拜者れ堪ゆるさきを觀ては山田の繁華なる所以、宏館櫛比するれ理をも悟り得べけん、

外宮を出て、再び蕭々たる霖雨の下鼠の如くなりて内宮お向ふ、内宮迄一里半、其間悉く町續きなり、街頭より遙々蔚然たる巨樹の山を包むを觀る、之れ則ち内宮お向ふ、町盡くる處川あり欄干擬寶珠の橋之に架す、之を則ちりの五十鈴川あり、橋を渡れば、洒灑廣潔なる庭園あり、分捕の丹珊瑚大砲茲も備へらる、園盡死て亦橋あり、鳥居あり、衛士の嚴として見張りするを觀る、

大廟や神馬嘶く木下闇

しんかんと拍手遠し夏木立

五月雨や禰宜が擔端も鶏れ群

仰げば幾千の古杉菱蔚として、神代の楯となり、幽閑靜深神馬嘶く處、只拍手れ切々と響くあるのみ、昔は某出師の表を讀んで涙を流さるる人あふんと謂へり、今も吾内宮に詣で畏敬の志を起し、神聖の感に打さざる者、人にあらずと謂はん、況んや神聖ある五十鈴の流に、手を洗へ、口を漱ぎ、以て大廟の御前も參拜せし時は、四人の順禮、等しく無言切頭千古の感に打さき、雨は益々急にして、幽邃益々幽邃、歸る路は早や勇進するの原氣も失せぬ、折節雨に艱める辻馬車ハ、一行が乗車を勸めて止まず、斯る時の汚穢なる辻馬車も、時に取ての捨物と、早速飛び乗りて、二見に向ふ、或は御者れ酷待も切齒し苦めゆる、馬に同情の涙を濺ぎ、時々は將も轉覆せんとする坂道に眞如の夢を破り、五時二見に着て松坂屋に投ず、直ち二見浦に散歩す、海濱一帯砂州、長汀曲浦遠く勢州沿岸に連かり、波小おして眺め咲大、萬頭の青波盡くる處、尾州の山、摩州の岬、雲烟模糊の間も畫々るが如きと觀る、

磯道に小蟹れ多し五月雨  
青嵐夕日に落つる敵の船

風光眞に賞すべく、海水浴場として、更に、恰好の地からん、辱をも、嚮死には、英照皇太后陛下、親しく駕を枉げさせ玉へ、后、皇太子殿下、亦遊觀し玉ふ、斯の如きの事歴ある佳地も、今や漸く紅樓濱に接して、酒旗潮風に翻り、粉黛香を漂はして、糸竹の漣波と應和するの趨勢に傾死つゝある事、社會自然の理とは謂へ、抑亦惜むべきの至りならずや、一山海も迫る處、陸を離るゝ三四十武に處ふ、大小兩岩潮流に洗はるゝを觀る、注連繩を以て之を結ぶ、之れ即ち彼の日の出を以て有名なる岩戸あり、何等の奇趣もなく、何等の韻致もなきに其顯るゝ、彼が如死者は何ぞ、歴史上の素因之を致すか、ろも亦二見浦の風光之を致すか、

七月十八日(第十四日)晴七時出發、鳥羽を指して急ぐ、昨日乗りし御者の今日と早や、知已然として乗車を促すも面しけれ、海岸岩角を拓たえ道に沿ふて進む、國境と何つ過ぎたるや知らねど、身の既志摩國に入れり、一山を踰て一灣あり、一灣渡れば亦嘴岬、灣小浦の出入甚しく恰も、能登内灣の様にも似たり、斯の間を進む者、二里半にして、鳥羽港に着し、直ちに中山兄の來訪に接す即ち導りて鳥羽鐵工場を觀、后、日和山に登る、灣内大觀、婆娑とえて襟帶の下に集まり、景色眞に絶妙、灣々を扼する幾百の小島と足下に撒布しゝるが如く、遠く三駿の諸山を海波沓靄の中に望み、海を衝く紀州の岬嘴や、陸を嚙む摩州の入江、皆是れ畫中乃者、若夫鐵笛空に嘯へて反響未だ堪へざるの時、一痕の涼月高く灣頭懸り、甲板上裏吟咏の聲遠く之に應ずるの清趣に至つては、吾輩只筆を投じて嗟々の聲を貰さんれと、天氣晴朗の日は能く太平洋の浩景を俯視して、富士乃扇影の仰觀とべく、越の立山加州の白山、皆望み得べしと、惜哉、此日天候快晴ならずして、烟霧之れ包み、千里烟瘴の三遊子をして、空しく双眼鏡を恨むる愚を演せしむ、即ち悵然として降る、

灣の果てに夕月の船や青嵐

夜十時今夜出帆の第五共立丸に乗る、中山兄と殊に鳥羽名産を贈る、厚意謝するお辭あし、涼風や入江を縫ふ灯のまばらなる

名だゝる紀州乃荒海かれは、少々あどとと懸せん者と、折角中等をはづみし甲斐もなや、案外中等客の多くして漸く室れ一隅に蟠まりしとさ、魂魄將は消えんばかり、況んや出帆を待た間の切なき、眠らんことをも、喧噪上下に響き、漸く鬱して、思は益々纏綿、幼想徒ら疲神を衝て、轉瞬征夫の心を悲しませすのみ、斯る間に時辰機は既に十二點を告げ、一時も過ぎ、二時も去りたれど、未だ出帆のベルは、聞えず、アクビの聲怨嗟の音は、満室の隅の隅に起りぬ、折節隣に起りしボーイ同士の争論は、敢かくも之に耳を傾けしめたりき、蓋し當番交替に關する論ありなり、一人に稍々老巧にして辯亦巧ふ、他の一人、新參にまて亦訥辯あり、然れども理は是にあつて彼わあらざるが如し、而も新參よして弱少ある憾には、遂に組み伏せられ、説き從へられ、無量萬斛の涙を吞んで、睡き眼をこすりつゝ、服役したるが如死は、豈に小説れ好資料もあらずや、彼には兄弟もあらず、兩親あらず、而かも年小れ身を以て、日夜激浪怒濤に間お苦役せられ、暫く平和ある穩りある夢を見んとすれば、忽ち古參の猾兒は壓倒覺眠せらる、彼が境遇も亦憐むべからずや、既に雨さ急降り出で、甲板上裏入影を留めざる頃漸く解纜の聲聞えぬ、時實は午前の三時、吁有難や噓しやと思へしも、此瞬間のみあれしなれ、波を切る轄々の音、機關運轉の嘈々の聲も、何時しう之れ華胥の好材料、知らず夢の那邊を驅々繞るや、  
奇妙も曉告ぐる鶏の音に、覺まされし時は、海未だ暗き午前四時、船は今何の果にかある一上二下する動搖の、百里那落の底に捲き込み千里雲漢の高さに跳ぬ飛ぶすの心地し苦呻の聲も既に四方お起るを聞き、則ち走せて甲板上お出でんとすれり、無念や無念、我も亦船暈せる一人ありたり、蹣跚する足を踏としめ、悶惑せる胸を抑へつゝ、辛ふじて甲板上に這出でてし時、色も形も既に此世の我にてあらざりた、噤々たる眼を披きて、四方を眺むれば、身は之れ大き岬頭、荒浪激潮に漂ふれ一船客、霏々れ雨と斜に甲板を打ちて、高波急に舷舳を洗ひ、日漸く甫あんとして、糝糊なる岬灣山嘴、怒濤急雨の間に隱見え、豪宏の氣、雄大の象、凄絶れ觀は、能くも我悶胸をまて八荒を包むれ慨あらしめたり、

荒磯や霧を劈く鱸舟

而も船量せる哀しさおは、長く甲板上に留まほて、壯吟高歌、以て海神の荒膽を殺がん勇もあく、匆々船室に歸臥しぬ、斯る時に於て朝飯を喫せよとの船主の注文、暴も亦甚しうらずや、箸を採りし者之卅船客中、僅に一人のみ、又以て船客一般船量の度を知るは足らんか、嘗て三冬れ曉、嚴霜烈氷を踏んで、鍛冶上げし鐵腕も、茲に至つては、神經もあく、骨もあき、枯木の如く、死せるが如し、想ふ夫れノルマントン沈没の當夜、風潮暗嶮なる、此荒磯に、風波お打され、船長に捨てられ、漂々なる破船れ上、助けなき救を絶叫せし當夜の荒景、懺狀、ハそも如何な事しぞ、吁同胞廿有五の亡靈今何處の邊に迷ぬらん、今や吾れ親しく其跡を漂へ、其境遇を追想す、焉ぞ歌々たる感慨の迸りて、同情の涙を濺ぐざるを得んや、尾鷲、木本も夢幻苦悶の間に過ぎ去り、日は漸々西へ傾死て、洋風頓に暮涼を送り、船客れ船量將お終局に達せんとする頃、石佛の如く、木偶乃如き、一行を乗せたる、第五共立丸は、無事にも亦勇しく、紀州三輪崎港お入りぬ、那智山に到るおは、勝浦に上陸するハ、最も便利なりとすとの事ありも、斯る船中には最早寸時も、滞留するハ勇なれを如何せん、既にして解艇來りて之を乗り移りたる時には、眞に地獄で佛も遇へし心地怒り、一同相慶みて漸々一命拾ふふ、と、曰ふ聲も、虫の音より細かりき、時實ハ七月十九日の午后六時、見渡たせは灣内の暮色蒼然として、密雲低く海角を垂れ、流たる一導の殺氣は天の一方に潜むが如く見ぬぬ、宿に着きて、漸く一杯の夕飯を喫たるを以ても、當時の苦悶の状態を知り得べし、

七月廿日 (第十六日) 鑿々鼓を打停が如き者ハ波聲にあらざるか、浙々家を揺かすが如死若之れ水音もあらざるか、夢中聲あり、聲中亦之れ夢、驚起海灣を脱せば、豈計らんや一陣の颶風、激濤岩に碎けて白龍天に參し、塵砂空を捲愈て大雨焉も加はり、昨夜林立せる帆檣も、那邊に風波を避けたる者か、隻影を留めず、只二三の波船岩陰に潜んで、惨影を留むるを見るのみ、

波を割く潮崎凄しく五月雨

外界の荒景斯の如くおして、而かも一行が内心の困憊、尙未だ癒せしと云ぬにあらざる、焉ぞ躊躇せざらんや、然れども觀る者あく、慰する者あき、此僻地に滞留せん事、是亦忍び得べきおあらず、由來身を誤るハ躊躇おあり、勇進なる哉、等、屁理屈の下お、各々吳座を求兜て、充分に身を固め、

諸人の留むるを聞かずして、發せしぞ勇ままた事おもなざり、傘を奪はれ、帽を掠たふる、者、數たび大雨急ありと雖も、傘を開くに由なく、心細き得て謂ぬべからず、而も此凄絶慘至の日と以て、天下れ雄觀たる那智に向はんとす、豈亦男子の至快なる者おあらずや、

此邊奇習あり、男と云はず、女と云はず、往くもの、來る者、皆椿の青葉を以て卷きたる煙草と燻ゆふすを見る、其様宛然、葉卷煙草を吸ぬに似たり、

勝浦を望みつ、那智川お沿ぬて、山中に入る、進む者、二里より那智村に達す、遙に葱籠たる蒼樹の裏、一点白の印するを觀る、

那智見ゆる麓の霧や船の窓

村端一大鳥居あり、鳥居より那智觀音迄十有八町と號す、此間悉く石階を以て導き、上るに従て、瀧聲の益々近く、益々壯大となるを觀る、左に折れ右に曲り、脚力將盡きんとするの時、漸く觀音堂に達す、眺望豁然として開け、最も瀧を觀るは適す、瀧高さ八拾六丈、前山壁巖削峻の間に懸と、密樹蒼々たる處、一條の素練雲を劈て奔下する様ハ、恰も銀河の九天より決するが如し、蒸々焉たる雲霧は、脚下千仞の底を掠めて急騰し、轟々たる瀧聲は熊野灘の荒潮と相應ず、偉觀壯絶、深妙の哲理、幽玄なる浩氣、此地お於て窮め能はずんハ何の處にか得べき、宜かり文覺慕ぬて茲に行し、推古帝の遙々茲に親御し玉冠しや、抑那智觀音ハ西國卅三番札所れ第一お當る者おして、遠く推古天皇の御宇より、七堂伽藍の建立せられ、朝廷の尊崇淺からざりしと謂ふ彼の御詠歌に

ぬだらくや岸打波をこぞ熊野の岩に轟く瀧つ瀬の音

ハ茲を歌へる者あり、

かくて日も暮に近かれハ、嚮きにベストおと聞きたる、八百主なる宿を叩きしお、餘鬚麗はし死主人と見えたるが由で來り、余等が吳産笠の服装も驚きたる者か、首を傾くる少時に迄て、謂ふ家には只今病人あるあれハ、後宿は斷り申候、と妙な宿屋もある者かな、之より東奔西走、二々五々、半腹お築たる、良家とさへ見れば其由申込み、申込む毎に斷る、吁旅はせぬ者ぞ、吳産笠は着けぬ者ぞかし、然れども捨つる神あれば、又拾ふ神あり、遂お佐藤某なる半農半宿の家に那智山一夜



の夢を結びき、  
家瀧に面す仰て瀧を望むべく、俯して熊野灘を睨すべし、夫れ那智ハ天下の雄觀にして、熊野灘は天下の荒磯あり、双絶の觀を談笑坐語の間に調味す、何等ハ豪趣ヲ、若夫秋夜天漢晴きて、銀河寒く横はる處、巨瀑の殷々たるを聞け、巨燈の眩燈を睨し、耽々の心を放つて、喃喃するに至つては、其清趣如何ぞや、蓋し日本山水は景ハ南海に集まり、南海の絶致ハ紀州に鍾まり、紀州の景色は那智に集まると謂ふ可からんか、

## 雲を劈た霧に落ち込む那智ハ瀧

夜半霏々霖雨の聲、知らず如何ある清夢の吟懐に迷ふぞ

七月廿一日（第十七日）蕭々たる雨を蹴て、天下ハ嶮路にして、紀州の難關たる、大雲取、小雲取の連山を踰えて高野ハ向ふ、觀音堂ハ裏手ハ出づれば、路再び急坂となり、厭まで繁る那智官林の裏を、石階を拾ふて分け上る者十有餘町、嚮きハ高きと驚きし瀧も、今も脚下に遠響し全山寂として、只風雨の樹梢を渡る聲と、時に異禽ハ叫ぶ聲あるのみ、進む者小一里烈風一陣、雨を呼んで到る處、遙か山谷の彼方に耕耘せる麥畑や、吹烟の上るを見る、而かも道ハ益々山巔を傳ゆて登り行くれみ、急に飛び立つ鳥ハとと、鼓動を高きしむるの此深山に於て、脚下に斧聲の響くを聞け、眼前ハ軒の人家を見し時にと、如何に頼もしうりとも、之よりハ山路愈々崎嶇、猿猴狐狸にも覺束なき嶮道、蒙籠たる老古杉こそ幾千年星霜の名殘を留むる者ぞ、仰ても天漢の廣きを窮むる能はず、俯しても地球の廣大を竭かし能はず、楚々たる翠臺葛藤、途を擁し進み得べきもあらず、一上一下、或は矇々たる白霧を蹴て進み、潺々たる溪流を涉り、三里モ進みたりと、覺しハ頭坂路の勾配急ハ甚しくあるを見る、蓋し名立たる大雲取山（三千三百尺）にかゝりあり、雨は愈々急にして、白雲沛然脚下を掠れ、凡俗ながら今ハ雲上ハ仙人只默然として木偶漢の如く、進むを以ても一行ハ疲れしを知るに足らん、時に噉々たる異音を老の間ハ放つと猿猪の、寂寥凄涼一人の立て先鋒とする者なし、

## 分け入れハ無住寺荒れて蟬の鳴く

此時に方りて忽焉悲鳴を揚げて、三人ハ荒膽を挫しと吹城なりけ、そわ御參かれと、腰間の秋水ハ  
短銃を構へて、走せ寄れば、何事ヲ蟻にもあらず、狸にわらず、所謂山中の蛭に襲はれしかぞり、吁此事あるか、吾嘗て木曾山中蛭あつて人を苦しむると聞けしと雖も、料らんや、今日此山中に於て、親之に苦められんとは、更に第二の悲鳴と、しんうんたる深山々裏一行ハ鼓膜を破らん許りに響けり、之ハ楫水なまき、彼は鮮血淋漓たる脛を示して其無殘を訴ふ、之を觀て戰慄匆遑脚胖を解け、吾も亦三頭の蛭に襲はれて、血潮の花は足枝に迸り居ぬ、試みに地面を觀れば、木葉の裏や、岩石の間や、潜める幾十の蛭は、盛々屈伸運動を以て、攻撃し來れり、即ち逃げ上らんとするも、坂路急峻、意の如くあらず、空まぐ青燐を貫らすのみ、吾れ曾て立山ハ登りて八州の嶮路を嘗め盡し、五箇山ハ入して天下の艱道を踏み盡し、窃に以爲らく、其峻に於て、其峻に於て、天下の高山未だ恐るゝにあらず、と、何ぞ知らん、紀州の山奥に此嶮嶺艱路あらんとは、既ハして脚下に小川の帶白を流して、幾多翠山黛溪ハ間を縫ふを觀ると雖も、如何せん身は、是を三千尺以上の雲上人、羽翼もなければ、神通力もなく、眺むべくして近づくべからず、急ぎ降らんと思ふ足肢戰慄して定まらず、動もすれば昏倒せんとす、一嶺を繞り一山を降り、急坂峻路を迂降する者、三里にして漸く小口村に達す、僅かに漬物の菜にて食せし晝飯も、飢飽し我等ハ大牢乃美味を感す、大口川を船にて渡り、須禮路は再び小雲取の峻山にりりぬ、半腹の櫻茶屋迄里程大凡五拾町と稱す、而かも、嚮きに、那智山に苦しめられ、大雲取に困れたる后なまきは、疲勞殊に甚まぐ、背汗淋漓溼の如く、一步一止氣息淹々、小雲取の本嶺ハて、再び矇々たる白雲に包まれ、霏々たる煙雨に身を捲かる、大雲取小雲取の名ある、蓋し偶然ならざるなり、

斯くて六里にして一寒村を得、更ハ四里にして清水ハ達し、熊野川に沿ふて北し、七時漸く本宮に着す、此日行程十里、實ハ我が大ハ幾十回ハ行旅中、初れて遭遇しざるハ難路なりき、本宮より高野ハ詣る道二線あり、一ハ田邊和歌山を經てするもの、一ハ直ちに十津川を迂りて山嶮ハあらずなり、前者ハ里程五拾有餘里にして后者ハ僅かハ十八里なまき、よ、今日の如き憂々目に再び遇ふとも、此大迂曲ハ、到底前途を急ぐ、我行のな一能ハざる處、則ち十津川踰に決して寢ハ入る、七月廿二日 七時出發、十津川ハ沿路而上る、十津川と昨來の霖雨にて出水せしと見へ、濁流滔々、



糊の如く、血の如く、進む里許よして、一川あり、西より來り、瀧水奔騰汪然として十津川に注ぐ、而も渡るに橋なく、渉るに方と知らず、一行稍々逡巡の色あり、况や昨來之を涉りて、溺没せし者兩三名ありと謂ふお於てをや、然りと雖も、茲に逗留するは到底忍び能はざる處、於是、窈小以爲く、流域尤も廣き所は、最も水淺く、泡吼を漂はすは益々其淺さを示す者なり、即ち之に大石を投ずるに、戛然答あり、之れ屈強と衣を提げて、奔流走礫を排し、經營苦慮、漸く涉り了、於是、不肯豐泉事、宇治川なごぬ、不知川を先頭仕つて候、と名乗れば、今迄片唾を呑んで成敗如何かと注視し居り、三兒は、者共進先ぬ下知の下に、勇ましくも手綱を流れに取としこそ、又雄々しき事こそ、踏先ば崩れん斷崖や、涉らば足を切る急流を、進む者二里許にして、一本傍標と、計がずも地の既も紀州を踰えて大和吉野郡十津川村よるを示しけり、大和に入りてより、道稍々佳、岩角を削り、深溪を埋め、以て車馬を通ずべからずと雖も、以て人行小通ずべし、一條の細經半腹に綿々たる處、飛瀑淙々たる處に懸り、一山を繞る毎に流あり、流ある毎に瀧をあず、或は數段に分れて翠綠を縫へ、或は熊野川に奔注直下し、高は以て那智より次ぐべく、低さも以て養老を凌ぐべし、五丈十丈の瀑は、數廻るよ違わらず、河の景致も、瀧の清雅を配す、豈又天下の佳觀たる勿からんや、惜哉、地僻遠に去て訪ふ由なく、空しく此佳觀をして此山中に葬埋せしむ、只吾れに、山陽の才筆かきを歎つのみ、

平谷村にて釣橋を渡る結構甚く巧みあり

釣橋を危ぶみ渡る日傘哉

進む五里亦も橋なき溪流に出でぬ、吁我行そも何の因果ぞ、嚮より海に苦しめられ、昨こ山に苦まめられん、今日ハ河に苦しめられ、能くく不運者なりなり、之も無事に涉りて、三浦峠にかゝる、過日來れ風雨の爲先、處々山岳崩壊せるに會し、匍匐して進み、攀縁して登る、登るに従つて、山愈々高く、潺湲する溪流の聲も、一步一步遠ざかりゆき、嚮死に仰望せし山も、今は早や俯瞰する様とある、未だ鬱蒼たる老樹の昨の如きはなすと雖も、日已に暮に近かく蒼然溪岳を掠めて到り、冷風颯然吹て脚下より到る、吁我等今宵も誰が家客ぞ、愁然として歎聲を貰らす者幾たび、疲勞

殆ん迄昨に優る、七時頃漸く峠嶺の一軒屋に達しぬ、由來峠の一軒屋なる者ハ旅人の最も注意すべし者ぞ聞死しが故も、萬一を慮りてピストルを枕して寐に就きしころ面白けれ、七月廿三日（第十九日）疲れたる夢も颯然吹き來る涼風は由て、破ぶられぬ、只見る幾百乃山岳霧ま包まれて、僅かに巔を顯はす様恰も島に似たり、

絶頂の曉深し霧れ海

上る者は八町降る四十町おして、亦も神の川なる溪流に出でぬ、例れ如く暴流なきを橋もなく籠れ渡に類する者ゆれと時間の長短を要すと聞きしが故に案内者お導かれて渉る、之が支流を渉る者更又一村もなく家もなき、上下七里の峠を踰ゆる猶一つ、初めて人間咳嗽の音を接し、其作と處を觀、其住む處を觀てハ、何物の快う之に及ばん、北股村に出でし時は已お五時、空腹甚し、則ち或る家にお就いて飯ありやと問へば、粥なごは餘りの者ありと、此時今時誰か鴉の雌雄を擇ばん、常時なごは蹙眉して見もせざる玄米三分に水七分の粗粥も、如何に舌鼓を鳴らして啜りや、一杯一杯又一杯、更に一杯を傾々とすれば、鉢中既に鏘々音あり、相顧みて呵然大笑す、更に降る者五十町、亦上る廿町にして、午后六時各寺の清鐘遠く谿を渡りて暮靄を告ぐる頃連日夢想し杞憂せし高野山金剛峰寺に入りぬ

夕日射る木下闇や石塔朽つ  
卵塔乃下を逃げ行く清水哉

(つゞく)



温泉日誌

風柳庵主人

今夏、われ、郷に歸りてより、幾くもなくして、慈親の佳饗に飽くや、遊心こゝ、お動死來て、うらる禁ずる能はず。いで去らば、山に川に、涼味を探ね窺みて、心残ふぬほどの、さすらひせよと、われの企すでに成せ、われの思ひ侍ねにこゝ、おあせり。去せよ、事乃意に協はざるものありて、一頓して二挫し、わきほひに、吟笥草鞋に親むの機を失しぬ。

寐ねて一夜、覺めて一日。わきつねに、ふれを恨とし、わが夢是よりず、折々お、圓らかなることを得ざりき。

これに書室あり。床間かくるに南溟が達摩の幅を以てす。これ書卷を掩ぬて、これに對すれば、かれが、跣坐潛念、ひたすまふ、天上の靈火を捉へんと努むるの様、風塵の境を離れて、自ら颯爽たる仙韻を帯ぶるに似たり。友のこれを訪ふもの、或は評きて、脱俗の氣品を欠くといふ。或は夫れ然らんや。かれや猶ほ未だ、窮境未達して、徹悟の妙諦を得たるにはあふざるを、南溟が技巧また必ずしも、渾圓熟成の趣ありとあすべかざればあり。去れど、斯の如き、われの敢て問ふところにあらず。かれが像透して、直ちにわれが心事におまび、人みな捨てがてにすなる塵寰を離去りて、汚衣荒屋に甘んずるのかれが此地を想愈は、これおのずら、人間の儒に、あふざる如く、一道靈淑の氣、われが心字を壓へ來るを觀て、これや、これに對して、わが心のむす

不きを解たりたり。

去せよ、こゝ、わが心のおのずかふなる好みありあらで、まこと止むをえざるに出でたるうらむをめのすさびかりたり。これに、いばしの慰藉を求めざるのこゝ。これおの依然心に任せざる恨ありなり。

蟬の聲涼風をさうひて、青葉若葉の境。更に幽靜を増すのあふり、また、一流の清水を得るや、夏の旅路、いづばかり心ゆきものあらんと、われは只だ、書室の壁に、あななき山光水色を想ひ浮ぶるけみ。

夏も漸やく暮れなんととして、さまく、長風、一望の來り訪ふに會す。ふれ時、途を紫溟の門外狂げて、米山の涼風を貪んことを約し、聊宿志の一はしをだに満し得んと期たりたり。去れどわれ等が出で立たんと催すの時、長風はさはる所あり、長風事ゆるべるの日、それまた心に任せず。一日又一日、清遊の企圖つひに再たび折たて、わが恨いよく、長風をかりき。

光陽秋に入りて、われ漸やくにして、草庵を出づるの機を得ぬ。斯くてこそ、信濃なる山田温泉の虫の音、草の花に、十六の日子をかぞへて、わが恨始めて、消え盡くることを得たりき。去れど、今にして顧みれば、そるはかなく、うとましき思ひもするかな。七句は暑中休暇、日にたいて長からずとなさず。而も此間にわれの羸ち得たるころのもの何ぞ。わはれ、さうりたる所の十六日の日誌に、いあふずや。譬は、見ん影もなを枯れ残る野末の尾花よりあふずや。

さばれ、如何にせむや。長き幾日れど追懐れかたみは、只これのみ。只だこれのみ。われとた、あなを措きて他に何をや求むべき。去らば旅の行李の底深く、この日誌をぞ取り出で、いみじうと骨ごちたる文の、われにはさすがに、聯想乃肉も皮もあれど、人見れば如何よ。いみじうと

なしや。

七句の長き休暇も夢なれや。餘すところれ日數、今と心細きまでにて、荒海の船に揺るゝの日も、近く眉間を落ち來れるこれ頃を、父君の如何にやと催し給ふま、山田の温泉おま、いばし、腸を洗ふ

あと、いばしぬ。

わが友一望、既にわれに先だちて、かの地にあり。書を寄せて、境の頗る閑適なるを報じ、とくわれれ途に就かんことを催し來りたるに、山の容、人の音も、危ぶまれて、少しくためひたるわが心乃、今は中々に打ちいづる、に至りぬ。

廿四日、朝、涼車にて出て立侍。秋ともなきば、さすが、稲田はるく風のさびせりて、萩、女郎花などさ愈、折々の目よ入るに、門外一步の地を踏まざりまわれには、さもころと首肯して、手にせる扇も捨てなんと思ぬ。さばれ、涼車の窓の眺め、うこともあくて、途上徒らに句の感らざるをかふちゆくほど、こゝは、信越の國界も、側ある人の指呼せるを聞きて、

兩州の秋咲は分つ程かな  
など、推敲の間もなく、駿輪早くも豊野驛に留まりぬ。

停車場のほとり、早川屋と、書齋認めをとりて、一時半、腕車を驅せ出づれば、路は漸やく山又山へ入る。徒然なるまゝ、郷里の芳角が案案して、さてはうなだに、多少の名残をのくる間に、いかに折れ、目も閉ぢ勝はして、二重の間は何の風情もなし。と見れば、

蝶三羽免角を薄の野の失せぬ

さて、折ぐらぬ、さち慰まされたる景として取り出でばべきか。行くお従ひて、路いよ／＼さかし、車夫の喘ぎ／＼、折々に下車を請ふほど曳たかやみみする様、いとほしげなり。

車を下り側細道に結構折る

空車蜻蛉帳ほどまりもあへず

道わたの村々、折しも祭禮の旗立ちて、それに、鎮守諏訪大明神の七字、誰が筆よかなりけむ。ろこ／＼つぎへる人の、宮の境内を掃き清むるがあり。如何にこの夕待ちにけたらん村若者の興いとそぞる思ひやらる。

祭禮の稻の出来よき小村のさ

祭禮の旗よふかす村は秋

温泉近くあるほど、ゆくこの山の一角に残る日影、枯れなどとする蟬は聲にうらさひて、寒き身おしみるめぬ。

夕寒を我わび車夫の涼じがる

谷間お蜻蛉舞ひ亂る夕日かお

山一降めくやをわれぬ、温泉町の白壁を、とりわけ目につたをめて、程もあく車轅の旅舎田中屋は門に下されぬ。さて草囊は紐を解ゆるあへず、同宿なる一望の室を訪へば、友一人と恰かも夕餉の膳に酒置き酌める折なり。酔ふる君瓶は尊花を何とが見る

先づとて、くられたる盃をぬもせず、着きたりとばる心せはじき際の、こゝを郷地との寒さを言ひ較ぶるは、思ひをよ／＼に辭し歸りて、湯に夕の寒さを拂ひ去れば、膝に、心まゝ中にお廣くあり來ぬ。

湯のふか、お夕も朝も寒くわれ

廿五日、崖鬼たる山々三方を取り巻きて、屏風を立てまわし、らんが如き地の、珍づべき眺めとてなく、消閑の料にも二三冊持ち來れる雜書などあるへくも催さるに、一望等二三の土と、終日興を基盤の面にあされば、丁々れ音、勝ちたる人への凱歌の響あるべく、負けたるわれよと楚歌の聲をなすなど、しがすがま氣も進み出でつ。

暮に勝て我は蟬螂のさほひ有

温泉の秋閑かり暮に勝り得べき

暮に倦むを欄に蜻蛉をなつかしむ

廿六日、父君の呈議に賛して、けや一望等で、朝とく、上州ある草津温泉お向けん心がまへありしも、曉來霧深くこたさるは、山路の危険圖るべからざるを慮り、明朝を期して、けや、思ひ絶ちつ。つれづれに、例は黒白を争ひ興と。

霧は消えたる目先の山に鳥の聲

見るからに霧蜻蛉を生かいたす

あの夕、たまく、宿元より、一皿の鳥肉を見舞ひくれたるよ思ひ立ちて、一望等と小宴を張る彼一杯我一杯、壺中の春趣を掬みほくも、陶然たる醉心地に、秋やいつこも長嘯す。

おきむいて瓶の枯梗お酒氣を吐く

酔ひ臥をやきて面白さ虫は聲

廿七日、この日、たまく、一望の隣室のあきさるに、居をそゝに移す。室に對して高峰あり僅かよ一流の谿川を隔て、欄干を壓したれば、折々其名も知れぬ鳥のこゑに、静閑は趣を樂しむつ。

暮も飽きされば、一望別室よ、誰やふが詩の語字を探りて句を練る。庭には秋の小雨勝ちなり。

長 長き夜を眠損ねつ虫の聲 一 望

嘯 嘯けば霧動けけり華嚴瀧 同 望

舒 舒べ得ずして草花ちぎる啞女 同 望

高 高臺を明けはあしたり稻の雲 同 望

懷 懷中の匕首斬り試き女郎花 同 望

放 放たんと鳥を哀れむ秋の夕 同 望

浪 浪々れ身と申すべは蜻蛉哉 同 望

孤 孤劍遠く郷を離れて秋暮れぬ 同 望

松 松島や狭霧晴れゆく一づゝ 同 望

下 下りつけば草津なりたり霧深み 同 望

明 明け残る月片われて薄れ野 同 望

月 月お啼く鴉子ありや秋の暮 同 望

獨 獨り書に枕す雨の秋の夕 同 望

知 知かす難らず秋の小雨に眠りけり 同 望

心 心して道れくるな女郎花 同 望

流 流水や故郷の方へ秋の暮 同 望

光 光ある石見えて夕日の秋の水 同 望

遍 遍なく探り七草花乃一を得ず 同 望

平 平壤や敵江は艦す朝の霧 同 望

野 野ふ下り暫く菊に托遊す 同 望

廿八日、曉の寐覺はかき霧空のなほも晴れやらぬに、かくては、草津行の壯圖も、つひに思ひ絶つべかふんかな。例の基にしはし心を慰めけるほど、景色おひくは、立ちあがりて、日の光さへ

射しそめさば、去らばとて、そまゝに結束をばりて、九時半程上る。それもとて、他は旅舎より來り加ふるもの二人、同勢なべて七人となりぬ。

出で立てるはさば、さばりにもあふざりし岨道の、行くに従ひて、嶮しき愈々増さりて、草花また愈々多し、一望とわれど、共に年少れ、氣餘りありて、脚ま懸崖を攀づるに足るもの、つねに、衆を抜いて數丁れ前にあて、遙か下道を顧みて、時は後軍を麾ひて進む。

谷間れ霧消ゆれこる藁家かな

崖腹れ草花を指点して通る

路細く草花踏むで牛を避く

握飯を木蔭の水のほとりに取り出づる頃、そこらの谷々に消え残りたる霧の、見るくふくふと行きて、はては、天と地とを呑みつくし去れば、あたし物凄く、寒さいや増さり來ぬ。

霧暗く谷川れ音瀧のれど

路の邊の覆盆子の實ちぎら食らふが爲先に後れたる途を急ぎて、衆お追ひつたかんとするやどれほど、漸やく、名に高き草津峠へとうちかゝりぬ。

喘ぎく。登り行く峻坂に見渡さるべきこゝの、立木皆枯れはて、白く哀れなる様を留めたるは、十五年前の昔、よなる白根山の、すさまじく噴火しける折、そが灰塵を蒙れるよよるとかや。われ等は只だ當年の猛勢に想到して、ひたすらに魂を打ち消すのみ。

一步まゝ一步、兎角して絶頂に達すれば、國界と記されたる標柱、地藏尊は傍に立ちて、吟杖一揮直ちお上毛の野より得べく、天若し晴れたらんには、遠く兩州の山川の指黙り來りて、おは、聊々雲中の仙觀を摸り得べからんに、折かゝの霧一しやに深くまで、四邊只だ空濛、半町の外天地なきを惜む。

見渡すや見返るや霧濛々より

國界や蜻蛉二州を飛び通ふ

この月十五日に噴火したり、白根山跡を見んとて、ふれより、二里ばかりのまはり道す。道のべ

の草木なんぞ、葉ともいえず、幹ともいえず、泥灰うち着て、しほたれたる様、萎みをかりあふ行末をも思はれて、いとど荒涼たる眺をみ。行くほかに、硫黄精練所として、先の日まではこの山小湧き出でたる硫黄を汲み来て、精練せしどす。なる家棟の、今は軒落ち柱折れて、灰とり出でたる上半部の、僅かに當日の名残を示せるが有り、石塊の巨象の如きが處々に埒もなきなど、地祇一度皆を裂るば、其災厄の及ぶところ、斯くもすさまじくあるものや。

只だ見る、平沙漠々として、一草一木なきのとある、二株三株の白煙、天を衝かんばかりに、簇々と立ち昇れば、鞆々たる雷音山岳を震撼して、天破せ地砕くべく、肝膽をふる寒さに、近くうち寄りて、見窮めんとする脚の顫はんばかりなり。

微うは残れる徑路をたどりて、再び本道に出づれば、これより、下り坂の足踏み速く、五時半、草津に着きて、望雲館といふに宿る。晚餐に酒少しく飲みて、疲れにたれば、散策は今宵只心ばかりもとめて、早く夜具うちかきぬ。

廿九日、朝餉認めて後、一同を連れて、そよ散歩す。先づ湯の澤といふ處に到れば、こゝは癩病患者れ集れるにて、家々の男女乃さま、殆んど人かど疑ふばかり、詳しく書き載せんも厭はし。次より、礫の河原として、地獄もあるべき名に心惹かれ、石川は徑路を四五町ばかりにして到りつけば、彼の世のさま忍ばんよすがなく、只だ山は谷間、大石小石所せきあさり、細流湯川の流れ出でかるばかりの眺め、何れ奇もな程に驚きぬ。

同じ道を歸りて町に出づれば、熱の湯といふが有る、しほと見てあれば、湯守が吹死ならず喇叭の音を合圖とやすふん、見る間、人々多く集まり来て、白布もて手足などを巻くのをすればやがて、浴槽を取り圍みつ、各一枚の板をとりて、一齊に拍子をかしく、湯を攪まひすことや、ありて、湯守が號令めいたる聲も皆々板うち棄て、一齊に湯に入る。かくて三分ばかりにして、湯守がまゝの聲に、逃ぐるが如く、また一齊に縁よりあがる。怪まる、側なる人に問へば、この湯の餘りに熱く、温度は、華氏に百二十度の高きよ上れるが故かと答ふるに、漸やく首肯れめ。熱れ湯を去りて、途すが、頼朝れ病を療し、さりとてなる白旗の湯當時は御座の湯と稱せりと

ぞを觀て薬師堂に登る。

瞰下すまば、市街のさま歴々とて、一々指すべく、遠く音を決すれば、小巒幾たびか起伏して、遙か霧霧の中消え、碧叢白雲、風氣漸々として、秋色漸やく將に深かふんとす。

薬師堂を下りて、町の中を、そこはかどなくめぐり見るに、家の數凡そ二百戸もあらんか、牛肉、蕎麥、雜貨など、旅の用も事欠かぬべく、旅舎の構造も、頗ぶるといふかねど、なべて宏麗なり。午後、一望と、町の鎮守白根神社に詣す。社は山の小高き處にあり。境内一基の石碑立ちて、蕉翁れ句を彫る。

### 夏の夜や餅に明る下駄の音

この夜、日新館といふ向ふの樓上に催されたる軍樂は吹奏を聞きつゝ、夢境をたぐる。

卅日、朝氣爽に、空晴れわらうたるに、七時半、草津の町を辭す。喘ぎ、峠を登るとはむる頃ほひ、濃霧またもや立ちこめて、冷氣膚にせまる。去りといふ、山々、谷々、一二輪の紅葉の奇とあらんにど、ひたすらに、つれなき天の、きも恨まれつ。

### 只だ途の草花になつむ霧深と霧深み笹に聲ある谷路哉

再び、國界にしばし息ぬ。見渡さるべき遙けき景はかくとも、枯木を霧のこたれたる様、さながら、冬枯の雪をかきくれば、如きかあとの眺めあり。

草津峠を下りて、漸やく進み行けば、自づから暗霧の界をこけ出で、前の往たざし折に、見るべかふざりし山々、谷々の風色、今は頗ぶる詩情を鼓し來りて、足の疲れをも忘れ去りつべし。

### 岩屋は二三四輪の紅葉かな

蛇草に入りて蟋蟀も暗死止みぬ

午の日の、今の中々途暑く、谷風は新涼を呼びて、二時半山田は歸り着死は、旅衣脱ぎ換へもあへず、浴室急ぎ急ぎ、槽椽に仰いで臥す。爽快言はんかたなし。

晚餐に慰勞の宴を張る、膳上酒赤く、蕎麥白く、香の物に曉れ女郎花の色を賞づれば、下地には黄昏



の紅葉の澤を掬むを、心行くものか、おのづから、食ひ盡して飲み飽々ば、満腹の經綸を醉餘の管も巻くに至る。

三十一日、深山路乃疲れ、けふの一日はにて、百事懶きに、基を興も乗らず。半日を只ぐ、うつろくどすれば、昨日の歸るを、友の一人が折り來たりし紅葉一枝、床の間に生けするをきて、本流の型も、雅流に趣致を見ずれば、うれに吐けかけむ句もなま。

温泉のつれづれ、知るぬ人を知らずして、午後藤井といふ旅舎の一室を訪ぬ。室に額あり。題して曰く、鳥鳴山更幽と、われこれ、ふと一鳥不鳴山更幽の句を想ひ出で、これを較べ見れば兩個詩人の感愴全く相反して、情景互に衝撞を免かれざるが如く、何れや果して、真趣を捉ひ得たるやと、もくりあくるも、感ひ來たる時、わが心は、いつう山深くさすかひ出でぬ。

るまよ、これハ鳴く鳥と聞きぬ。須臾として、其聲ハ止みぬ。去れど、わが胸襟ハ何れも、更に幽なる響を發しぬ。

感ふて得ず。宿に歸りて、欄を倚りて前山を對する時、われ始めてこれを斷ずるおとを得たり。曰く、これ山の至邃なるによると。

山とてに至邃あり。一鳥の鳴不鳴ハ、たましく以て、其邃を増すれ媒さふんのみ。人至醇の境に到らば、貧富順逆の累逸、おれに於て、は、何かあふんや。窮に逢を求め、樂亦苦を見る。醇ハ益醇に、人間の眞韻こ、に於てや、漸やく發露し來る。

天地、至邃乃地を求め、それ山か。人間、至醇の士誰ぞや。九月一日、々々、一望のこの地を辭せんとするに、郊端に見送りを。

湯の驗を萩ハ山路に試し去れ  
君去りて夜々の虫の音を如何にせん  
一望また二句を残し去る。

湯に残る君朝寒の風ひくか  
紅葉見む君をうつやむ別々な

人ハ影すでに、山陰は没し去りて、それは依然、うち招く薄に留まる。再會の期、旬日を出でざるか  
れと、われだに、猶ほ惜まるべき名残あり。

去る人を蜻蛉継り逐ふごし

二日、一望去りて、われはた、詩趣を談ずるの友なれを如何にせむや。去れる人よハ、心無からんも、長さ夜を、残れるこれには恨あり。つれづれに取堪へて、欄を倚りて、涼々たる水の音ハ温泉五句を聴く時、楨の葉の三つ四つ二つ、小風ハ舞ふて、谷川の方よあくがれ落るるハ、そも何れの里よか、深山のあはきを告げんとすらん。

湯に放詠の聲して長さ夜更けぬ

浴槽に 秋氣清しと歌ひ臥す

湯上りの爽涼たるか朝寒み

浴し了りて暫く對す秋ハ山

湯のほれハ虫の音にても評さん

三日、あゝ庭の山に、月見堂の佳望ありとて、すでに聞き知りたるところかれど、雨に霧に行たおふせざしを、空も晴れたれば、今日ハさて、颯然孤杖を曳く。効端より小路へ折れて、迂登をなこど數町、瀟洒たる自然木の冠門に出づれば、おれは上せる額に鳳山亭の三彫字躍るが如く、藪痕猶ほ新あり。こをくぐりて、二三折すれば、一小亭に達す。これ所謂月見堂と覺しきお、掃灑の人を欠くにや、枯枝など取り散らされて、尺蠖をここに、時を得顔なり。去れど試みに、臺に腰おたて、一度皆を決すれば、遠き山、近き谷、歴々として、呼びかば應ふべく、凄日高く春いて、光芒何となく落索する處、鱗々たる千曲の長流を、遠々黃壤の間に見るかど、氣宇自づから闊く。

若し夫れ、時猶ほ少しく遅く、これに、紅葉滿山の趣を、へたらんには、われや樹々乎として、恐らく羽化登仙しをばりおんをと、はうなれ思ひに、去べしとこお、うち臥せば、花薄亭を圍みて、高き軒に達すべく、夕風ささくくと、折々にわたり來る。

寐轉んで薄摺くと靜觀す

歸り路の夕日淋しく、默然として、自らか筑々たる孤影をみつかしめば、藪の後れ蚊、人珍しく訪ひよぎて、飢ゑたる腹を我血に醫せんと試むる。

一葉紅く、其に取りつく蜻蛉哉

われ夜寐ねんとして、不圖窓を押せば、天高く澄みて、星斗欄干、崇高蕭殺の氣、晴字に滿ちて颯爽として、うれに迫るに、覺えず欄に倚りて容を整せば、月は上弦のすてに、目先の高峯に隠れ落ちされど、殘る影は猶ほ夢に似て淡々、微か此方の半天をこむる處、峯巒伏稀、あきらんとしてあり。谿流石は咽んで、徐かに涼々の聲をなす。試に目頃の愛吟を徳唱すれば、幽韻漫るも浮び動いて、感懷夜と共に長し。薄れ、この時、この情を驅けて、一管は長笛に托したるに、心神縹渺として、天高く飛び去り、われはたわれあざざるべきと、徒らに、わきに彈吹の能なきを嘆ちぬ。四日、曉は小雨、須臾にして止れば、風烈しく、簾を捲け、落葉を誘ひ起りて、秋氣何となく空ち淋し。

午近き頃風も止みさるに、ゆくりなくも思ひ立ちて、父君と共に、郊外の山より七葉を探りされど獲たると、僅の小萩、女郎花、桔梗、薄の四草に過ぎず。これを數多く瓶に投げ込みて、さて後、何れも又颯逸の氣品を賞つ。

やよ桔梗汝が野外の逸氣を語れ

午後雨また頻なり。蕪翁句集を把りて讀む。讀むで漸やく倦みたる頃やひ、瓶前に寐轉んで、戯れよ、女郎花に、品よき女房の色香をなぞらる、桔梗を二八嬌羞の佳人に見立て、猶ほ花薄は、戀にやほれさる病女の如く、萩は花は、無心にして、受くるほしさ小娘おも似さるかあとうち眺む。折らら飛信一片、無事着郷の報を載せて一望よます。終りに、歸り路は、うらや皆夏景色にて暑かまゝとて、

馬洗函千曲の河や雲乃峰

とあり。去らば、雲の峰の彼方よ、かれや今、草津路の草花かどをぞ、よりくお思ひ摘み出でなん。この夜、一顆の西瓜に飽いて、寢にほけば、小用の堪へがたなさに、不圖目覺を。枕を奪つれば、窓外雨の音しどろにして、音に鳴々虫の聲あし。

夜半に覺えて戀をことかじ秋の雨

五日、朝起死出で、楊枝を口に、例は四草に雲ち向ふ。曉の露うけんをすがかければ、花に清冽の趣を欠けたれど、あかしく思ひくづをきたらんが如き様、哀れに、先でた。

草花に夢たどり行く寢覺哉

秋雨さ一日冷にして、外出もあまがた死に、雜誌かど、二冊繕き去る。六日、磯野父子にさあひけんとして、初発で、和歌といふものを讀み試む。

ちぎり來て君去なんど、桔梗花ゆうりれ色あせすあふま

識れる人よりせば、さや目痛兒節もありあんと耻の。

草露のかりの契と思すなよ

去る君は朝顔を戀ふ恨あり

これ君だちには、初めて逢たるにて、漸く睡ひなれたるこの頃を、全一日とどに甲斐なき別れなり。去らばとて、去る人も殘さゆりける。

風もや、寒けくあれはゆあみをへてまさきくとも歸りませさみ

げよ、風もや、寒けきに、われもやがて、歸らんとぞ思ふ。

この夜、臥床お入る前、一ゆあみせんとて、浴室に至れば、折から、女湯を更ひ清むるとて、男湯の方には女も交れりしが中に、年猶ほ若死一人の、あり姿の忍ばる、を、今の色青白く、瘦せ衰ひて、小風かなむ風情なるが有り。いたわしの人の様のな。そも何の恙があるときちまもらる、折か、室の一隅は謠ひ出づるものあり。

惚たかふとて如何なるものう末にや鴉の鳴き別れ

聲高を澄みて、調舒やかに悲し。

あはき、かななる情の炎や。愛命の人れ身と、去とてと、消えんとてしも燃え、燃えんとてしも消ゆるか。人は恆なく、戀ぬて離れ、離れて戀ふれば、双蝶、夢醒かななりがたく、鴛鴦翼摧け易し。上下三千載、天長く地久うして、而も血に啼かめ人の幾うさりぞ。俚歌一曲、聲息んで、われれ耳

には、猶長く、嬌々たる餘韻を留む。不圖、かの女に心つけば、首を垂れて、愁黙すること、殆んど死者に如く、顔色いよく、青々。いたれし人の様かな。そも何れ恙りある。一謠息んで、一謠まゝつゞきぬ。

思ひ出さずややちや惚れやうが薄い思ひ出さず忘れず

調の前の如く、聲猶ほ揚る。わはれ、字とましの世のあらはしや。愛命の人の身を、去りどてい。朝に吳客とちぎり、夕よこまた、越人と睦ぶ。戀に誠なく、情は熱なし。俗語或は、卑語蕪辭の嫌ひあふんも、この誠と、この熱とを要求して、紛々たる輕薄の世、巨鐘の響あり。ゆわれ、世の才子よ、佳人よ、戀の化身よ、卿等須く、卿等のうき身を、「思ひ、出さずよ、忘れ」ざるの戀にやほせよ、然らんば、われ等はた、何處よの薄遇の歎を聞け、何處に斷腸の記を求むべたぞ。われに、この感あり。うの女や如何に。胸中の苦悶いよく、抑危がたさぐ如く、さては、車湯の、涙の露り、一點二點、頬のあたりにしるし。いさはし人の様かな。そも何れ恙ある。謠ふ人になり、さりげあからんも、聞く人にと、意あるに似たり。空中よの時聲あり。それ或者を聴けぬ。去らば、彼女また、失戀れり、あそれ、失戀の人の、あふぬか。猶ほも、哀を聞に堪へてや、かの女は去りぬ。去まご、それの目には、猶ほその人け影あり忽にして、目噴り、齒鳴りて、すさまじき夜刃の姿となじ、忽として、眉下り、頬肥えて、らちさげ死天女の容と化す。あそれ、かの女の、失戀の人が、あふぬか。われに、かの女のた先に、わが推想の當らざらんことを祈る。

七日、浴室に一老翁あり。隣村れものこかや、思ふに、自らの田に、自ら耕して、自ら食ひ、浮世の外れ濁酒に興ずるの人あるべし。うれ、元氣小壯を凌ぎ、よく談じ、よく語る。語りて曰く、われ、すてに、

七十三回の秋を経て、人間有数の長壽を保ちぬ。去まご、一度顧みて越方よ及べば、茫々として夢の如く、人生のいと短くして、はかなきを覺ゆと、その言心肝より發したるもの、如く、言ひをりて撫然たり。こが心靜かよ、淋しき折柄なるにや、われこれを聽きて、今更のごとき一種の感も撃たれぬ。わはれ、去らば、それが今われの心血を濺ぎつゝある云爲と、かの「いと短くしてはかなだ」思ひ出での料に供せんとあせりつゝあるにあらざるべきや。行末は灰とぞはかなむべき、燃ゆる炎に、薪木を投つゝあるにはあらざるべきか。砂上に文字を劃し、あるにはあらざるべきか。老翁の言は偽なしとせば、それこそ、如何にかすべし。

わきに信念なく。われに渴仰あり。佛尊果してありや。神靈果してあきや。生とは如何に。死とは如何に。わが心、遑々如とまで、徒らふ、迷霧を排するに由なし。若し夫れ、斯かかん様の幾春秋を重ねて、一度、過ぎにし方を顧みれば、關山路いと「短くして」眺めいと「はかき」に殘途また長からざるべきを、後に慰藉なきの岸頭に立ちて、前を、何れれ地をか望むべきや。覺束の行末もあるか。わきはた、如何にかせんや。希望なれものは死まどかや。血氣衰へ易く、年波回しがさし。われつひに、生きながら土中に埋められたらんや。

々ふと、空いたく晴れわたりふりに、午後の四時とも覺しき頃、遠雷の音、外山の方に聞えそむると思へば、疾風遽かに吹き起りて、黒雲飛ぶこと矢の如く、忽にして、雨横さまに窓を打ち來て、すさまじきこと云とんうさあ。去れど、須臾にして、風も息先ば、雨まゝ息みて、夜に入りては、月の影さりげなくあかし。

八日、學校の門、開るゝに垂んとして、それは猶や、この地に掩留す。山河七十里、途はるけるがらずとあさず、わが心豈よ長らふとせむや。昨夜、われ、夢に友の長風を見き。かれ聽忽として來て、聽忽として去る。その間、それを請究て、われの歸心を煽るの外、一言の他事よ及ぶものなかりき。覺めて後、こが心すゝるはしく、こが思落るざるよ、うち見やれば、床に紅葉は昔の俤あき、瓶の草

花また色褪せたり。いざ去らば、歸りかんと、いざ去らば、歸りなんや只だ、其の恨とする所は、月見堂に月を觀ず、前山の紅葉を賞さるるおあまきで、それも、心にまかざるべきものなりあらど。午前九時半といふに、父君を促したて、山田温泉を出づ。送るべき人は、すでに送りつくして送らるべき人今いなければ、道はたの薄に何の風情をもえ掬まず。斯くて車は下坂の、矢を射るが如く、臍のあたりこそばゆたほどよ心地よし。

見返るや湯町に秋の日薄し  
暫くにして、曇りたる空のつひに、雨となれば、細滴横さまに衣を穿ちて、蝙蝠傘にてハ凌ぎぬす。車夫に命じて、幌をおかしむ。

車上寒く袖秋雨ふはされぬ

小布施町を離るれば、三四里もあらむ栗林の、枝折れ、實落ち散りてあるに、さては、心憎き昨日の風のすきびかと、眉うちひそむれば、名に高き小布施の栗も、百事こゝに止みぬと、車夫の叫び出でぬ。  
千曲川に至れば、沿岸の小家五六、潰れ倒れて、ろも様、牛乃うち臥せるに似たり。試にこれを踏ばたの翁に問へば、昨日の風を恨みて、ふれを罵ること頻き。やがて渡船に乗る頃ほひ、雨益急となりぬ。

黄稻田の雨横さま馬子哉

薄の雨ちちと鮎の影を見る

午すこし過ぎて、豊野につき、さきの早川屋に書齋食すべもあへず、瀛車の聲するに、停車場へ急ぎてけた、ましく車室へ飛び乗れば、早くも轟々の音を聞く。  
高田驛に着けば、一望、長風を四五人の友の、學舎へ急ぐと覺しく、送り送られて、プラットホームへ出るを見る。折柄、室のあきさるよ、かれ等と呼び入れんとしされど、かれ等ハこをさへ認めえずして、別室に入りぬ。  
おそれ、友はすでお出で立ちて予あるもの、われや今漸くよして、長湯の睡より覺先歸る、思へ

ば、われも後れにたるもれるを、心長くもありけるもれかかと、己が心こゝにまゝすゝろハ、己が思ひ落ちぬ。

直江津に下りて、われ等と會す。それを見て、おのれ等を迎ふんとするもれありとや思ひけむ、波は如何に、瀛船ハ出づべきやなどうち問ふに、あはれ、かばかりも、今宵の波に浮び去らんとぞ人々れ急ぐなるものを、あまにわれも後れまたるものかを、心長くもありけるものかなど、わが心三度すゝろハしく、己が思ひ三度落ちぬ。

そゝろとしく、落ち居ずして、風柳庵に歸りほけば、例の南溟が幅、猶は床の間にかゝりて、達摩大師の風骨舊れ如く、われが寰外に逸氣、滾々として溢れんばかりなるに、暫く相對坐すれば雲霧こゝに初めて開々つとして、心空かかゝに此の凝滞を脱こを得たり。





# 心得

- 一 投書は本會原稿用紙に限り御認めありたし
- 一 長文と雖も全文を寄贈せざれば掲載せざ
- 一 雜誌上より雅號のみを記載することを許せども姓名を必ず編輯委員まで御報道あるべし
- 一 學理上の論說諸小會の記事雅文詩歌等續々寄投ありし勿論言の或は政治を論じ或は徳義に背くもの一切掲載致さざるべし

明治三十年十二月七日印刷  
 全 年十二月十三日發行

編輯兼發行者

内 藤 昌 太 郎

印刷者

月 岡 眞 備

發行所

第四高等學校北辰會

印刷所

活版合資會社

金澤市高岡町三十四番地

金澤市上松原町紙屋小路一番地源圃方

金澤市野田寺町五丁目卅二番地今川昌活方



